

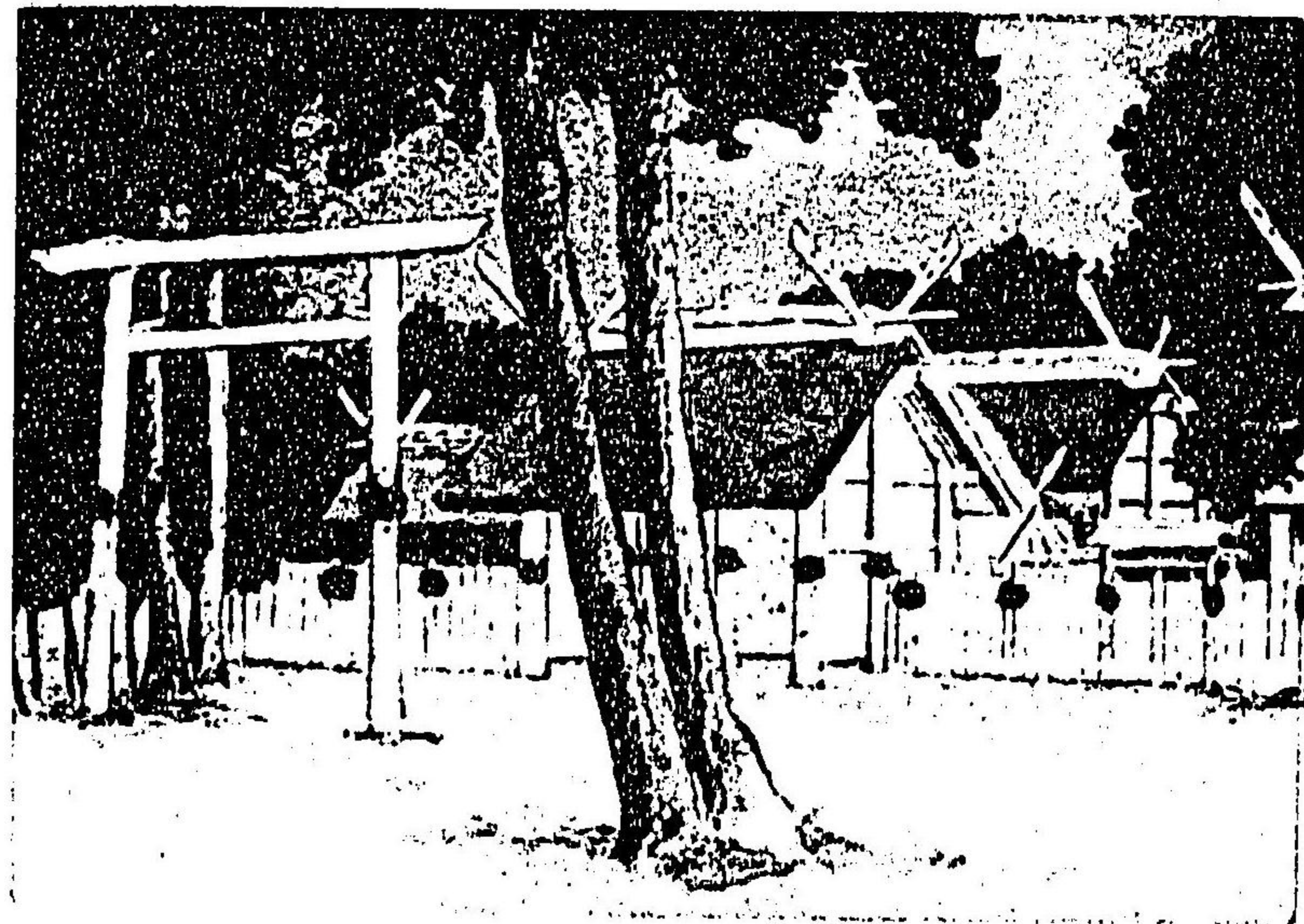
巖谷小波著

日本小宮物語

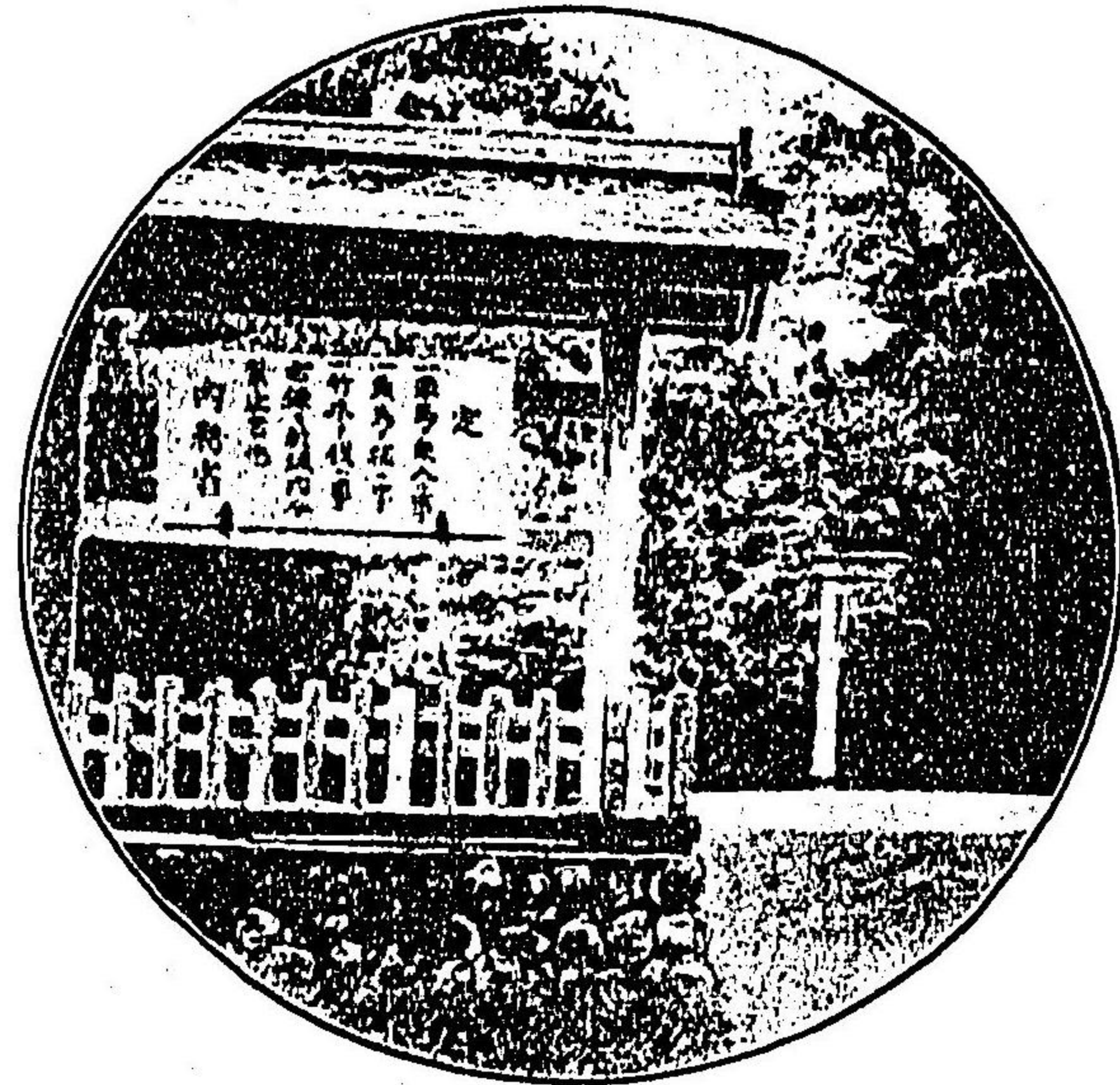
明治
45.4.4
丙亥



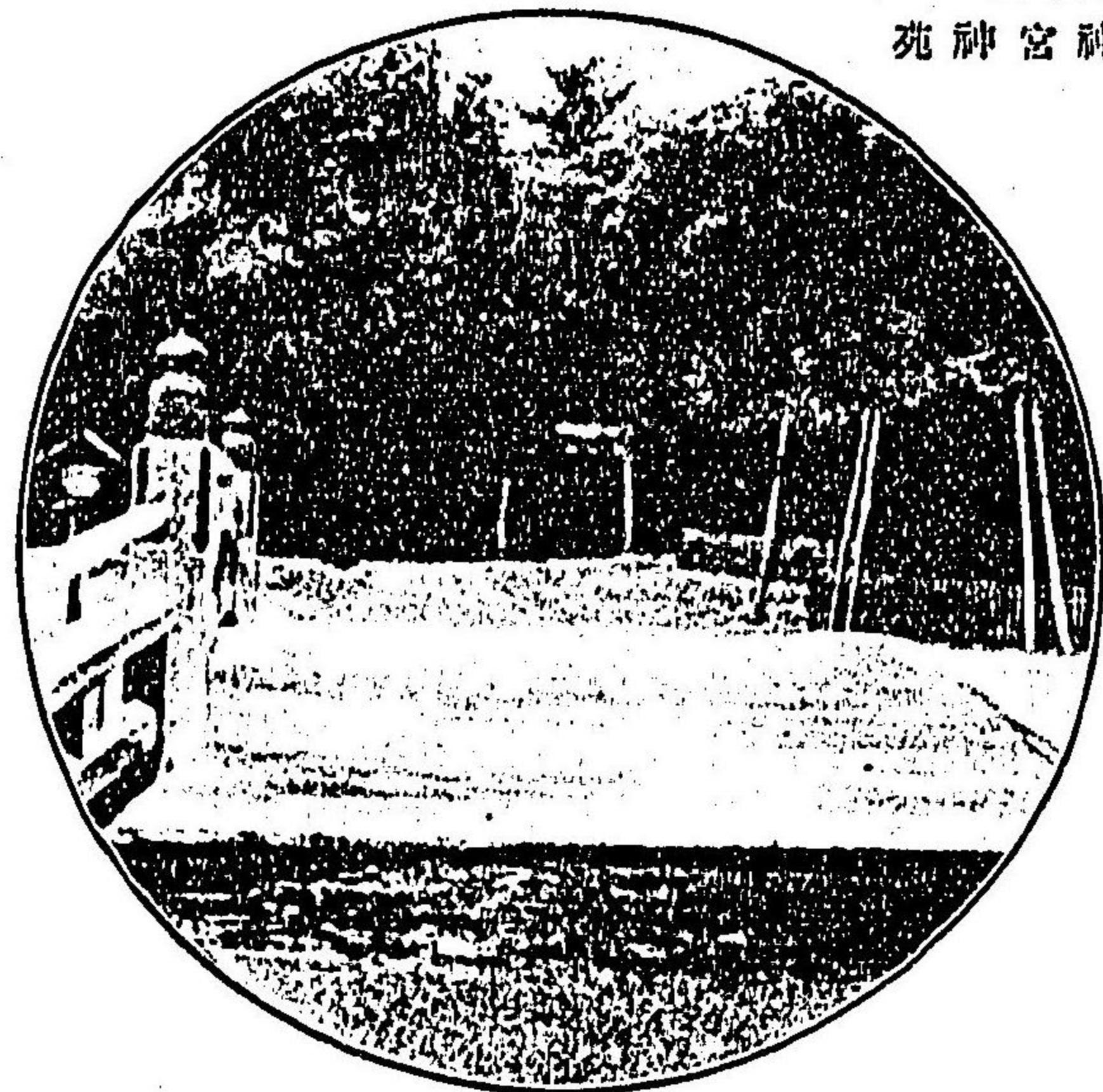
皇大神宮



豐大神宮



苑神宮神大皇



苑神宮神大受登

序

夫れ日本は神國である。されば日本に生れた程の者は、此の日本のお宮の前を、何で素通をして相濟まうよしや急ぎの用事の途中でも、鳥居の前では帽子を取つて、敬意を表せずには居られぬのである。已に敬意を表する上は、そのお宮の祭神の、如何なる御方であるかと云ふ事を、又知らずには居られぬのである。

茲に文昌閣の主人直井君は、元と自ら教鞭を取つて國民教育に従事した人であるが、又僕と所見を一にして、謀るに日本のお宮の祭神を、最も平易に、且つ面白く

少年少女に知らせる事を以てした。

僕も亦其事に就いては、多年考へて居ないでは無かつた。只だ如何にせん僕自身が、あの數あるお宮の由來の、多くは甚だ不案内であるが爲に、まだ指を染める勇氣が無かつた。

然し直井君の切なる依頼は、端無く僕を起たしめて遂に不肖を顧みず、敢て其事に當らしめるに至つた。かくて出来上つたのが即ち此書である。

此書若し幸ひに、神國幾百萬の小國民に迎へられて其敬神愛國の念の、之に依て更に深くなる事もあるならば、著者の本懐は云ふまでもなく、所謂八百萬の神々

も、或は嘉納したまふであらう。

明治四十五年節分後二日、湘南療養の地に於て

巖谷小波

凡 例

- 一 此書は日本お宮嚙と題して、日本中のお宮の由來を、平易に書き列ねたものである。
- 一 但し、そのお宮なるものは、伊勢太神宮を初めとして、官幣國幣の者のみに止めてある。
- 一 随つてその順序も、職員録に掲げてある者に準つた。
- 一 お宮の由來を記するに對しては、最初各社に照會し、直接に寄贈を得た材料にのみ據る事にし、只之に應じられなかつた分のみ、書籍に付いて記す事にした。
- 一、此書を編むに當つて、木村小舟君の助力少からぬ事を、此所に記して謝意を表す。蓋し木村君は平素敬神の念の篤い

人である。助力者として此程の適者があらうか。

一、卷尾に附した『祭神列傳』は、友人谷村伴鶴君を煩はしたものである。蓋し君は此間神官試験を受けて、已に學正に及第した人である。又適當な執筆者ではあるまいか。併せ記して其勞を謝して置く。

一、編者は此書の稿を脱し、將に印刷に著手せんとする時、重病に罹つて長く病床に倒れた。隨て校正に製本に、意に満たぬ所も少くない。之も併せて讀者に謝して置く。

明治四十五年二月

編者識

日本お宮物語目次

皇大神宮	一
官幣大社之部	
賀茂別雷神社	五
賀茂御祖神社	七
男山八幡宮	九
松尾神社	一一
平野神社	一二
稻荷神社	一四
大神神社	一五
大和神社	一六

目次

一

石上神社	一八
春日神社	二〇
廣瀬神社	二二
龍田神社	二四
丹生川上神社	二五
枚岡神社	二七
大鳥神社	二八
住吉神社	三〇
生國魂神社	三一
廣田神社	三二
氷川神社	三三
安房神社	三五

香取神社	三六
鹿島神社	三八
三島神社	四〇
熱田神社	四二
日吉神社	四五
日前神社	四七
國懸神社	四七
出雲大社	四八
宇佐神社	五二
霧島神宮	五四
伊弉諾神社	五六
香椎宮	五八

宮崎宮 六〇

檜原神宮 六二

平安神宮 六五

氣比神宮 六六

鹿兒島神宮 七〇

鵜戸神宮 七一

淺間神社 七四

建部神社 七六

札幌神社 七八

宗像神社 七九

吉野宮 八一

臺灣神社 八四

官幣中社之部

八坂神社 八七

白峯宮 八八

赤間宮 九二

水無瀬宮 九四

鎌倉宮 九五

井伊谷宮 九九

八代宮 一〇三

梅宮神社 一〇五

貴船神社 一〇七

大原野神社 一〇八

吉田神社 一〇九

日枝神社 一一〇

北野神社 一一三

月山神社 一一五

金鑽神社 一二六

多賀神社 一一八

竈山神社 一二〇

筥崎宮 一二一

阿蘇神社 一二三

金崎宮 一二六

大宰府神社 一三三

諏訪神社 一三四

生田神社 一三六

官幣小社之部

長田神社 一三七

海神社 一三八

英彦山神社 一三九

住吉神社 一四〇

嚴島神社 一四一

大國魂神社 一四四

波上宮 一四五

竈門神社 一四六

別格官幣社之部

談山神社 一四九

護王神社 一五一

小御門神社 一五二

菊池神社 一五四

湊川神社 一五七

名和神社 一五九

阿部野神社 一六〇

藤島神社 一六三

結城神社 一七〇

豐榮神社 一七三

建勳神社 一七四

豐國神社 一七五

東照宮 一七六

常磐神社 一七八

國幣中社之部

照國神社 一七九

靖國神社 一八二

靈山神社 一八三

梨木神社 一八五

東照宮 一八七

四條畷神社 一八九

唐澤山神社 一九〇

上杉神社 一九一

尾上神社 一九二

敢國神社 一九五

淺間神社 一九五

寒川神社 一九七

鶴岡八幡宮 一九七

玉前神社 一九九

南宮神社 二〇一

貫前神社 二〇二

二荒山神社 二〇二

二荒山神社 二〇五

都々古別神社 二〇七

伊佐須美神社 二〇八

志波彦神社 二〇九

鹽竈神社 二一〇

大物忌神社 二一一

若狹彦神社 二二三

氣多神社 二二四

射水神社 二二五

彌彦神社 二二六

出雲神社 二二七

籠神社 二二八

出石神社 二二八

宇倍神社 二三〇

熊野神社 二三二

水若酢神社 二三四

中山神社 二三四

安仁神社 二三五

吉備津神社……………二二七

熊野座神社……………二二七

忌部神社……………二三〇

大麻比古神社……………二三一

田村神社……………二三三

大山祇神社……………二三五

土佐神社……………二三六

高良神社……………二三七

西寒多神社……………二三八

田島神社……………二四〇

住吉神社……………二四一

海神神社……………二四二

金刀比羅宮……………二四三

大洗磯前神社……………二四四

酒列磯前神社……………二四六

美保神社……………二四七

伊太郎曾神社……………二四八

新田神社……………二四九

都々古別神社……………二五〇

函館八幡宮……………二五二

生島足島神社……………二五三

國幣小社之部

砥鹿神社……………二五六

小國神社……………二五七

水無神社	二五八
駒形神社	二六〇
岩木山神社	二六一
出羽神社	二六二
湯殿山神社	二六三
古四王神社	二六四
白山比咩神社	二六五
度津神社	二六六
大神山神社	二六八
日御碕神社	二六九
物部神社	二七一
沼名前神社	二七三

玉祖神社	二七五
都農神社	二七七
枚聞神社	二七八
眞清田神社	二八〇
伊和神社	二八二
神部神社	二八三
淺間神社	二八三
大歳御祖神社	二八三
戸隠神社	二八五
諏訪神社	二八五
菅生石部神社	二八六
須佐神社	二八七

附 録

祭神列傳

日本お宮物語

巖谷小波編

皇大神宮

(三重縣度會郡宇治山田町五十鈴河上鎮座)

五十鈴川

神代ながらの神路山には、老樹森々として繁り、五十鈴川の清き流れも、遠きむかしを私語くかのやうです。此の川上に鎮りますお社こそ、實に大日本帝國の宗廟として、皇室の御崇め最も深く、沼木郷山田原に鎮座まします豊受宮と並稱して、二所大神宮と申し上げます。

豊受宮

皇大神宮は、むかし度會宮、磯宮、宇治宮など、申し上げます。また拆削五十鈴宮、伊勢大神宮とも稱へ奉つたのを、後世豊受大神宮を外宮と稱へまつるにつきて、専ら内宮と申し、朝廷の御尊崇も自ら他と異つて居ります。

皇大神宮の御祭神は、天照大神(御靈代八咫鏡)、相殿の神二座、左は天兒屋

八咫鏡

伊勢大神宮

根命(御靈代弓)右は天太玉命(御靈代劍)であります。

さても當大神宮の起原を伺ふに、天孫瓊々杵尊御降臨の節に、大神御親ら八咫鏡を授け賜はり、それより世々相繼がせられて、殿中に齋き祀り給ふのでありましたが、崇神天皇様は、殊更敬神の御念慮深く渡らせられ、皇女豊鋤入媛命に仰せて、大和國笠縫の邑に移させ、更に八十餘年を経て、垂仁天皇様の二十五年に、皇女倭姫命に仰せ下されて、御鎮座の地を求めさせられたのです。

そこで倭姫命は、神勅に従つて、此の五十鈴川上に、神宮を建てさせられたのが、そもそも其起元であります。由來大神は、皇室の大祖にましく、歴朝の天皇の崇奉も他社に越え、むかしは皇女を以て齋宮となされて、神宮に仕へしめられ、古來品位の階も、一宮の稱もなく、又名神の祭にも與り給はぬのは、全く尊くおられられて、他の神々と伍し給はぬからであります。當大神宮では、豫め宮地を二所に定め、二十年毎に、正殿、寶殿、外幣殿等を、皆新材を以て造營し、そこに御遷宮申上げるので、之を式年と呼び、

九月十五日を以て正遷宮の式日と定め、今に至るも之を改められませぬ。

又祭祀は、二月十二日を祀年と云ひ、四月九月の十四日を神衣、六月十七日を月次、九月十七日を神嘗と云つて、何れも嚴かに行はれます。

次に外宮、即ち豐受大神宮は、皇大神宮を距ること西北五十町ばかりの地に鎮座せしめし、御祭神豐受大神は、大御神の御僕都神で、伊弉諾尊の御子なる、和久産巢日神の御子に當らせられます。

瓊々杵尊が御降臨の時に、天神の詔を以て、此の神の御靈を副へて下させられ、丹波國與謝の比沼の眞名井に御鎮座おらせられました。雄略天皇様の御代に、皇大神の託宣によつて、此の地に移されたので、實に皇大神宮の笠縫邑から、五十鈴川上へお遷り遊ばされてからは、殆ど五百年の後のことであります。

かくて此の宮にも齋宮を置かれ、朝廷の御崇敬は、大神宮に譲らず、唯朝祭使祭を行ふ時と、齋王參詣の際に、此の宮を先にして、大神宮を後にするだけの相違があります。

あ、此の二所大神宮は、實に我帝國の宗廟であります。日本國民たる者は、必ず一度此の兩宮に参拜して、宏遠なる國家の皇謨を感謝しなければなりません。之特に當宮を官幣大社の前に掲げて、讀者の注意を促した次第であります。

官幣大社之部

賀茂別雷神社

(京都市上賀茂郡上賀茂村大字上賀茂鎮座)

別雷神
賀茂山

當社の祭神は別雷神、又の御名分土神、或は事代主之神と申し、實に山城國開拓の神功深き大神であります。當社の御鎮座は、神武天皇様の御代に、神山即ち賀茂山に祀つたのが起りで、欽明天皇様の御代に走馬を奉りました、之ぞ賀茂祭の起原で御座います。

葵祭

賀茂會は此の時より、毎年國人によつて行はれ、國祭と呼びましたが、仁明天皇様の和銅年中に中祀と定め、國司の臨檢あることとなりました。むかしは單に祭と云ひましたが、後に葵祭と呼ぶやうになつたのは、其祭の當日社殿、神輿をはじめとして、神職一同の裝束まで、一切葵の葉で飾るからであります。

又天武天皇様の六年に、山城國に仰せて、神殿造營の勅命を下され、夫れ

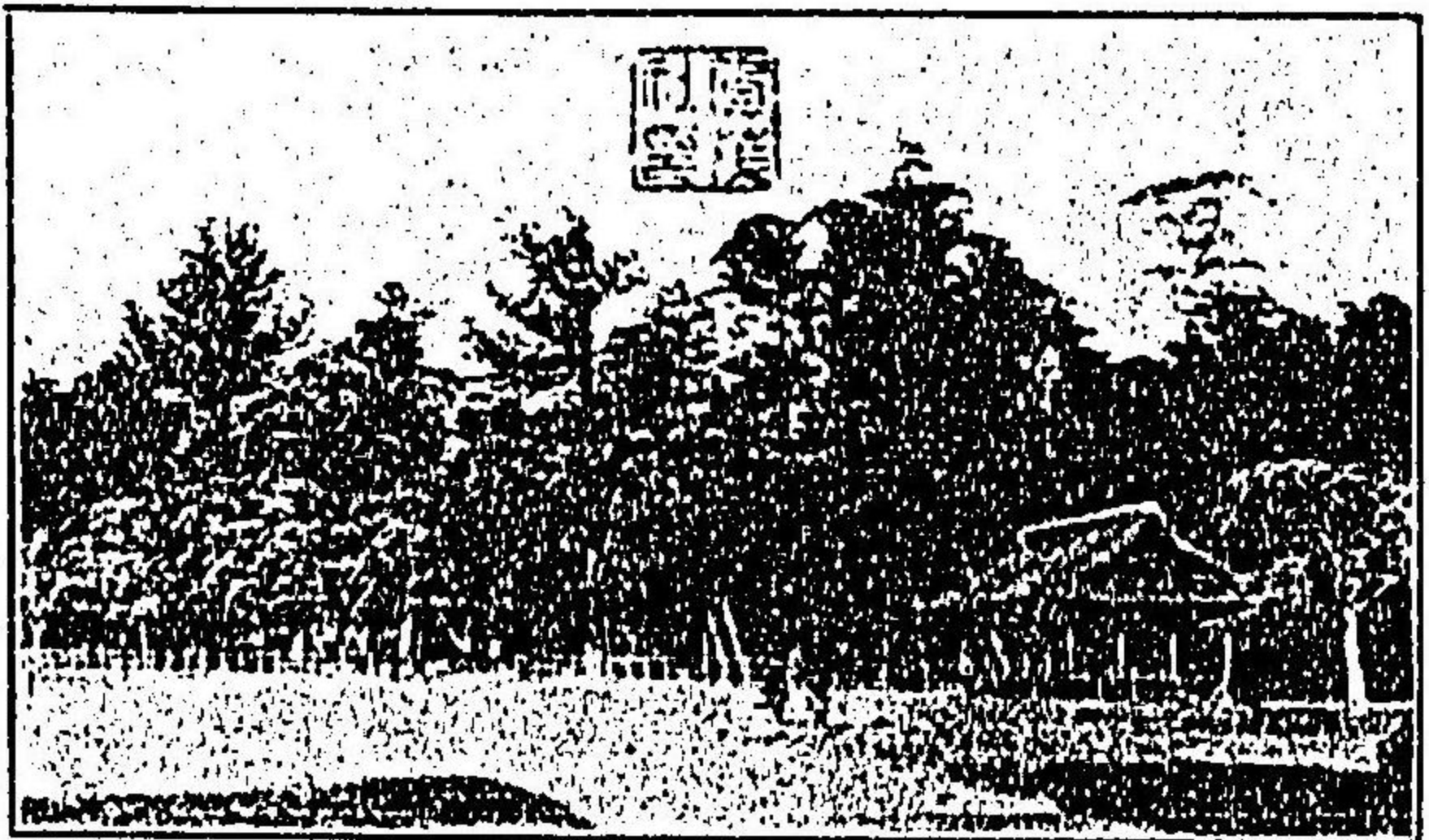
賀茂別雷神社(官幣大社)

よりは伊勢神宮同様、式年造營のこととなり、現在の神殿は、文久三年孝明

天皇様の御造營にかゝるものであります。

孝明天皇様の御宇に、神田を寄附せられてから、公私の寄進頗る多く、六十五ヶの庄園を數ふるに至り、又桓武天皇様の延暦十三年には、勅使を遣して遷都の議を告げられ、十二月行幸あらせられましたが、之ぞ当社へ行幸の始で、夫れより圓融天皇様の御代になつて、当社行幸のことは、歴代の御恒例となりました。

(居鳥ノ二) 文久三年三月十一日、孝明天皇様の行幸の時は、將軍徳川家茂が、特に在京の諸侯を率ゐて供奉の任に當り、今上天皇陛下には、明治元年と、同十年二月にと、前後三度まで行幸遊ばされたのであります。



桓武天皇
行幸

今上天皇
陛下

賀茂御祖神社

(京都府愛宕郡
下鴨村鎮座)

本社古から山城國の一の宮と呼ばれ、明治四年官幣大社に列せられました。祭神は西の御殿が賀茂建角身命で、東の御殿は玉依姫命であります。玉依姫と仰しやるのは、建角身命の御子で、かの上賀茂社に鎮まします、別雷神の御母君でいらせられます。

さて建角身命は神皇産靈神の御孫に當らせられ、神武天皇様の御東征の砌には、八咫鳥となつて皇軍の道案内をなされ、時には勅降使として、賊軍の陣に赴かれ、御功績の多かつた事は申す迄もなく、頗る武勇に渡らせられ、義勇奉公の念に富ん



賀茂建角
身命
玉依姫命

八咫鳥

でさらつしやりました。

賀茂御祖神社(官幣大社)

王城の鎮

かう云ふ尊い神様ですから、桓武天皇様が、都を山城にお遷し遊ばすと共に、此の御社を以て、王城の鎮護となされ、御崇めも深くわらせられたので、いよく盛大になつたのであります。

されば延暦十三年に、桓武天皇様が御幸遊ばされてから、歴代の天子様も、引ついで折々行幸になり、今上陛下には、明治二年に行幸せられ、皇后陛下や皇族の方々も、度々御参拜遊ばされました。

本社には毎年五月十五日、葵祭の神事を行はれます。其事の起りは、欽明天皇の御時に、天下に雨降り風吹き、それが幾日も続きましたので、天子様は御心配の餘り、占者に仰せて、其譯をトはせなさいますと、之は全く賀茂神の祟だと知れましたから、吉日を選んで馬に鈴をつけ、人には猪の面を被らせて、お祭りを営ませ、天下の豊年を祈らせられました。之が今の葵祭のはじまりです。この祭の當日には、葵の葉を役員に冠につけ、又社前をも葵の葉で飾り、車籠にも同じく葵の葉を懸けるのが、むかしからの例となつて居ます。

境内の風

本社の境内には、糺の森、瀬見の小川、御手洗川、泉川などの名所がありまして、歌に文に又物語に、舊くから人に知られた名高い所です。

男山八幡宮

(京都府綴喜郡八幡町大字八幡庄鎮座)

當社の創立は、清和天皇様の貞觀元年で、元石清水八幡宮と云ひ、祭神は應神天皇、比賣神、神功皇后の三柱です。古から弓矢の神として、歴代天皇より武將軍人に至るまで、御崇敬の念頗る厚く、殊に天子様にして、當宮に行幸遊ばされたのは、圓融天皇様の天元二年以來、實に四十五回の多きに上り、其他の御幸行啓は、殆ど數へ盡すことも出来ない程であります。

中にも後宇多天皇様の如きは、文永十一年十一月、當宮に行幸せられて、蒙古軍の退去を祈らせられ、次で弘安四年六月には、龜山上皇が御参拜になつて、一夜御祈念遊ばされましたが、案の定神驗忽ち現れ、蒙古の賊船は、悉く大風に漂ひ流されて、時の間に残らず滅びてしまひました。

又近年では、文久三年の四月に、今上天皇陛下の父君なる、孝明天皇様が、

男山八幡宮(管幣大社)

清和天皇

天皇の行幸四十五回

蒙古軍退去

攘夷の節

勅祭

特別保護
建築物

日本お宮物語

此の男山において遊ばして、時の將軍家茂に、攘夷の節刀を賜はらうとしたのは、名高い事で、其他御即位、年號の改り目、宮殿の造營、御不例等の時は、屹度幣帛を獻せらるゝ例となつて居ります。

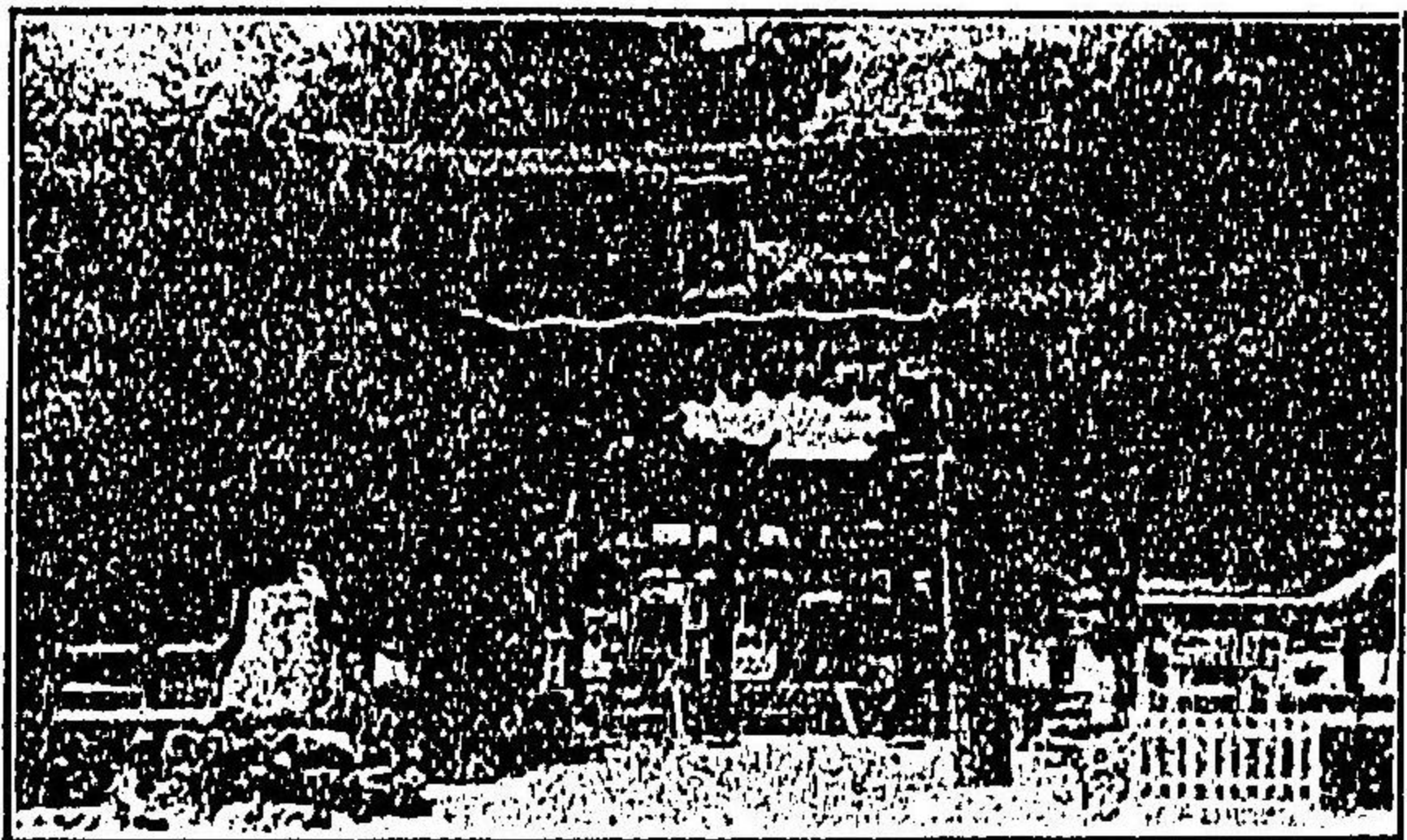


當宮の御祭典で、放生會と臨時祭とは、共に勅祭で、臨時祭の方は、毎年三月に行はれ、非常に賑かでしたが、維新後は中止せられ、放生會は明治十七年から、男山祭と改め、舊儀再興の儀仰せ出され、毎年九月十五日に、壯嚴なる祭式が行はれるのです。

當宮の社殿は、創立以來三度焼けて、今は寛永八年に、將軍家光の手で營まれ、非常に見事な建築です。從に内務大臣から、特別保護建築物に定められました。

松尾神社

(京都府葛野郡松尾村大字上山田鎮座)



納しました。

松尾神社(管幣大社)

當社は初め松尾山中の楢谷と云ふ所にありました。上古からの御鎮座ですが、聖武天皇様の天平三年に、特に大社に列せられ、又桓武天皇様の延暦三年には、遷都の故を以て從五位を授けられ、尼更に清和天皇様の貞觀七年には神田を獻じ、翌年正一位に進め、一條天皇様の寛弘元年には、當社へ行幸遊ばされましたが、之ぞ松尾行幸の始であります。

其後後鳥羽天皇様の建久四年には、御製の歌三十章を納めさせられ、次で源頼朝公は、社頭に調して願文を捧げ、黄金一百兩と、神馬一疋とを獻

源頼朝

松尾行幸

楢谷

靈猛神

造酒の神

むかしは神領千二百石ありましたが、明治維新の際に、改めて官幣大社に列せられ、毎年四月二日例祭を施行します。古來此の神は、神徳顯著にましまし、世人敬つて靈猛神と稱へ奉ります。殊に延暦年中には、京都の守護神と定められて、各種の天災起る毎に、必ず使を遣して幣帛を賜ひ、上下の尊崇極めて厚く、造酒家は造酒の神と敬つて、遠近から参拜する者が多いので

雷峯

又本社またほんの東南とうなんなる大山おほやま昨命あきのみこと、市杵いちき島姬命しまひめのみことを祀る前には、祝詞舎しゆしよを設けられ、左右さうりゆうに長廊ちやうらうを建て、内うちに本宮ほんみやうと新宮しんみやうとがあり、其他あほか神殿しんてん、拜殿はいてん、樓門ろうもん、神庫しんく、社務所しゃむしょ、神饌所しんじゆんしょ、鳥居とりいの類も、一絲亂れず井然として列んで居ます。當社の社域たうしやは、郡ぐんの西南部せいなんぶに位置ちゐちを占め、後方こうほうの山やまを雷峯らいほうと呼び、杉すぎや松まつの老木らうぼくが一面めんに繁茂はんばうして、實じつに神さびた境内けいんであります。又社頭またしやには櫻さくらと楓かへとが枝えだを交まじへて、春秋しゆんしゆの二季ふたきには、晝あひるも及およばぬ景致けいぢを添そへて居ゐます。

平野神社

(京都府葛野郡衣笠村大字小北山鎮座)

六所宮

當社たうしやは平野大宮ひらのほみやとも申まをし、元もとの本宮ほんみやうは、衣笠山東麓えがさやまとうすの、小松原村こまつはらむらにありまして、六所宮むつしよみやに云いひ、俗ぞくに乾宮けんみやうとも呼よびましたが、今いまも六所明神むつしよみやうしんと云いふ舊跡きうせきが御座ございます。

今木御神殿

今木御神殿いまきごしんてんと云いふは、元もと大和國高市郡今木嶺おほやまとのくにたかちひのぐんいまきのねにあつたので、四柱よはしらの祭神まつしんは、何れも貴い神々かゝいしんです。即すなはち天御中主神あめのみなかつぬしのかみ、高皇產靈神たかみむすびのみかみ、神皇產靈神かみむすびのみかみ、可美葦牙かみあしは彦舅神ひこぢうのかみが夫それであります。

久度御神殿

久度御神殿ひさどごしんてんと云いふは、元もと大和國平群郡久度村おほやまとのくにへいぐんぐんひさどむらにありまして、祭神まつしんは、天之常立神あめのとこたてのかみ、國之常立神くにのとこたてのかみ、豐國主神とよくにぬしのかみ、相殿あひだんは大槲和氣尊おほくわきのみこと、即すなはち應神天皇おたけのかみ様の四柱よはしらであります。

古關御神殿

古關御神殿ふるせきごしんてんと申まをすは、元もと大和國平群郡立野越關屋おほやまとのくにへいぐんぐんたつしのこしりやにありまして、祭神まつしんは、堅土根神かたつちのねのかみ、角狝神つめひのねのかみ、意富斗能地神おほふとのかみ、相殿あひだんは大雀命おほすさののみこと即すなはち仁徳天皇にとくのかみ様の四柱よはしらで、一ひとに平野大明神ひらのあきみやうしんとも申まをします。

日靈御神殿

日靈御神殿ひるみたまごしんてんは、元もと大和國葛下郡日靈嶺おほやまとのくにかつしもりのひるみたまのねに鎮座ちんざせられたので、四柱よはしらの祭神まつしんは、面足神おもたりのかみ、伊佐那岐神いさなぎのかみ、天照大日靈神あまてりひるみたまのかみ、天之忍穗耳尊あめのしのほみみのかみであります。

平野神社(官幣大社)

即ち當社の御祭神は、何れも國家に御功績の多かつた神々ですから、朝廷の御崇敬の深いことは、今更申す迄もありません。

稻荷神社

(京都府紀伊郡深草村宇陀山鎮座)

當社の祭神は下社宇迦之御魂大神、中社佐田彦大神、上社大宮能賣大神と、都合三座あらせられます。元明天皇様の和銅四年二月に、はじめ三ヶ峯に現れ給ひ、後花園天皇様の永享十年正月五日に、足利義教の祈願によつて、今の地に御遷座申したと云ひます。

歴代の天皇は、當社御崇敬の念厚く、後三條天皇様以降、當社へ行幸なされた例は、甚だ多いので、風雨の害を除き、五穀の豊穰を祈らせられた事は、歴史上最も著名であります。

當社は其所在地が伏見街道に沿って居ますので、一に伏見稻荷とも呼ばれ、毎年五月七日の例祭は、儀式頗る厳しく、社前には東海鐵道の稻荷停車場があり、又京都の七條驛からは、二哩足らずで達します。

元明天皇

伏見稻荷

大國主神

天皇の守護神

高皇產靈神

大神神社

(奈良縣磯城郡三輪町大字三輪山鎮座)

當國三輪村の三諸山に鎮りまします大神神社は、かの大國主神の和魂大物主大神であります。即ち大國主神は、自ら幸魂奇魂を此の山に齋き祀らせられ、後代天皇の守護神とならせられた事が、舊記に残つて居る位で、實に神代からの舊社で、又當國の一の宮であります。

さて大國主神は、葦原の中國に君臨して、大いに天下を経營し、惡神邪神を平げ、療病禁厭の法を定め、後此の國を天孫に譲つて、幽界の事をお掌りなされましたが、併し其和魂にてまします大物主大神は、よく御本體の御事業を援けて、國家經營の大功を樹てられ、事終つて後、八百萬神を帥つて、天上に昇らせられ、仔細を天神の御前に奏聞なされました。

其時高皇產靈神は、大神に勅を下させられて宜ふやう、『汝は更に八百萬神を率ゐて、再び中國に下り、以て天孫を守護し奉れ』と、此の命を受けて、再び中國に歸り、陰ながら天孫の御事業を援けられ

大神神社(管幣大社)

大田田根子

たのであります。かくて崇神天皇の御代に、疫病が流行しました時、天子様の御枕邊に立つて、此の度の災難は全く我心である。就ては我子の大田田根子を祀り給はば、病氣が止むばかりでなく、天下太平になつて、海外の諸國も、自ち歸伏するであらうとお告げになりました。

そこで天子様は、大神の仰せのまに、大田田根子なる者を捜し求めて、祭祀のことを掌らせなさいますと、案の定疫病は止み、且つ任那の人や、其他の外國人が歸化しました。

帝國の守護神

即ち大神は、我帝國の守護神にましく、猶海外諸國をも統べさせられ、疫病を攘ふなど、神徳の廣大なることは、萬世の後までも、人民の崇め尊ぶ所でありませす。

大和神社

(奈良縣山邊郡利村大字新泉鎮座)

當社中の御殿に齋き祀る大神は、出雲國杵築の大社に鎮ります、大己貴大

大己貴神の荒魂

杵築大社の別宮

八千戈大神御年大神

神の荒魂として、最も健く、荒く、進み現はる、御功德の事ばかり掌り給ふ神靈で、神代にありては、國土經營の大事業を成し遂げ、後には代々の玉體につぎ、大殿の中におはしまして、寶祚の萬歳を護らせられるので、またかの杵築大社の別宮とも云はれて居ります。

左の御殿に齋き祀るは、其國土經營の御時に、八尋の廣矛を以て、四方の惡神共を打平けて、武名を揚げさせられた、八千戈大神で、又右の御殿に齋き祀るは、人民の食ふ種々の穀物を守らせられる、御年大神であります。

斯くの如く、國家に大功ある神々ですから、大むかしには宮中におかせられても、皇祖天照大御神と共に、厚くお祀りなさいましたが、崇神天皇の御代になつて、倭の國磯城の水垣宮から、天照大御神をば笠縫邑に、大國魂大神と他の二神をば、市磯邑とに、夫れくお移し申されました。笠縫も市磯も、時の大宮からは、其距離も遠くはなかつたのです。

崇神天皇様は更に又皇女に仰せて、親しく齋き祀らせ給ひ、かくして當社は創建せられたのです。そして此の時齋王に立たせられたのは、淳名城入姫

淳名城入姫命

大和神社(併帶大社)

長尾市

命と申して、實に天皇第四の皇女であります。所が其後、大神の神教に従つて、市磯の長尾市と呼ぶ人を、神主として祭らせ給ふこととなりました。之ぞ神主と云ふもの、始めです。此の長尾市なる人は、神武天皇様にお仕へ申して、特に功績の多かつた、かの椎根津彦の後裔、倭の國造大倭氏の祖先で、此の邊の土地を領して居た名族であります。

後醍醐天皇

又當社の神階は、後醍醐天皇様の寛平九年迄に正一位となり、明治四年官幣大社の社格に列しました。

石上神宮

(奈良縣山邊郡丹波市町大字布留鎮座)

布都御魂大神 布留社

石上神宮は、布都御魂大神をお祀り申してある名高いお社で、昔は布留御魂神社とも、たゞ布留社とも申しました。山に近く森に圍まれて、如何にも清らかな尊い神社です。

さても皇祖神武天皇様が、日向をお出ましになつて、大和國へお入り遊ば

されやうとした時に、熊野までお進みになりますと、皇軍は悉く悪神の毒氣に觸れて、一時生氣を失つてしまひました。

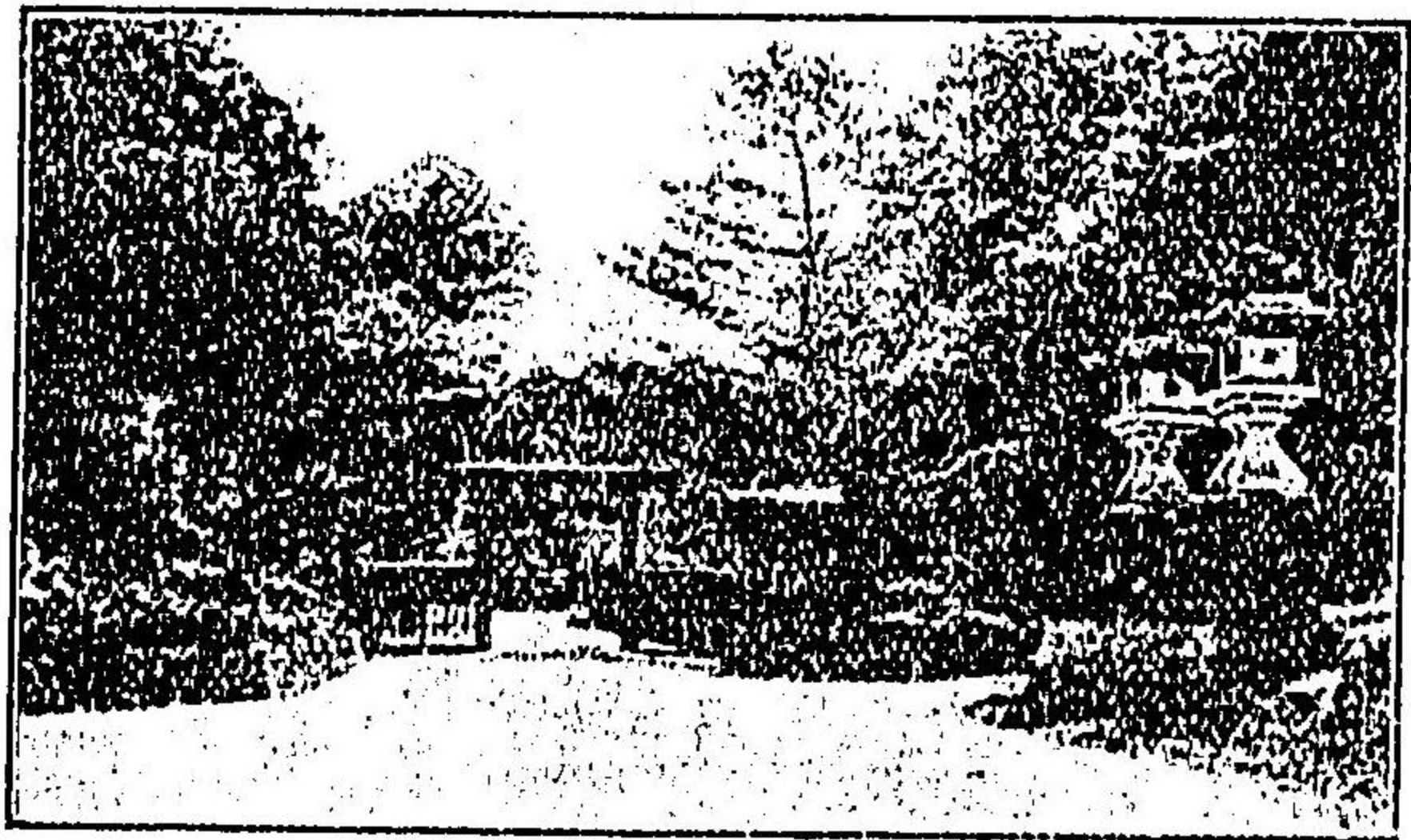
布都御魂の神劍

すると高天原の天照大御神様は、武甕雷神に勅を下させられ、曾て中國の平定にお用ひ遊ばされた、布都御魂の神劍を降さしめられたのです。

そこで武甕雷神は、高倉下と云ふ者に仰せて、上此の劍を天子様に献上させるが最後、劍の靈威忽ち現はれて、皇軍は俄かに眠りより覺めた様に、神躍り上つて進み、物の見事に悪神共を滅して、士氣も大いに振ひました。

宮 天子様は深く此の神劍の靈威を尊く思召し、後に都を橿原に奠めさせられるに當つて、宇摩志麻治命に仰せて、殿内に祀らせ給ふこととなりました。所が崇神天皇の御代になつて、劍の神威を潰すことを恐れられ、伊香色

宇摩志麻治命



石上神宮(官幣大社)

石上大神

雄命に勅を下して、大和國石上邑布留の地に神宮を營み、之を石上大神と稱へて、永く國家の鎮護となされたのが、取りも直さず石上神宮の起原であります。

天の十握の御劍

また素戔雄尊が、出雲國の簸川上で、八岐の大蛇をお斬り遊ばされた天の十握の御劍は、別の名を天羽々斬劍とも、蛇之躰正とも云つて、はじめは備前國赤阪郡に鎮座ましゝたのを、仁徳天皇の御代に、此の石上神宮に合せてお祀りになりました。

御神寶

此の神宮の御神寶には、國寶となつて居るものが、澤山御座いますが、殊に日の御楯、七枝の鉾、梓の弓、古鏡、曲玉の類は、最も貴い寶物であります。

春日神社

(奈良市春日野町鎮座)

祭神四座

當社の祭神は都合四座で、武甕槌命、齋主命、天津兒屋根命、比賣神を祭り奉り、御本社は南面四所の社で、一の鳥居を距ること十五丁の東にありま

稱徳天皇

す。

さても當社は、稱徳天皇様の神護景雲二年、勅命によつて、祭主神宮預外從五位下中臣地栗連時風、同造宮預外從五位下中臣地栗連秀行の兩職を以て特に祀らしめられた文武主宰の大神で、歴代の天皇皇后兩陛下、各皇族殿下文武の名臣の參拜は、一々數へ擧げること出来ません。又國民としては、當社に參拜しなければ、人後に墜つるの恐れがあることさへ云はれて居る位です。夫れと云ふも、國を治めるにも、家を濟ふるも、又身を修めるも、皆春日明神の御神徳に俟たねばならぬからであります。

武甕槌神

當社の御祭神の内、武甕槌命は、煥速日命の御子で、非常に御勇邁な御氣質を帯ばせられ、天孫降臨に先立つて、二三の神を遣し、大國主神に國讓りのことを勧められました。其神達は、何れも大國主神に臣事して、更に高天原へ對しては、何の復命もせられませんでしたので、遂に武甕槌神は、天照大御神の勅命を奉じて、葦原の中國に降り、首尾よく其任務を果して復命せられました。

春日神社(管帶大社)

經津主神
天津兒屋
根命

石燈籠
金燈籠

若宇加能
賣神

大忌神

日本お宮物語

又齋主命は、別の御名を經津主命とも云つて、磐筒男神の御子です。武甕槌命と共に、此の國に降つて偉功を奏せられ、天津兒屋根命は、與臺産神靈の御子で、文字の祖神と崇められ、かの岩戸の變に際して、稱辭を申させられて、大神の御感あつたのは、此の神の優美なる辭の致す所でありました。當社の寶物には、國寶となつて居るものが澤山ありますが、就中各種の面は最も名高く、境内には千九百八十九基の石燈籠と、九百九十八個の金燈籠が立ち并んで、只さへ神嚴な境内に、一入の偉觀を添へて居ます。

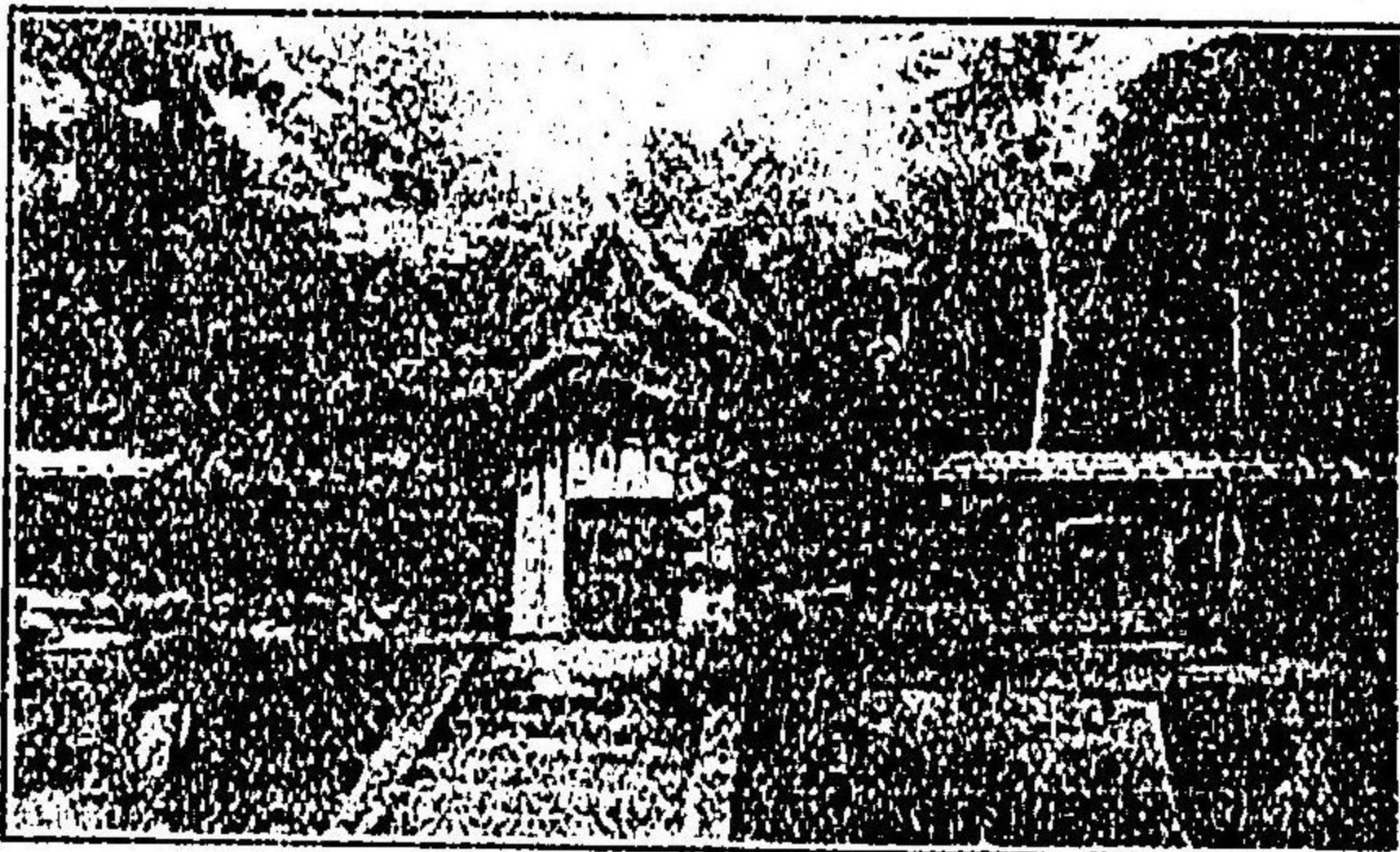
廣瀬神社

(奈良縣北葛城郡河合村大字川合鎮座)

本社の御主座は、若宇加能賣命にましく、別に相殿が二座おはしまして、左には櫛玉神右には穗雷神がお祀りしてあります。一體此の若宇加能賣命と申すのは、亦の御名を豐宇氣比賣大神とも稱へて、伊勢の外宮に鎮まり給ふ神様で、他に廣瀬神とも、大忌神とも申し、龍田神とは深い御縁由があらせられるのです。

屋船豐受
姫神

崇神天皇



神饌所、勅使殿、假神庫、

廣瀬神社(合幣大社)

さても若宇加能賣命は、龍田の風神と共に、日本全國の五穀を守護し、風雨を調和して、秋の豐年を得させられます。夫れと云ふのは、此の廣瀬神は天水神で、雨や山谷の荒水を、甘水に変化させ、稻の成熟を助けられるからです。又別の御名を、屋船豐受姫神とも云つて、養蠶のこと、此の神様がお始めになりました。又大忌神と云ふ御名は、天上に於て、天神の御膳神として奉仕せられたからであります。本社の創建は、實に第十代崇神天皇の御代のことで、今を距ること二千年の昔です。尤も祭祀を行はれたのは、第四十代天武天皇の白鳳年間のこととあります。本社の境内には、極彩色の正殿をはじめ、拜殿、祭器庫、奏樂所、繪馬舎、社務所等が列んで居ま

朱塗大鳥居

すが、殊に一入参拜者の目を牽くものは、朱塗二基の大鳥居で、既に之を仰ぐだけでも、神徳の高大を感ぜずには居られませぬ。

龍田神社

(奈良縣立野駒郡三郷村大字立野鎮座)

天御柱神

當社の祭神は二柱で、天御柱命、國御柱命と申し、又の御名を志那都比古神、志那都比女神とも仰せられます。此の神は伊邪那岐命の御子で坐します。が、人皇第十代の帝、崇神天皇様の御時に、『吾宮は朝日の日向く處、夕日の日隠るゝ所、龍田の立野の小野に造り奉れ。』との、御神告を下されたので、其所に宮を營み、平安朝時代には、式内の大社に列せられ、明治四年五月、官幣大社の列に加へられたのです。

風之神

一體此の神の御名の志那は、息長と書くのが正當で、専ら風を主宰せられ、其御神徳は、天地の間に充滿して、乾坤を支へること、恰も家に柱あるが如しと云ふので、天御柱國御柱と稱へ奉るのであります。凡そ此の日本中に、生きとし生ける動植物は、風、即ち空氣によつて、生

平安朝

活することが出来ませんが、之は全く龍田の神のおかげであると云はねばなりません。

崇神天皇様の朝に、はじめて社を建てられた所は、龍田山の頂上で、其所を神奈備の御室と呼びました。夫れより一千六百年を経て、應仁の亂後には、祭祀のことも衰えたのを、立野の豪族に、物部姓の立野彌太郎と云ふ人がありまして、其寄進によつて、永正十六年十一月、今の所へ鎮座し奉つたのであります。

丹生川上神社

(奈良縣吉野郡川上村大字)

當社は上下の二座に分れ、上の社は高麗神を祭り、大和國吉野郡川上村大字迫に鎮りまし、下の社は關籠神を祀つて、同郡南芳野村大字丹生に鎮座せられます。一體此の丹生川上神社は、古は丹生川上雨師神社だの、雨師社だのと呼ばれました。雨師のことをおかみと云ふは、取りも直さず游迦美神の御名を取つたもので、游迦美神と云ふは、高麗關籠二神の稱號であります。

丹生川上神社(官幣大社)

神奈備の御室 立野彌太郎

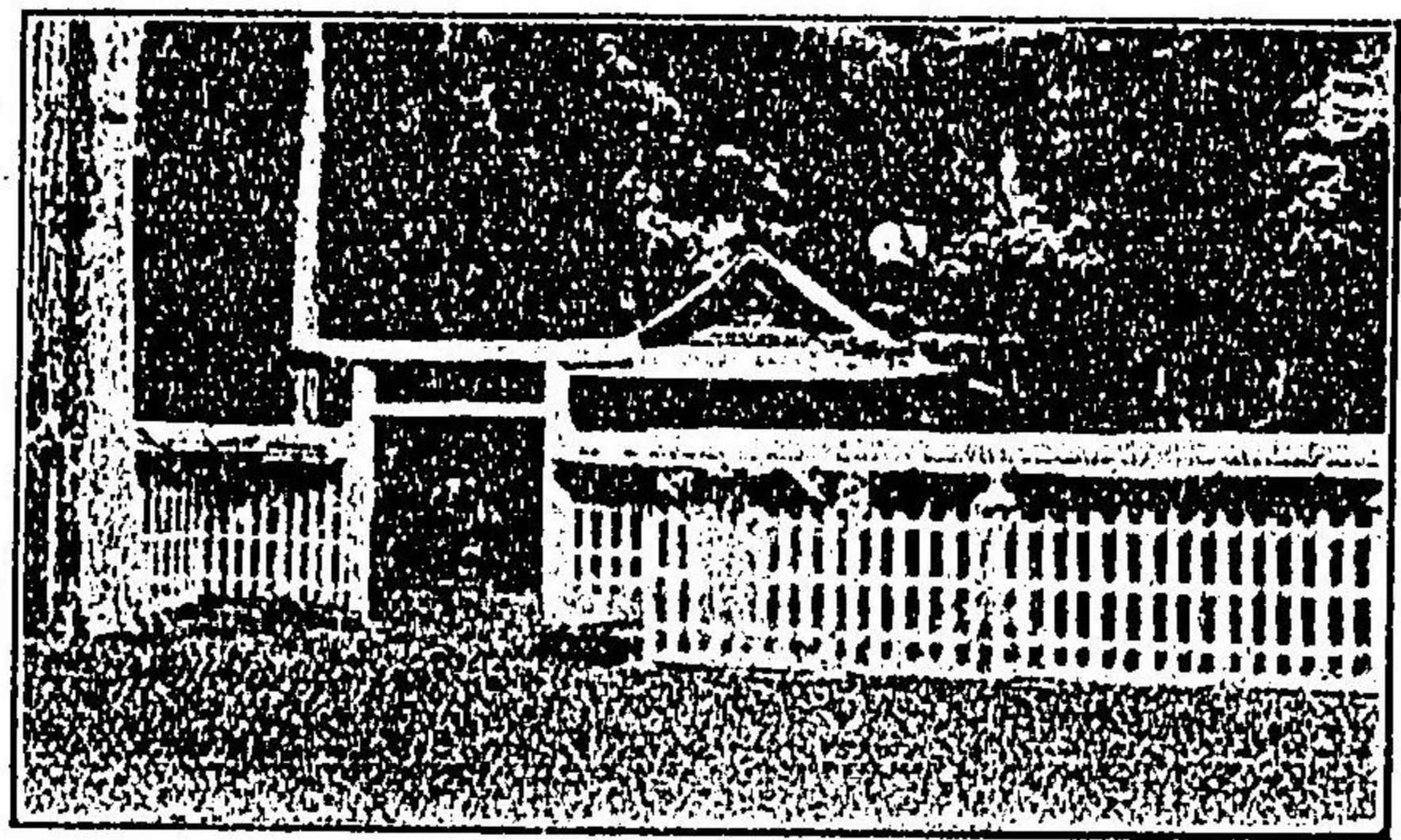
高麗神 關籠神

游迦美神

柯遇突智

天武天皇

元來此の二神は、かの伊弉諾神が、火の神柯遇突智を斬つて三段となされ
た時に、共に其體からお生れ遊ばしたので、高瀬神は山上の龍神、開竈神は

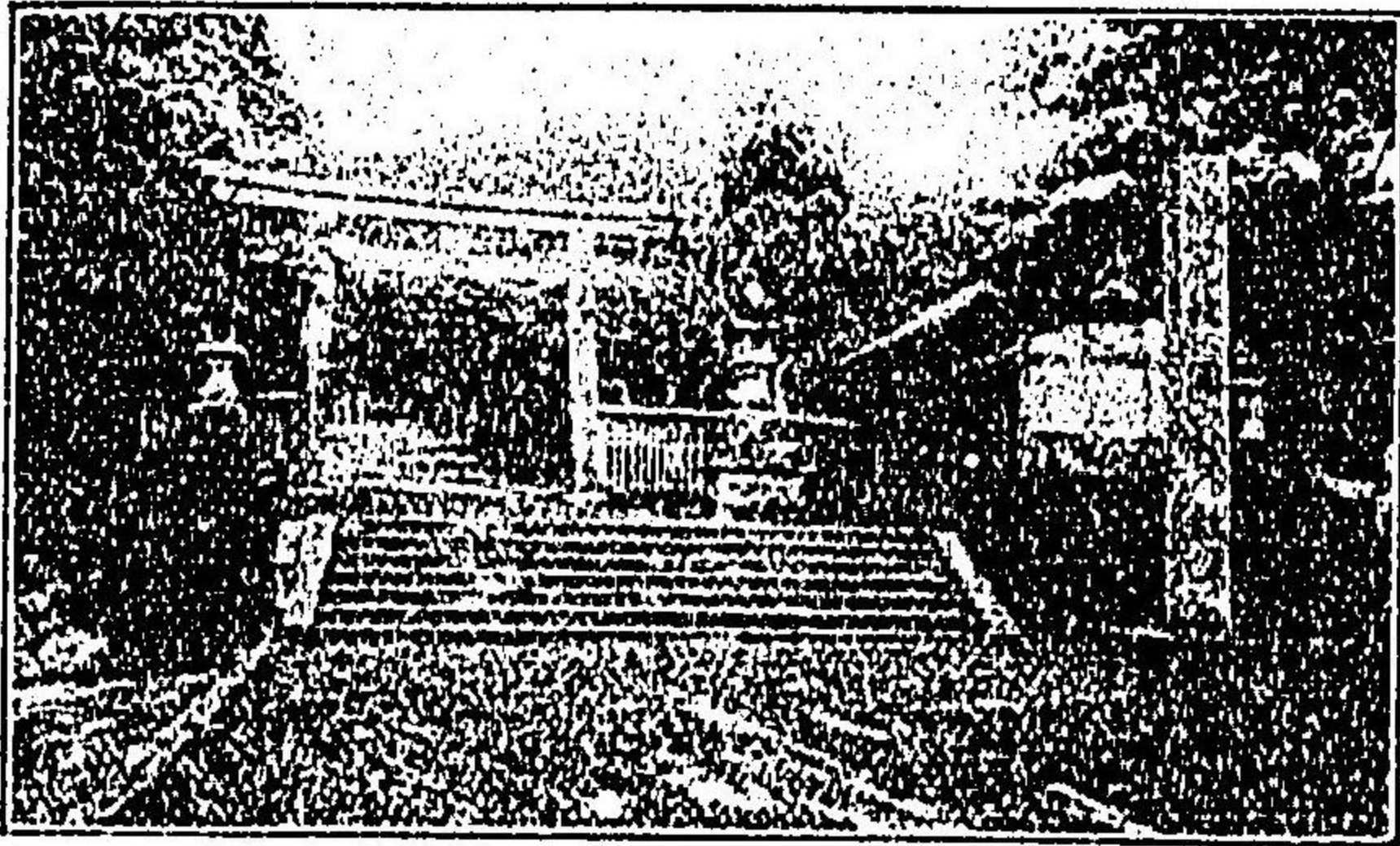


谷の龍神で、共に雨を宰る神様です。
さて當社鎮座の由来をたづねると、第四十代天
武天皇の白鳳四年に、神勅がありまして、「人聲の
聞えぬ深山に、我宮柱を建て、厚く敬禮したな
らば、天下に甘雨降り、霖雨は止む」と、ありま
したから、大和神社の別社として、此の地に齋
祀らせられたのが、即ち當社の起りであります。
抑も當社大神の御神徳は、上にも記した如く、
旱天に雨を降らせ、霖雨を晴らし、土地を潤して
五穀を豊熟させ、以て豊葦原千五百秋瑞穂國の名
に負かぬ様に、丹生川の流の絶えぬ如く、我國土
を永遠に守らせられるので、苟くも此の國に生れ、此の國の米を食ふ者は、

此の大神の御神徳を仰ぎ畏まねばなりません。

枚岡神社

(大阪府中河内郡枚岡村大字出雲井鎮座)



四前

天兒屋根
大神

枚 春は梅に櫻に、秋は紅葉の眺めも美しく、神苑
の上に立て見渡せば、十一州の山川が、一目の内
に集つて、風景のよいばかりでなく、如何にも神
神しくて、自ら参詣人の心を清うする所、枚岡神
社は實に當國の一の宮であります。

社 本社は第一御正殿から第四御正殿まで、都合四
前に分たれ、しかも共に官幣大社に列せられてあ
ります。第一御正殿に鎮座をしますのは、天兒屋
根大神で、此の神様が、上古の世に法律を定めさ
せられ、帝國議會の基を開き、祭政一致の政務を樹はし、神代の總理大臣と
して、國家のためにお盡し下された勳功は、一通りでは御座いません。

枚岡神社(官幣大社)

比賣大神

齋主大神

武甕槌神

日本武尊

八尋の白鳥

日本お宮物語

二六

又第二御正殿には、比賣大神の御神靈を祀るので、大神の御名は、天美豆玉照比賣命と申し上げ、實に天兒屋根命の後妃であらせられます。至つて貞節の高いお方で、男神を助けて、同じく國のためにお盡しなされた女丈夫で居らつしやいます。

次に第三正殿には、齋主大神の神靈を祀るので、大神は又の御名を、經津主神と仰せられ、かの武甕槌大神と共に、葦原中國の平定に、多大の功績を挙げさせられて、日本帝國の礎を固められたのです。又第四正殿には、經津主神の同志とも云ふべき、武甕槌神の神靈が、御鎮座になつて居ます。

大鳥神社

(大阪府東大郡郡鳳村大字大鳥鎮座)

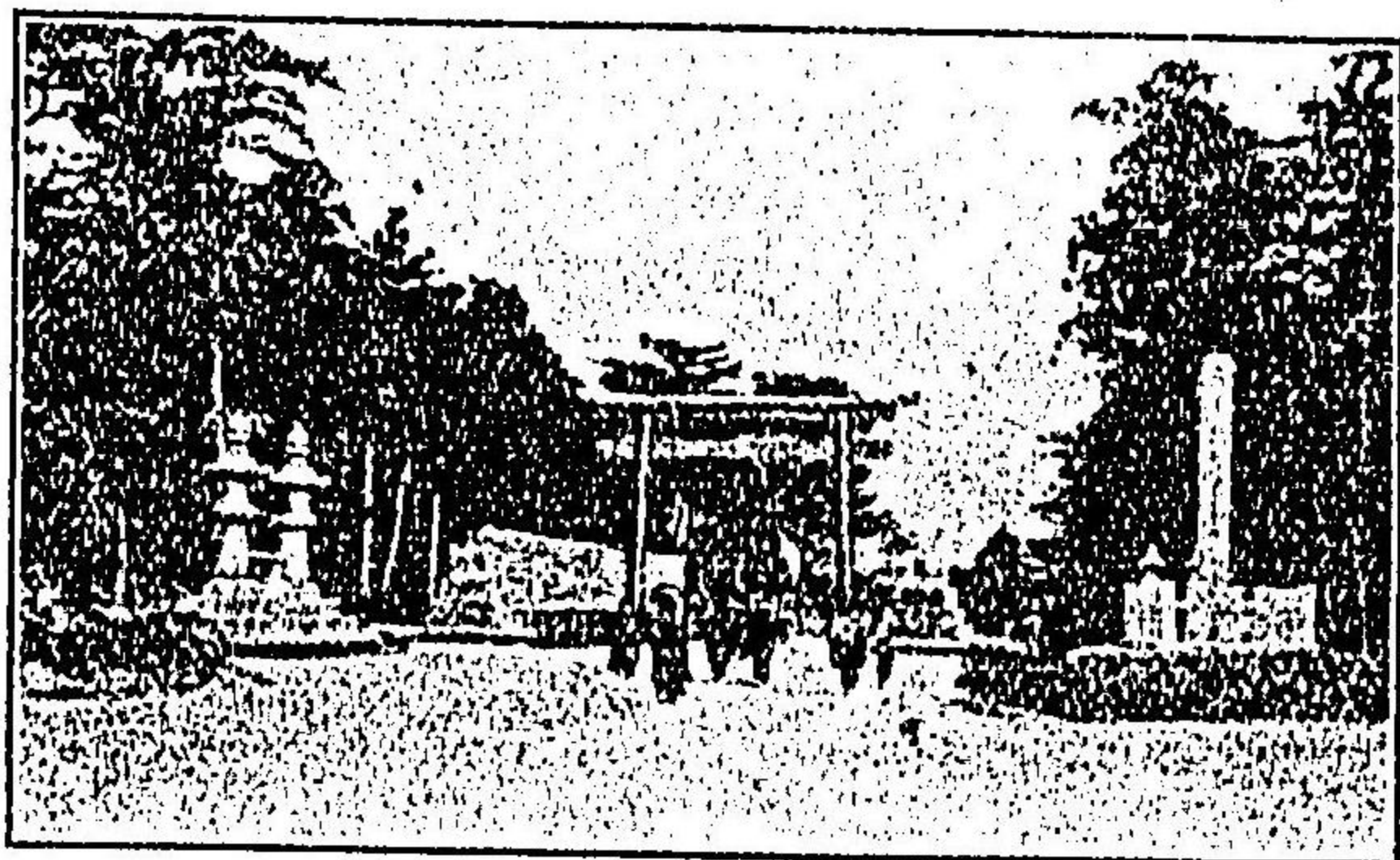
抑も當社は、景行天皇様の皇子にまします、日本武尊の神靈を祀る所で、一説には大鳥連の祖神を祀るとも云ひます。それはさておき、日本武尊は、東夷征伐の御歸りに、伊勢國能褒野に於てお薨れになりましたので、同地に葬り参らせると、忽ち八尋の白鳥が御陵から飛び出して、倭國へと向ひまし

倭の琴原

河内の古市

大鳥大明神

千種の森



のは、甚だ惜むべき事でありませぬ。

大鳥神社(管幣大社)

二九

た。群臣怪んで尊の御柩を開いて見ると、唯御衣が残るばかりで、御遺骸は更に見ることが出来ませんでしたから、急いで使者を遣して、其白鳥の行方を尋ねさせると、鳥は倭の琴原原に止まりましたので、其所に御陵を造らせられませぬと、又もや飛び出して、今度は河内の古市郡に止まりました。仍て古市に御陵を造り、同國大野の里(今の大鳥)に宮を營み、八尋の白鳥に縁んで、大鳥大明神と呼びました。又其宮地の附近が、一夜の中に森林となり、種々の樹木が俄かに繁つたと云ふので、千種の森とも云ひました。然るに當社の建物は、元和の初年兵火に焼かれ、更に再建したのを、又々明治三十八年の夏、失火の爲めに大半焼け失せ、舊年の面目がなくなつた

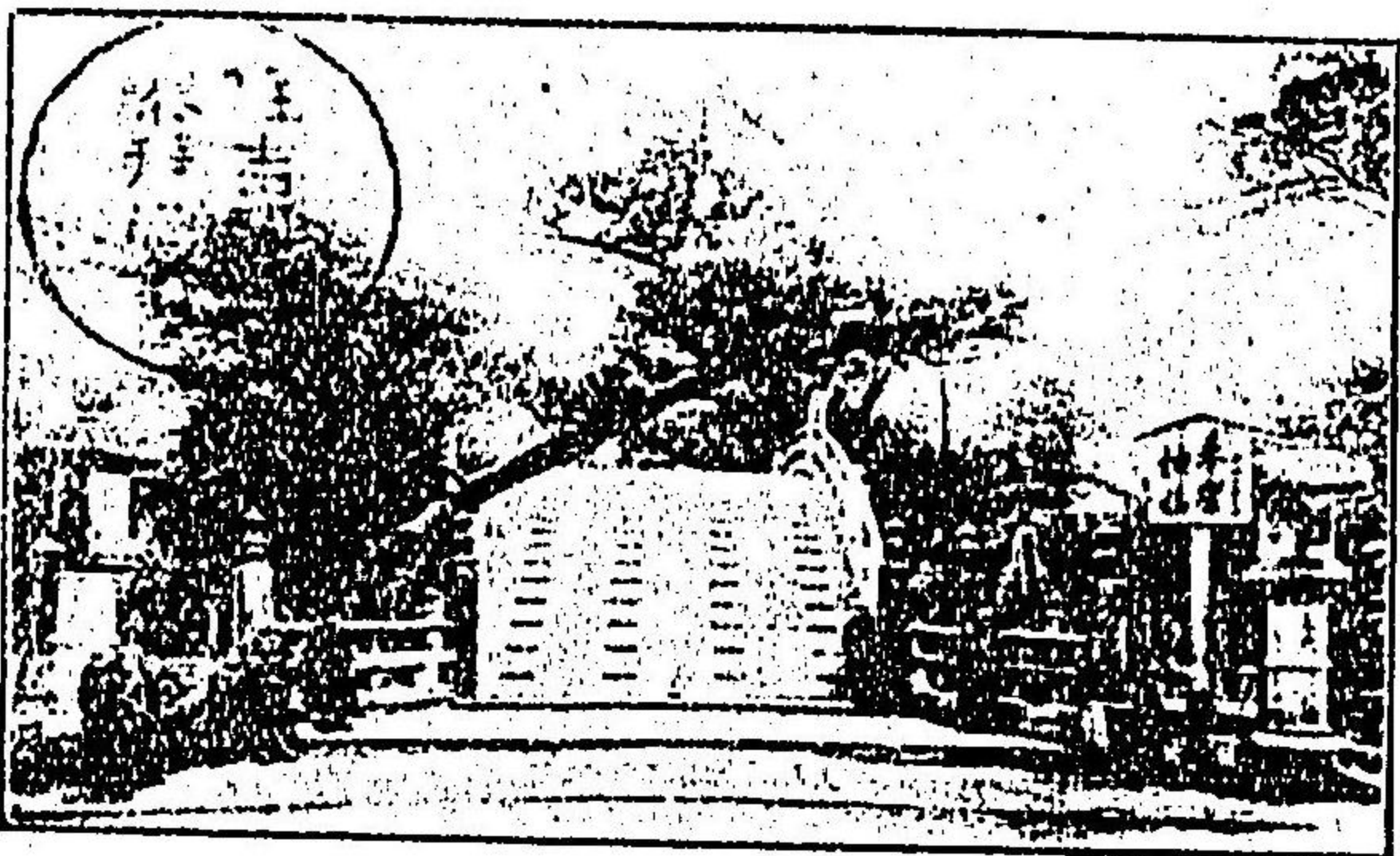
住吉神社

(大阪府東成郡住吉村大字住吉鎮座)

四宮の御祭神

橋の檣原

住吉大神



表筒男で

之ぞ住吉大神のこと御座います。

當社の御祭神は、第一宮底筒男命、第二宮中筒男命、第三宮表筒男命、第四宮神功皇后であります。

橋反吉住津橋
さても伊邪那岐尊は、黄泉國からお歸り遊ばされて、『吾は穢れた國に行つて来た、今は早く體の穢れを拂ひ清めなければならぬ。』と仰せられ、筑紫の日向の小戸の橋の檣原にいらしつて、秋ひ清めやうとなされましたが、不圖川の瀬を御覽になりますと、上つ瀬は流れ強く、下の瀬は流れが弱いので、その中つ瀬で體をお清め遊ばしましたが、其時にお生れなされたのが、即ち底筒男、中筒男、表筒男のこと御座います。

三韓征伐

生島神

高津丘

大阪城

住吉大神は、神功皇后様の三韓征伐の時は、一入の御力添をなされましたから、やがて御凱旋の時には、住吉大神の御魂を、かの國の守神として、祭り置かせられたと云ふことであります。

生國魂神社

(大阪市東區生玉町鎮座)

當社の祭神は、生島神(亦名生國魂大神)足島神(亦名咲國魂大神)で、明治四年五月、今の社格に列せられた尊い社であります。

人皇第一代の帝、神武天皇様が、筑紫より東征して、難波津までおいでになりました時に、先づ高津丘に、大八島の御神靈なる、生國魂咲國魂の二柱をお祭りなされ、東夷降伏の御禱をなさいました。かくて應神天皇様の御代に、勅を下して神殿を御造營になり、難波の石山の玉造、生國庄と云ふ所に、御鎮座せられました。

降て豊臣秀吉が、大阪城を建築の時、正親町天皇様の勅命を奉じて、東市正片桐且元、主膳正片桐貞隆を普請奉行となし、現今の土地に社殿を造り、

生國魂神社(併帶大社)

天正十三年九月を以て御遷座相成りました。

廣田神社

(兵庫縣武庫郡村)



廣 本社は撞賢木殿之御魂、天珠向津媛命をお祀り
 する神社で、實に伊勢内宮に座す天照大御神の荒
 田魂の神であらせられます。此の神様をこゝに祀つ
 た由來は、今を距ること千七百餘年のむかし、仲
 哀天皇様の九年二月に、神功皇后が三韓を征伐し
 やうと思し立たせられ、筑紫の樞日宮で、種々御
 用意をなされた時、皇大神の御神勅に、「わが和魂
 は、玉體を守り、わが荒魂は、戰艦を導きて、彼
 地に渡すのである」と、誨させられたのです。
 そこで皇后様は、此の神勅を畏み、同年十月對馬にお遷りなされ、和珥津
 から出發なされましたが、波風程よく、艦楫の勞も少く、御艦は安らかに彼

天照大御
神の荒魂

三韓征伐

の地に着きましたから、新羅國王は大いに驚き、多くの寶物を捧げて降伏し、
 高麗百濟の二國も亦日本の領地になりましたので、皇后様は翌年の二月に、
 目出度く御凱旋なされました。

さて御船は、筑紫から難波に向ふこととなり、其御途中で更に動か
 なくなりましたから、之も屹度神意であらうと云ふので、務古水門で占はせ
 られますと、皇大神は、「わが荒魂は、皇居に近づかず、心廣田の地に居度く
 思ふ」とお告げがありました。

そこで山背根子の女の葉山媛を齋宮として、此の地に祀らせられたので、
 永く國家を守らせ給ふ大切な神様です。又御脇殿と云つて、四つの別殿があ
 りますが、第一には住吉三所大神、第二殿には八幡大神、第三殿諏訪大神、
 第四殿高皇産靈神を祀ります。そして此の方々は、何れも三韓征伐の時に、
 特別御勅のつた神様なのであります。

務古水門

葉山媛

四つの別

氷川神社

(埼玉縣北足立郡大宮町大字高鼻鎮座)

氷川神社 (管幣大社)

孝昭天皇

日本お宮物語

三四

當氷川神社は、人皇第五代の帝、孝昭天皇様の御時に、建速須佐之男命、大己貴命、奇稻田姫命の三柱の神を合祀せられた尊いお社で、歴代の天子様の深く御崇敬あらせられた事は云ふに及ばず、武家の尊奉も厚く、徳川幕府



の時には、朱印の寄附あつたばかりか、屢々社殿を造營しました。かくて明治維新に至つて、今上陛下東京に御遷都の後、先づ當社へ行幸遊ばされて、勅を下し、當國の鎮守、勅祭の御社と定めさせられたのです。

今上天皇
行幸

東遊の舞
樂

其後社格を進めて、官幣大社に列し、毎年勅使参向して、東遊の舞樂を御奉納になり、明治三年、同十一年には、陛下の御参拜があり、同九年には皇太后陛下、皇后陛下の行啓、又二十九年には、皇太子殿下も御参拜遊ばされました。されば當社は本朝武運の守護神として、廣く世に知られて居ます。

氷川公園

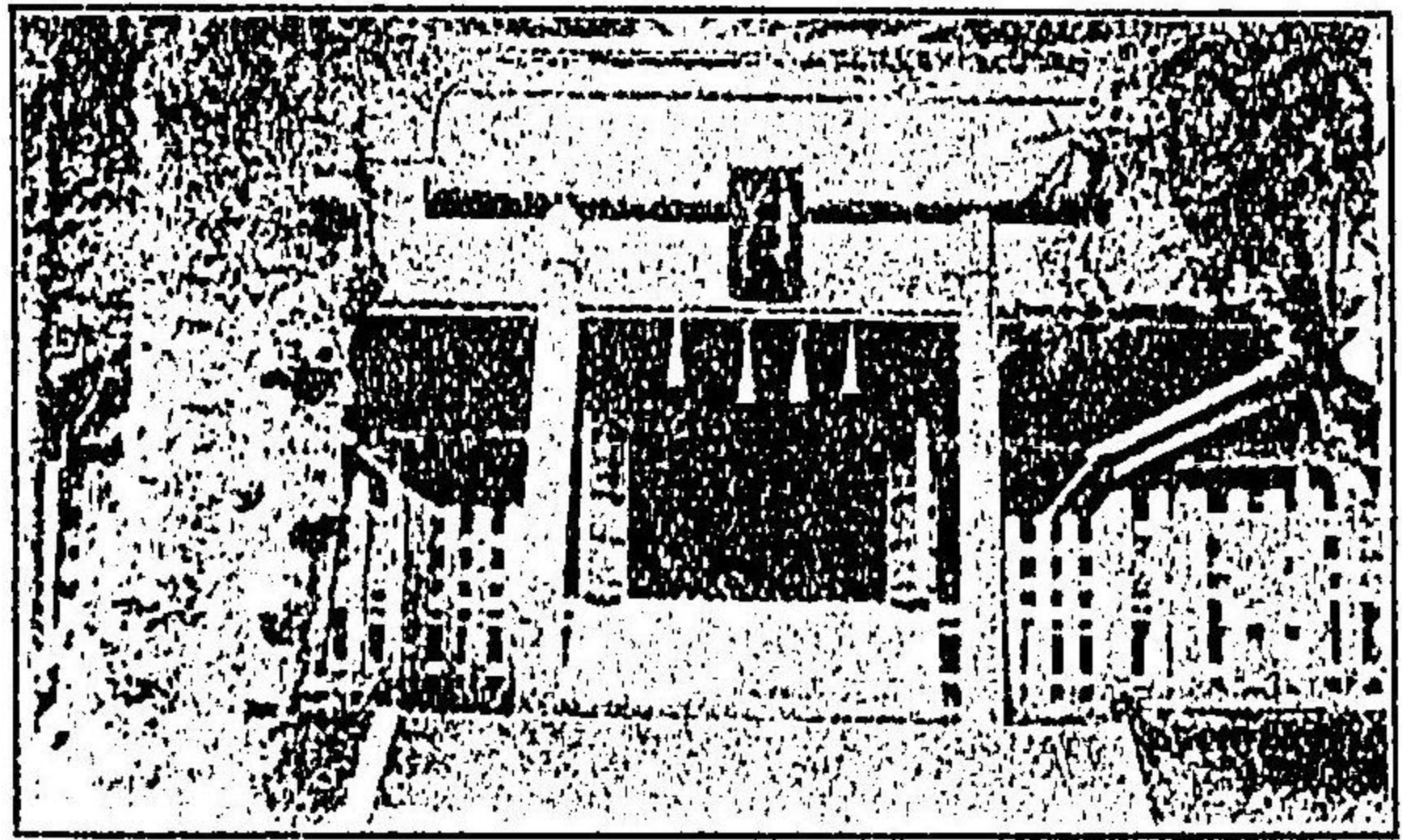
又其境内は頗る廣く、老樹生い茂つて、四時の眺めに富み、境内の一部なる氷川公園は、一に大宮公園とも云つて、四季共に遊覽の客が絶えません。

安房神社

(千葉県安房郡神戶村太神宮鎮座)

安房國神戶村太神宮に鎮まりませる、安房大神と申すのは天太玉命と云ひ、天照大御神の御前で、天兒屋根命と共に、忠勤をお盡しなされた方で、伊勢の神宮にも祀り奉り、代々の御守護と崇められて居給ふのであります。

かくて神武天皇の御代に當り、天太玉命の御孫に當らせらるゝ、天宮命に勅命を下され、阿波國より忌部を率ゐて、當國に移り住み、草を除き悪獸を獵り、人民が安んじて業を營む様に、御盡力



なされた上、やがて太玉命の御社を御建立になりました。之が即ち今の安房

安房神社(官幣大社)

三五

天宮命

天太玉命

神社なのであります。

香取神宮

(千葉県香取郡香取町大字香取鎮座)

經津主命

陸軍の始

當神宮の御祭神は、經津主命、亦の御名、齋主命とも申し、我國將帥の始祖であります。故に歴世朝廷の御崇敬も厚く、殊に明治維新のはじめ、大阪に行幸遊ばされた時にも、御親祭を行はせられ、又毎年一月一日の四方拜には、東方に向はせられて、香取鹿島の兩神宮を御拜なされ、陸軍始に當つては經津主命(當神宮)武甕槌命(鹿島神宮)大國主命(出雲大社)の三軍神を奉齋し給ふのは國初の元勳、國家鎮護の偉績を重ね、且つ其赫赫たる冥助を仰ぎ給ふ爲めであります。

さても神代のむかし、天照大御神様は、太子天忍穗耳尊を、豊葦原の瑞穂の國の君主として、天降らせやうとなさいました。が、其國には種々の惡神共が居て、非常に騒がしくありましたから、太子の御降臨も一時沙汰止みとなり、大神様は先づ以て、夫れ等の邪神を誅伐する爲めに、八百萬の神々に御

天穗日命

相談なさいますと、衆議忽ち一決して、天穗日命を遣すこととなりました。所が穂日命は、大國主神に媚びついて、三年たつても高天原へお歸りにな

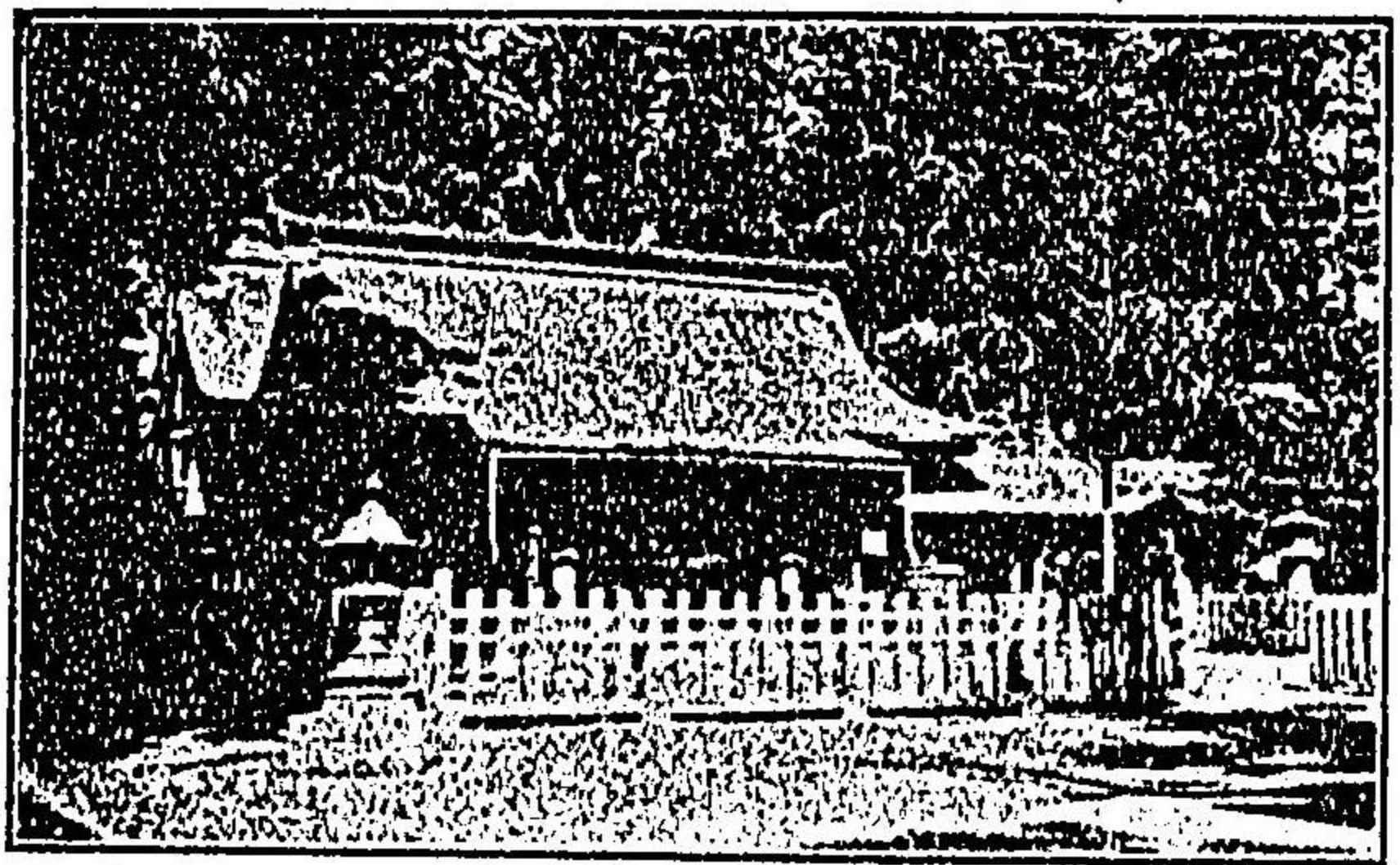
天稚彦

りませんので、又もや御相談の結果、今度は天國の天稚彦も、又葦原の中國に着くなり、國神の女を娶り、自分で其國を奪はうと云ふ下心がありましたので、矢張り復命をせられませんでした。

から、天照大神様は、三度目安の河原に會議を開いて、八百萬の神々の御意見を求められますと、神々達は、『磐裂根裂神の子なる磐筒男磐筒女二神の中に生れた、經津主神が、最も適任であらう。』との意見でした。即ち此の經津主神こそは、我香

取の大神であります。

磐裂根裂神の子



取の大神であります。

香取神宮(管幣大社)

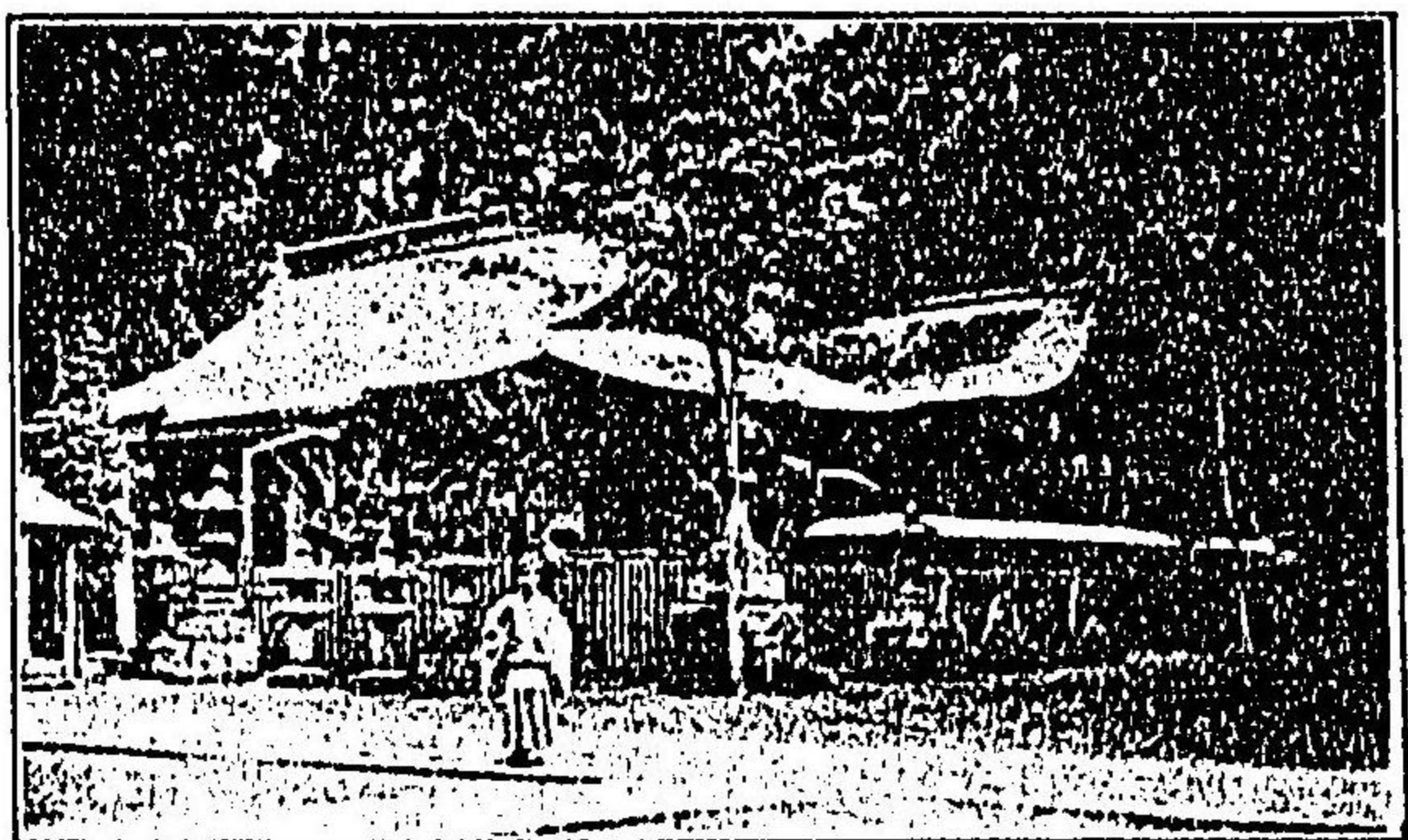
「恰も此の時、天の石窟に住める、稜威雄走神の子の、武甕槌神が進み出て
 『經津主神ばかりが大丈夫ではありませんまい。私も及ばずながら御用を承り
 度いのです。』と、言語も荒々しく申し出られましたから、此の神をも併せて
 中國へ向はせることとなりました。之ぞかの鹿島大神であります。
 さて二神は、天照大神様の神勅を受けて、先づ出雲國の五十田狭の小汀
 に着き、大國主神と談判を重ねて、遂に其國土全體を天孫に捧げることとを約
 束して、首尾よく復命なさいましたが、之と云ふも全く二神の御武勇の致す
 所であるから、古來武神として、上下の崇敬が厚いのであります。

鹿島神宮

(茨城県鹿島郡鹿島町大字宮中鎮鹿島)

南は銚子の港から、北は大洗の濱邊から、西は利根川から、東は大海から、
 何れからも一叢の緑の雲が見えます。之ぞ名高い鹿島神宮の靈地であります。
 其隣蒼たる大森林は、中天高く聳えて、数十里の外から見ることが出来る
 ので、鹿島浦航海の船舶は勿論、一郡南北二十里の沿岸の漁村に於ては、海

上漁船の目標として、毫も針路を失ふことなく、安全に漁業を営むことが出
 来るのです。



天皇御即位の元年、報賽の典を擧げて、當宮を御創立になりましたが、夫れ

仁明天皇

より歴朝の御崇敬最も厚く、崇神天皇様の時には太刀、鉾の類をお納め遊ばされ、仁明天皇様の御宇には、正一位勳一等と奉られ、奈良の朝には、春日野に春日神社を創立して、當宮の御分靈をお祀りになりました。

次で桓武天皇様が、都を平安に奠めさせらるゝや、京北に吉田神社を創立して、大神を祀られたのであります。

かくの如く當宮の御祭神は、國家鎮護の武神ですから、古來武家の崇信一入厚く、徳川氏の天下を統一した時も、家康は此宮を、二千石の朱印地とせられ、次で明治四年官幣大社に列せられました。

國家鎮護の武神

三島神社

(静岡県田方郡三島町三島鎮座)

三島町

當社々地の正面は、東海道三島町の中央に據して、規模頗る廣く、喬木は雲を凌ぎ、松杉の老樹鬱然として、社境を圍り、春は梅と櫻に飾られ、夏は池の邊に、秋は森の紅葉に、四季の眺めの美しいので、公園にも讓らぬ佳境と云はれて居ります。

積羽八重事代主大神

大國主神の長子

惠比須大神

天の逆手

當社は伊豆國の一の宮で、祭神は積羽八重事代主大神、又の御名玉籤入彦殿之事代主大神、及び本后阿波比咩神、後后伊古奈比咩神を祀ります。猶大神の御別名は、一言主大神、又は味相高彦根大神とも申して、大國主神の御長子に渡らせられ、御母は神屋栢姫命と云ひ、御子神は物忌奈命、女の御子は踏鞠五十鈴姫命で、即ち神武天皇様の正后とならせられた方です。

遠き神代のむかし、大神は御父大國主神が、此の國土を御經營まします時、山河を開き、田畝を拓き、漁獵の業を始めて、國利民福の基をお開きになりましたから、又之を福の神として祀ります。即ちかの惠比須大神は、此の神の事でありませす。

天孫瓊杵尊が、葦原の中國に御降臨まします前に、經津主神と武甕槌神とが、大國主神の朝廷に来て、國譲りの談判をなされた時にも、大神は大義名分を全うして、父神へ御進言なされ、忠孝の兩道を守らせられたので、殊に大神が、此の國土を、皇孫に避け奉つた時に、天の逆手を打なして、決して違はぬ事を明されたが、後世人が物を賣り渡すに、偽りなき旨を示す

三島神社(官幣大社)

御島

に、手を拍て摺ふのは、こゝから起つたものだと云ひます。
 大神は、初めに出雲においでなされましたが、國名の似た所を求め度いと
 思召して、海上を三宅島までお着きになり、更に今の地にお移りになりまし
 たが、むかしは總ての島を御島と唱へましたから、大神が最初御島にお着き
 になつたと云ふ所より、御鎮座地を三島と呼ぶ様になつたと思はれます。
 當社の例祭は、八月十六日で、二月の祈年祭と、十一月の新嘗祭を併せて
 三官祭とし、其都度奉幣使の参向があります。

熱田神宮

(名古屋市南區熱田新宮)

草薙劍

新橋を發した汽車が、熱田驛を過る時、車窓から見渡すと、近く右手に當
 つて、老樹の鬱蒼と繁つて、神さびたお宮が見えます。之ぞ草薙の神劍を祀
 る、名高い熱田神宮であります。
 抑々當神宮は、明治四年の御詔勅に、『神器は天祖威靈の憑る所、歷世聖皇
 の奉じて以て天職を行ひ給ふ所の者也』と仰せ下された、其尊き神器の一つ

三種の神

崇神天皇

笠縫邑

日本武尊

が納められてゐるのです。一體三種の神器は、諸君も御承知の如く、遠き神
 代のむかし、八百萬の神達が、天照大御神を祭らせられた時に、八坂曲玉、
 八咫鏡、八握劍を、大きな桐の枝に懸けて、大御神に奉つた寶物であります。
 所が此の三種の神器は、後に天孫降臨の御時に、天祖御親ら之を授けて、皇統
 天地と共に窮りなく、國土月日と共に變らぬ御表として、大切にせよと仰せ
 られ、特に鏡と劍とをば、我靈であると思へとさへ宣はせられたのです。
 されば瓊々杵尊より、人皇第十代崇神天皇様の御代までは、三種の神器も、
 天皇と御同殿でありましたが、夫れでは却つて神威を汚す恐れがあると思召
 され、別に笠縫の邑に神殿を築いて、鏡と劍とを遷し奉り、後更に伊勢神宮
 にお遷座あらせられたのです。
 かくて景行天皇様の四十年に、東夷御征伐の砌、神劍は別れて日本武尊に
 憑らせられ、駿河國に於て、親ら其鞘を出で、葦草を薙ぎ拂つて、賊徒をお
 滅しになりましたから、其神徳を後世に傳へる爲めに、之より草薙の神劍と
 稱へました。

尾張の火
上の里
命
火上姉子

さて尊は更に進んで、東北の賊を残らず御平定遊ばされ、四十三年御還りの時、尾張國火上の里の、火上姉子命の御邸にお泊りなされましたが、神劍忽ち光を發して、こゝに止り給ふたので、尊は皇妃火上姉子命を齋宮とせられました。此故に火上姉子命を宮簀媛命と呼ぶので、宮簀媛は宮主の意であります。

所が尊は、都への御歸りに、遂に御病に罹らせられ、伊勢國の熊襲野でお薨れになりましたが、其御臨終の折にも、口を極めて神劍の威徳を御贊めになつたと云ふことです。

伊勢國熊
襲野

白鳥御陵

宮簀媛命

速狹騰尊

かくして尊は、空しく世をお去りになりました。けれども其御靈は、忽ち白鳥に乗つて、尾張國に飛ばせられ、神劍御鎮座の地をお示しになりました。即ち神宮の西に隣る白鳥御陵こそ、其遺跡で御座います。

こゝに又宮簀媛命は、尾張の國造に任じて、熱田神宮を營み、神慮のまゝに、こゝに鎮座申し上げたのです。元この神劍は雄劍で、かの神功皇后様が、三韓御親征の時には、速狹騰尊と名のらせられ、皇軍のために非常なお働き

僧道行

天武天皇

大山咋神

比叡山横
川

をなさいました。

かくて天智天皇様の七年には、新羅國から道行と呼ぶ僧が来て、遂に神劍を盗み出し、難波の浦まで行きましたが、神劍は外人に對して、又々靈威を示し、恙なく宮中に還らせられました。

所が天武天皇様の御代に、再び神威を恐れて、神宮に御遷座なし參らせたので、夫れより後國家に難のある時は、必ず此の神劍が、威靈をお示しになると云ひ傳へます。

日吉神社

(滋賀縣滋賀郡坂本
村大字坂本鎮座本)

當宮の祭神大山咋神は、大年神の御子にお座しなし、御母は天知加流水姫命と仰せられ、近江國の日枝の山、亦葛野の松尾にあらせられる神です。かくの如く大神は、神代のむかしから、此の地を領し給ふので、又地主の神とも申します。

むかしは比叡山横川においでになりましたが、いつの頃誰人が社壇を造つ

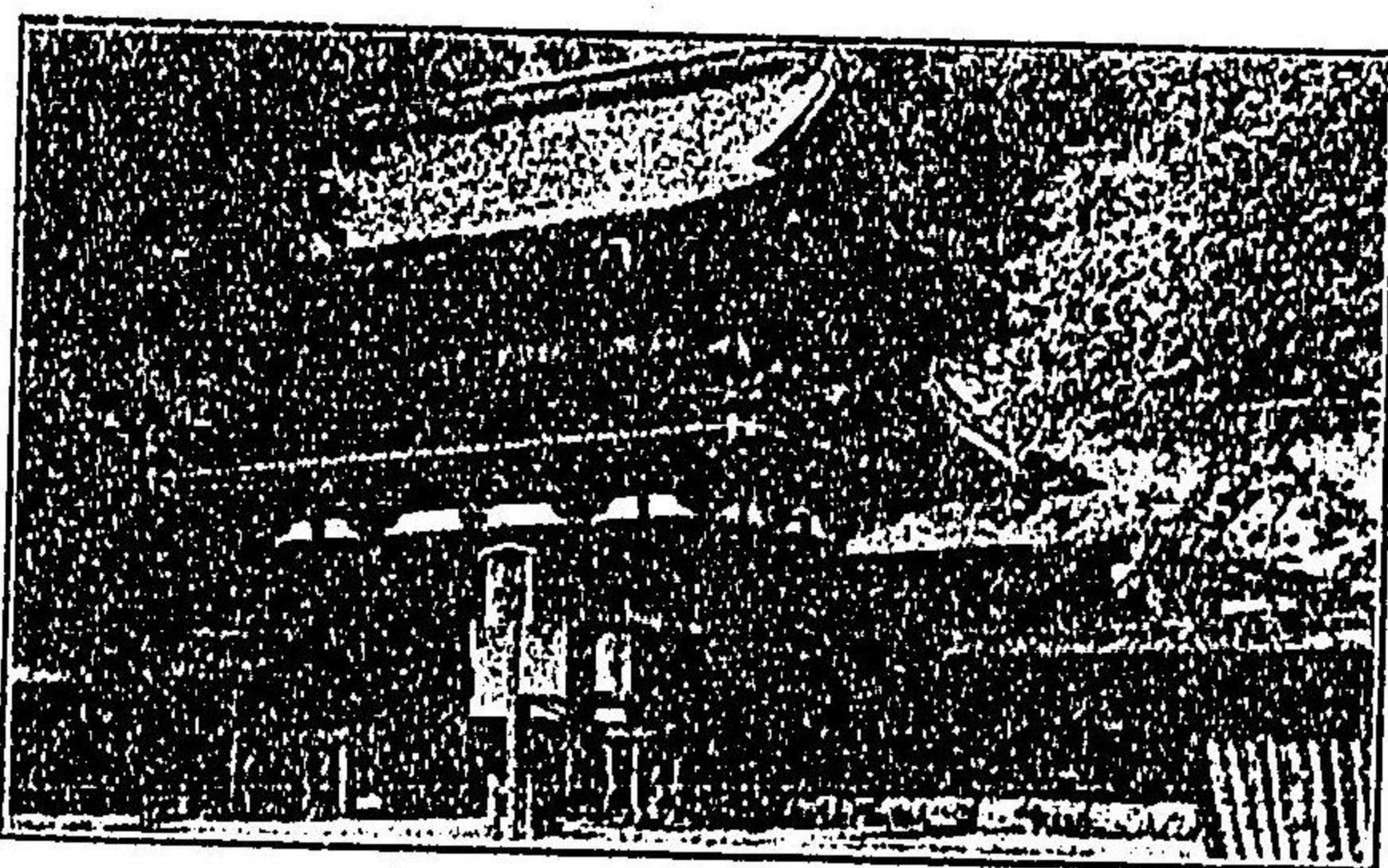
鳴鹿島

て、崇め祀つたかは分りませんが、崇神天皇様の七年に、詔を下されて、鳴鹿島と云ふ人を司とし、神戸をもお附けになりました。

日本お宮物語

四六

特別保護
建築物



近江坂水日古社
此の他攝社には早尼神社(素盞鳴尊)、大物忌神社(天年神)、新物忌神社(天知加流水姫神産屋神社(鳴別雷神)氏神々社(加茂健角身命、相殿琴御館宇志磨唐崎神社)別當女などがあります。

日前神社 國懸神宮

(和歌山縣海草郡宮村大字秋月鎮座)

神武天皇
五十一年

天照大御
神
石凝姥命

當宮は神武天皇様の五十一年の創建で、もと海草郡濱の宮にありましたのを、垂仁天皇様の十六年に、今の地に御遷座あらせられました。そして日前宮は、神鏡をもて御靈代とし、相殿には石凝姥命、思兼命を祭ります。又國懸宮は、天日矛を御神靈とし、鈿女命、玉屋命を相殿としてあります。大むかし天照大御神様が、天石窟におかれ遊ばされた時、思兼命は、大神の像を圖どつて、お招き申すがよからうと云ふので、石凝姥命を鍛工とし、天香山の金を採つて、一の日矛を造らせ、又眞名鹿の皮を全剝に剝いで、天羽織を造り、日像鏡と云ふものを鑄させらるゝことゝなりました。所が最初に鑄た鏡は、出来がよくありませんでしたが、再び鑄直しますと、今度は見事なものが出来上りましたので、夫れを五百箇眞坂樹に懸けて、大神を招き出したのであります。それでこの國懸大神に鎮座しますのは、即

日前神社國懸神宮(管幣大社)

四七

ちその初度に鑄た神鏡であります。
 さて天孫瓊杵尊が御降臨の節は、天照大神の詔を以て、此の鏡をも副へてお降しになりましたから、代々二神を大殿に齋き祭り、垂仁天皇の御代に及んで、名草宮に移し参らせ、夫れより代々の天皇の御崇敬は、頗る厚かつたものであります。

出雲大社

(島根縣簸川郡杵築)

出雲大社に鎮ります大國主神は、國土を經營し、民業をはじめ、人民繁榮の道を開いて、國家の開明をお圖りになつた、大功徳ある神様で、其國家經營の模様を窮ふに、先づ國の周圍には、芦、菅、葛の類を植ゑて、海潮の漲るのを防ぎ、芦菅類の繁茂するにつれて、次第に海を埋めて陸地を廣め、田畑を開墾して民の生業を助け、醫藥禁厭、湯泉をはじめては、病を治め災を拂ひ、天壽を全うせしめ、又國々を巡幸して、惡神共を平ぐるために、廣矛を杖として、自ら武藝を練り給ひ、白兔の惱みを見ては、救助の術を施すな

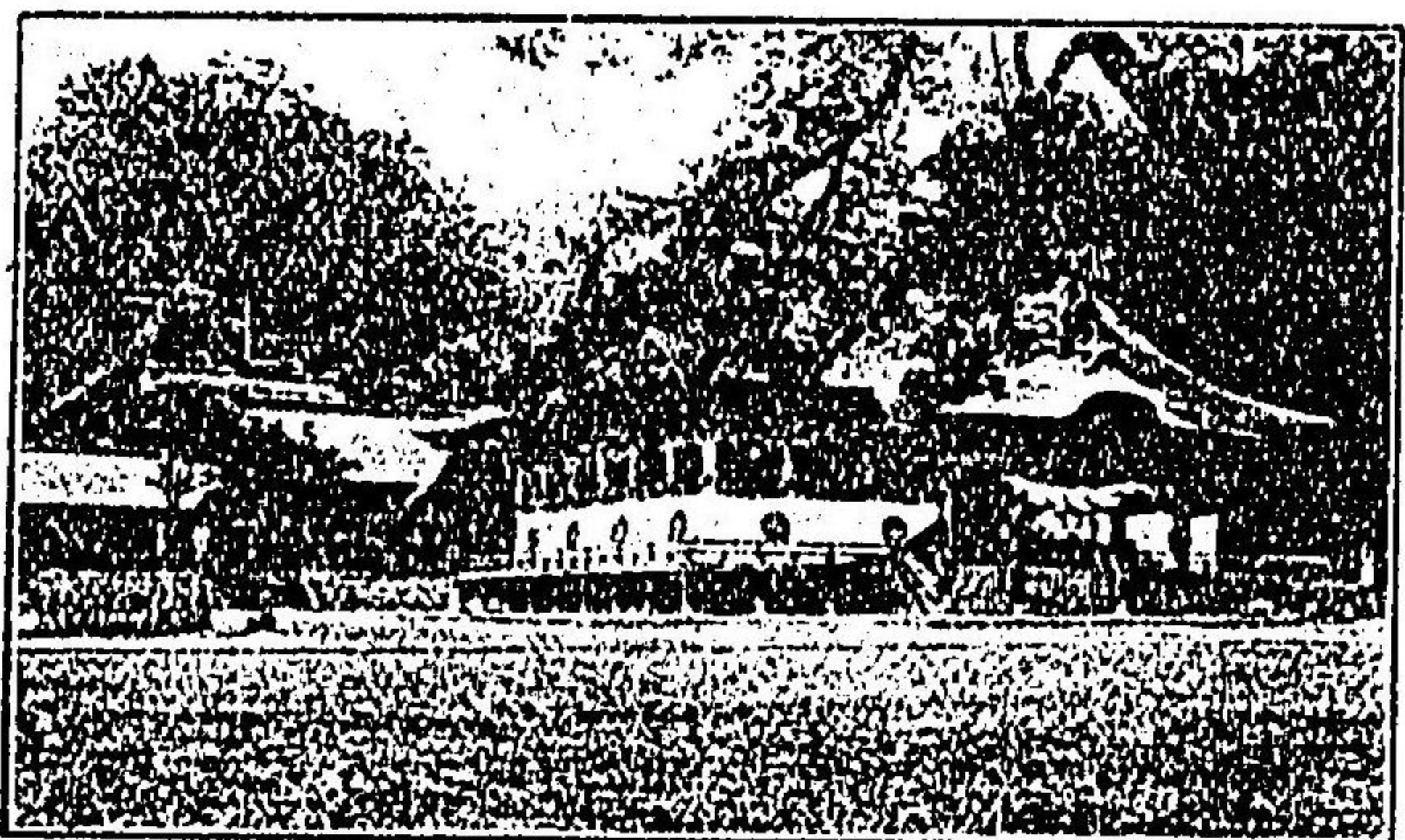
名草宮

大國主神

國家經營

八十神

御父素戔嗚命



ど、小さな者に對しても、同じく仁慈を施し給ふたのであります。

されど大神が、此の國家經營の大業をお立てになりましたのは、元より容易のことではなく、最初に恐しい八十神の辱しめを受けさせられた時にも、よく之を忍び、數回の御危難をも堪へ給ひて、やがて御父素戔嗚尊の御許で、少しく御心を安めさせ様となされましたが、此こゝでも又種々の艱難に出逢ひ、中にも恐しいことは、大神を野中に導き、四方から火を放ちて、大出るべき道もない様にしました。

社
 こんな苦しい目に遭はされても、よく其危難を免れ、且つ少しも恐るゝ風はなく、猶も父神の傍に居て、何かと其命に従つておいでになりましたが、かう云ふ忍耐力があつたればこそ、後に國家經營の大業を成就せられたのであります。

出雲大社(菅幣大社)

國土主宰
の大任

日本お宮物語

五〇

父君に何かと苦しい目に遭はされたのは、つまり大神の心を試さうとの思召しでわりました。其御忍耐の強いのを感じて、いよゝゝ國土主宰の大任をお委せになり、寶の弓矢を興へて、先づ八十神を平げさせ、人民の心を安んじ給ふたので、大神を稱して『天下つぐらし、大神』と云ひ、又は『國造大己貴命』とも申します。

御別名

一體大國主神には、大己貴神、大地主神、大物主神、葦原醜男神、八千矛神、大國魂神、顯國魂神、奇瓊瓊杵神、伊和大神など、種々の別名を持たせられますが、之はいろゝの事業を起せる、其御神徳によつて奉つた御名であります。

十五神

又大神は、多くの御子の中から、十五神を選んで四方に殖ち、各地を治めしめられたので、大神の御神徳は、いよゝゝ遠近に遍くなりました。かくて我中國は、全く舊態を變じて、立派な世界となりましたから、天照大神は、皇孫に勅して、此の國の經營に當らせやうと思召し、不取敢神傑の稱ある、天穗日命を中國に遣して、國情を視察せしめられました。

穗日命

穗日命は勅命を奉じて、中國に来て見ると、大國主神の功徳は、實に廣大なるもので、皇孫に國を獻らせる談判に、前後三年を費して、猶容易に解決しません。一方高天原の方では、穗日命の復命の遅いのを待ち兼ねて、更に天稚彦をお遣しになりましたが、此の神は不忠の行ひが多かつたので、とうとう殺されてしまひました。

武甕槌神
經津主神

そこで今度は武甕槌神、經津主神の二神を遣し、懇ろに其功勞を慰め、さて更めて『汝が掌る此の國は、皇孫の治め給ふ所である、故に汝は幽界のこゝとを掌り給へ』と諭し、其住むべき宮殿の構造は、皇居と同じくし、之に仕ふる者も、天照大神の第二の御子なる、天穗日命を以てし、其他神田を供し、百般の器具を造り興ふるなど、非常なる御優待をなさいました。

國土献上

さうなると大國主神も、天照大神の勅命に従ひ、二人の勅使に向つて、潔く國土を献上なさいましたから、我國體はこゝに萬世不拔ものとなりました。之と云ふも大國主神が、國家の前途を思ひ、人民の幸福を思召したから、折角自分が多年苦心して、御經營なされた其國を、何の惜氣もなく、皇孫に

譲つて、自分では出雲大社に御隠退なされたのであります。かやうな由來が
ありますから、當社は數ある神社の中でも、最も神威靈驗なものとして、誰
も知らない者は無いのであります。

俗に毎年十月には、國々の神々が、皆この大社に集まつて、御評議をお
開きになるので、何所のお社も御留守になると云ひます。この十月の事を神
無月と云ふのも、全く此故に他はありませぬ。

宇佐神宮

(大分縣宇佐郡宇佐町大字南宇佐鎮座)

西北には寄藻川の清流を控え、東南には御倉川を廻らし、大元山(宇佐島)は
巖々として南方に峙ち、大尾山は北に聳へて、實に山川の勝に富むばかりか、
馬場の櫻、菱池の藤波、月瀬の螢、尾山の紅葉、馬城峯の白雪など、四季の
眺のそれづくに、三萬八千四百餘坪の境域を領する宇佐神宮こそは、日本で
も類少いお社であります。

一體宇佐町と云ふ所は、神代には素盞鳴命の御娘の、三柱の姫神が天降り

神無月

山紫水明
の地

宇佐町

龜山

應神天皇

欽明天皇

八幡大神

三柱の比
賣大神



給ひ、次には神武天皇が御駐蹕になり、次には八幡大神が御出現まし、
今も現に其御鎮座の靈地として、名所古蹟も少くありませんから、遠近より

參詣する老若男女が、頗る多いのであります。

宇佐神宮は、町の東南の龜山(別名小椋山)又は
菱形山の頂上に、都合三殿各楯に並べて、南面に
佐鎮座せられます。さて其一の御殿は、人皇第十五
代の帝、應神天皇様の御神靈で、天皇は御母神功
皇后様の胎内にあつて、三韓を御征伐なされ、御
誕生の後には、支那の文學や工藝を採用して、文
武の兩道を以て世を治めさせられ、御年百十歳で
お崩れになりましたが、其御神靈は、人皇三十代
欽明天皇様の二十九年に、小椋山の麓なる、菱形
池のほとりに、八幡大神と御出現になりました。

又二の御殿に御鎮座ましますのは、天照大神の御弟素盞鳴命の御娘、三柱

宇佐神宮(會幣大社)

豊前の宇佐島

の比賣大神で、此の方々は神代のむかし、皇孫を守り奉れとの勅命を受けて、豊前の宇佐島、即ち今の大元山にお降りになりましたが、聖武天皇様の天平三年に、龜山にお移り遊ばされたのであります。

神功皇后

三の御殿は、神功皇后様の御神靈で、嵯峨天皇様の弘仁十一年の御鎮座であります。さて右の三御殿の大神達は、一心協力して、内は皇基を守り、外は異敵を防がんとお召し召しで、殊更に西國に御鎮座あらせられたものでせう。

元明天皇

當宮の御造營は、元明天皇様の和銅五年に、朝廷から八幡鷹居瀬社を立てられたのが始めで、聖武天皇様の神龜二年に、小椋山の頂に遷され、陽成天皇様の元慶元年よりは、三十三年目毎に、九國二島の課役で、改築をするごとく、定りました。足利時代からは、探題、守護、領主等の寄附で造營し奉り、今の建物は安政年間に、朝廷や幕府の御寄附をはじめ、附近十三ヶ國の勸化を以て、御改造になつたものであります。

安政年間

霧島神宮

(鹿兒島縣始良郡東郷山 山田大字田口鎮座)

霧島山

當宮の所在地は、日向と大隅の國境なる、霧島山の麓に當り、元は霧島峯神社、瀬戸尾神社、霧島中央権現など、呼ばれましたが、今は霧島神宮と云ふのであります。

天津日高彦火瓊杵尊

霧島神宮の祭神は、天津日高彦火瓊杵尊であります。欽明天皇様の御代に、慶胤仙人と云ふ者が、始めて此の山を開きました。後桓武天皇様の延暦七年に、山上噴火のため、社殿焼け失せ、村上天皇様の御代には、性空上人が神殿と僧坊とを造り、鳥羽天皇様の天永三年と、六條天皇様の仁安二年と、前後二度に亘つて、山上大いに燃えましたが、神像には何の御恙もあらせられず、依然山上に御鎮座あらせられました。

二度の山火事

所が夫れより約百二十餘年を経て、四條天皇様の文暦元年に、又もや大噴火があつて、社殿も焼け亡せましたのを、文明十六年、島津忠昌が、兼慶法師に命じて、社殿を再興させ、且つ百石の社領をも寄附したのであります。

享保十四年

かくて享保元年九月、またく山上に火を發して、神社寺院共一棟も残らず焼き拂はれましたから、同じく十四年、今の地に宮殿を造營して、御遷座

霧島神宮(分幣大社)

遊ばされたのであります。

降つて明治七年二月、從來の社名を廢して、霧島神宮と改め、官幣大社に列せられました。

伊非諾神社

(兵庫縣津名郡 多賀村鎮座)

本社は淡路島の西岸、郡家村を距ること、南方十八町、東岸志筑町を距る、西の方一里二十三町の地に位置を占め、三面は群山に圍まれ、一面海に臨む方は、土地も平らに、森林繁茂する所に、宏壯な社殿があつて、如何にも神さびた勝地でありませす。



伊非諾神にましく、日本書記と云ふ書物によると、此の神が葦原の中國で、御事業を終へさせられ、後此の淡路島に幽宮を建て、長く御住ひになつたとの意味が

伊非諾神

淡路島

記されてあります、之を實に本社 of 起原であります。伊非諾神の御神徳の著しいことは、茲に申し上げる迄もありませんから、わざと省いて置きませう。

併し代々の天皇の、御崇敬の深くあらせられたことは、種々の史籍にも見え、近くは明治三十六年十一月に、今上陛下御親臨なされ、特別大演習を、播州の野に御舉行あらせられた時、舞子御駐在所から、特に北條侍従を御差遣なされて、神饌幣帛料を賜はり、又明治三十七八年、日露開戦の詔勅の發布せられた時も、臨時奉幣を行はれ、平和克復の時にも、同様の御儀がありました。

北條侍従

本社現在の社地は、一萬六十七坪を占め、境内には老杉古松鬱然として茂り、本殿の東に當る透塀の内には、連理の神、子生椿などの名本があります。抑も子生椿は、木に瘤がある所から、かく名付けたものではあります、子生椿のない人が此の木を幹を抱く時は、必ず效驗があると云ふので、廣く世人に知られて居ります。

連理の神
子生椿

伊非諾神社(官幣大社)

香椎宮

(福岡縣糟屋郡香椎)

神功皇后

當宮の御祭神は神功皇后様であります。此の方は人皇十四代の帝、仲哀天皇様の御后で、其御家系は、人皇第九代開化天皇様の御曾孫息長宿禰命の御

息長足姫命

姫君で、御母は葛城之高額姫命と申し、皇后様の御本名は、息長足姫命と仰せられます。



杉綾木神御宮椎香

られ、仲哀天皇様の二年二月に、御一所に越前の敦賀へおいでになりましたが、其後のことは、別の條に詳しく記して置きましたから、こゝには申しません。

仲哀天皇

元正天皇

御神託

そこで當宮鎮座の次第は、皇后様がお崩れになりましてから、四百五十餘年を経て、第二十九代の帝、元正天皇様の養老七年二月六日に、皇后様の御託宣がありました。其趣は「むかし我が、仲哀天皇様の神靈を祀つた香椎の古宮に近く、三種の重器三韓征伐に携へられた御劍、御鉾、鐵の御杖を埋め、其上に植ゑたのは、鐵の袖に挿た杉の枝であつた。そして我誓ひに、今より此の所に、わが神靈を留め、天地の有らん限り、敵國を降伏させ、國家を護らう、故にわが神靈を彼所に祀れ」と、かう仰せられました。

聖武天皇

此の御神託を聞いた太宰府では、直に其旨を朝廷に申し上げますと、朝廷に於かせられても、敵國降伏國家鎮護の御神託の趣を、殊の外尊く忝く思召され、時を移さず九州に勅を下し、材木や人夫を集めて、宮殿の造築に着手せられました。其翌年聖武天皇様の神龜元年冬十二月になりまして、先づ御神殿が出来上り、次で幣殿、拜殿、攝社、末社、祭祀用の殿舎などが出来て、こゝに立派に築き上げられたのです。當宮には別に古宮がありますが、之は仲哀天皇様の御神靈を、皇后様が御

香椎宮(曾幣大社)

香椎廟

棺掛椎

自身にお祀り遊ばされた宮で、ひかしは香椎廟と申しました。
また此の古宮の御前に茂つて居る椎の木は、仲哀天皇様がお崩れになつた時、暫く御柩を掛けさせられたので、棺掛椎と唱へ、殊に名高くも尊い神木であります。

日本お宮物語

六〇

宮崎宮

(宮崎縣宮崎郡大宮村大字下北方鎮座)

神武天皇

若御毛沼命

宮崎宮出

當宮の祭神は、神武天皇様で、相殿には彦波瀲武鸕鷀草薙不合尊と、玉依姫命とを齋き祀ります、神武天皇様は誰も知る如く、諱を神日本磐余彦命と仰せられ、鸕鷀草薙不合尊の第四番目のお子様で、御幼名を若御毛沼命とも、狭野命とも申し、御母は玉依姫であります。

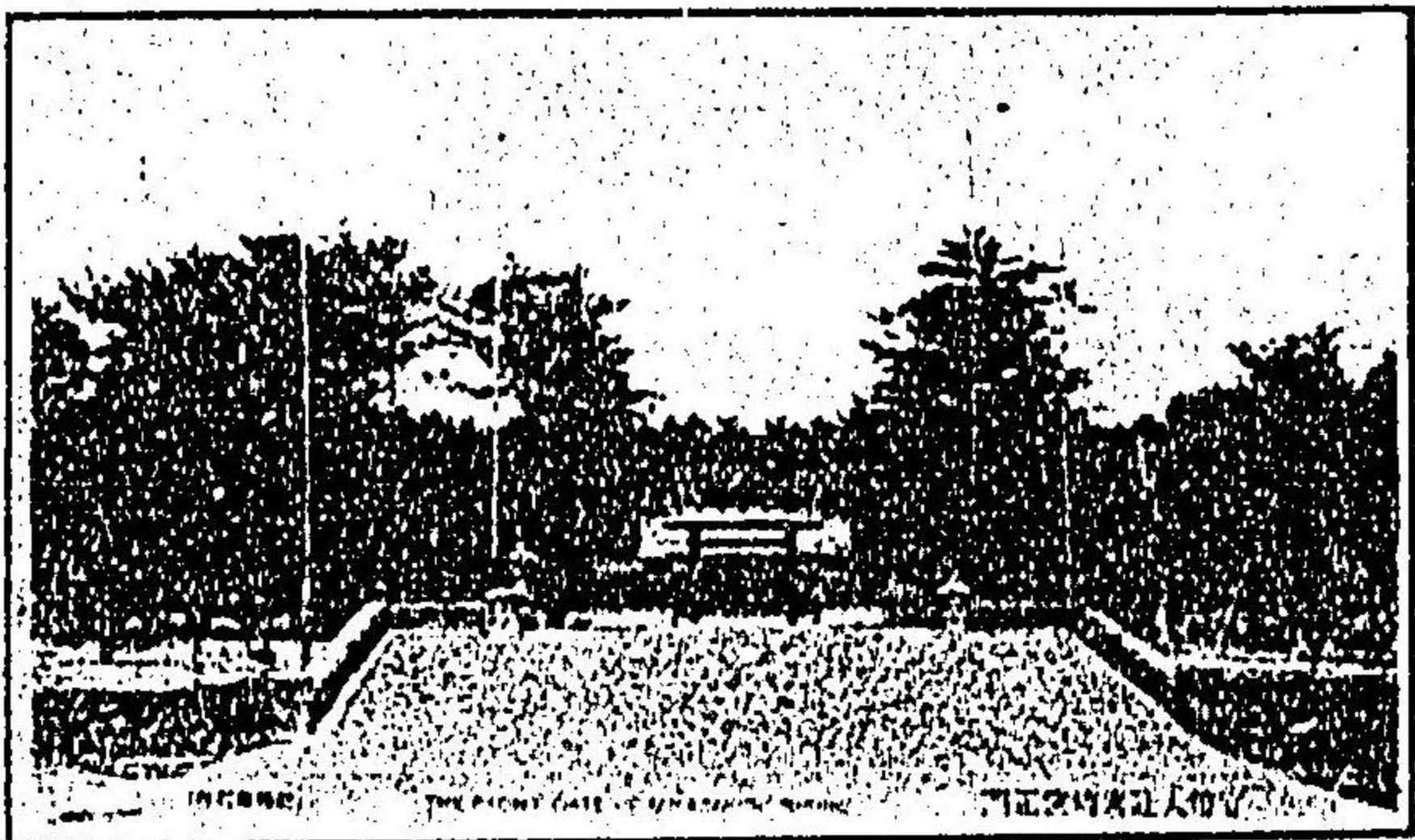
神武天皇様は天資御聰明に、御年十五の時太子となり、宮崎に都を開き、宮崎宮にあつて、天下をお治めになりましたが、四十五歳にして都を東方に遷すことを思立たせられ、皇兄皇子群臣等を宮中に會して、其事を議決し、舟師を率ゐて宮崎宮を御出ましになりました。

高千穂宮

建紫龍命

神武天皇御降誕大祭會

さて之より後、大和の土賊を平げて、橿原の宮に御即位遊ばされる迄のことは、何人もよく知つて居ること故、こゝには省略することゝ致します。一體此の宮崎宮は、所謂高千穂宮なる皇居の地で、



神武天皇が東遷の御雄略を思立たせられた、大切な遺跡でありますから、神八井耳命の御孫建紫龍命が、筑紫鎮守の任にあつた時、わざ／＼此地に來て遺跡を探り、其所に社殿を營まれたのが、抑も當社の起原であります。

されば御代々の天子様の御崇敬も非常に厚く、社殿改築のことも、屢々ありまして、最近では明治三十二年に、神武天皇御降誕大祭會と云ふ團體が起り、政府の補助と、帝室よりの御下賜金とで、宮殿や各種の建物を改築し、同時に神苑をも廣め、

宮崎宮(會館大社)

六一

元來當宮は、もと神武天皇社と云ひましたが、明治六年には縣社となり、名も宮崎神社と呼び、更に國幣中社に列せられ、後又宮崎宮と改め、十八年官幣大社に昇格したのであります。

又此の宮の境地は、目下三萬三千四百十五坪の廣さで、其内二萬二千餘坪は、松と杉との林となり、いづれも數百年を経たものばかり、豈猶暗く神さびて、一入尊殿の念を深からしむるのであります。

榎原神宮

(奈良縣高市郡白根村大字畷後鎮座)

當神宮は實に天皇第一代の帝、神武天皇様を祀り、又皇后媛踏鞬五十鈴媛命を合祀する所であります。抑も神武天皇様は、彦波瀲武鸕鷀草薙不合尊の御四の皇子におはしまし、御名を神日本磐余彥命と仰せられ、英武絶倫の御氣質に渡らせられ、父君の御寵愛深く、遂に皇太子に立たせられました。はじめ日向の高千穂宮において遊ばして、兄君達と御相談なされるには、『むかし我天祖は、此の豊葦原の瑞穂國を擧げて、悉く天孫に授け、以て統

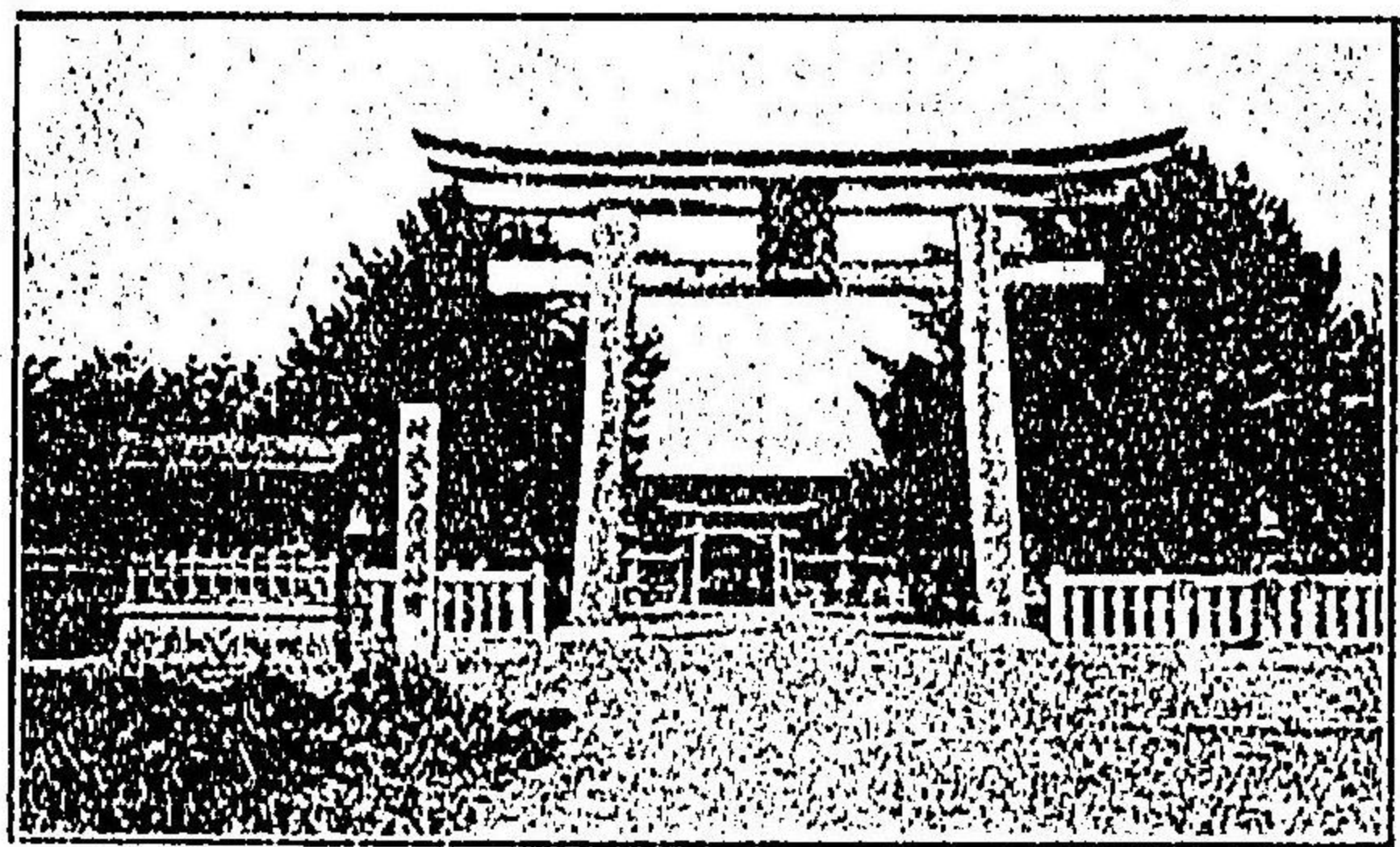
數地の坪

神武天皇
踏鞬五十
鈴媛命

高千穂宮

東征の議

治せしめられた。然るに天孫より三世、西邊に都を定めて、東方の國々は皇化に浴し得ない。されば會長各地に起り、戦亂止む時なく、良民の苦しみは



一方ではない、故に此の際是非共之を統一しなればならぬ。思ふに中原の地は、我帝國の中央である、帝國の事業を弘め、天下に君臨すべきは此の地の外にない、宜しく都を遷すがよい」と、かう仰せられ、自から舟師を率ゐて、東征の途にお上りなされました。

それから攝津、河内、紀伊の國々を経て、首尾よく大和國にお進みなされましたが、此の間前後六年を経て、諸國全く平き、中州の地は平定して、皇威は八方に振ひました。こゝに於て天皇は、天祖の威靈によつて、此の平定を見たことを喜び給ひ、畷傍山の東南榎原の地に、宮室を造つてお住みになりましたが、之ぞ實

榎原

榎原神宮(官幣大社)

大物主命

即位元年

鳥見山

西内成郷

に榊原の宮であります。
かくて大物主命の御女なる、媛蹈鞴五十鈴媛命を納れて皇后とし、神籬を建て、八柱の神を祭り、三種の神器を正殿に祀り、群臣に朝賀せしめられたので、之が即ち即位元年であります。

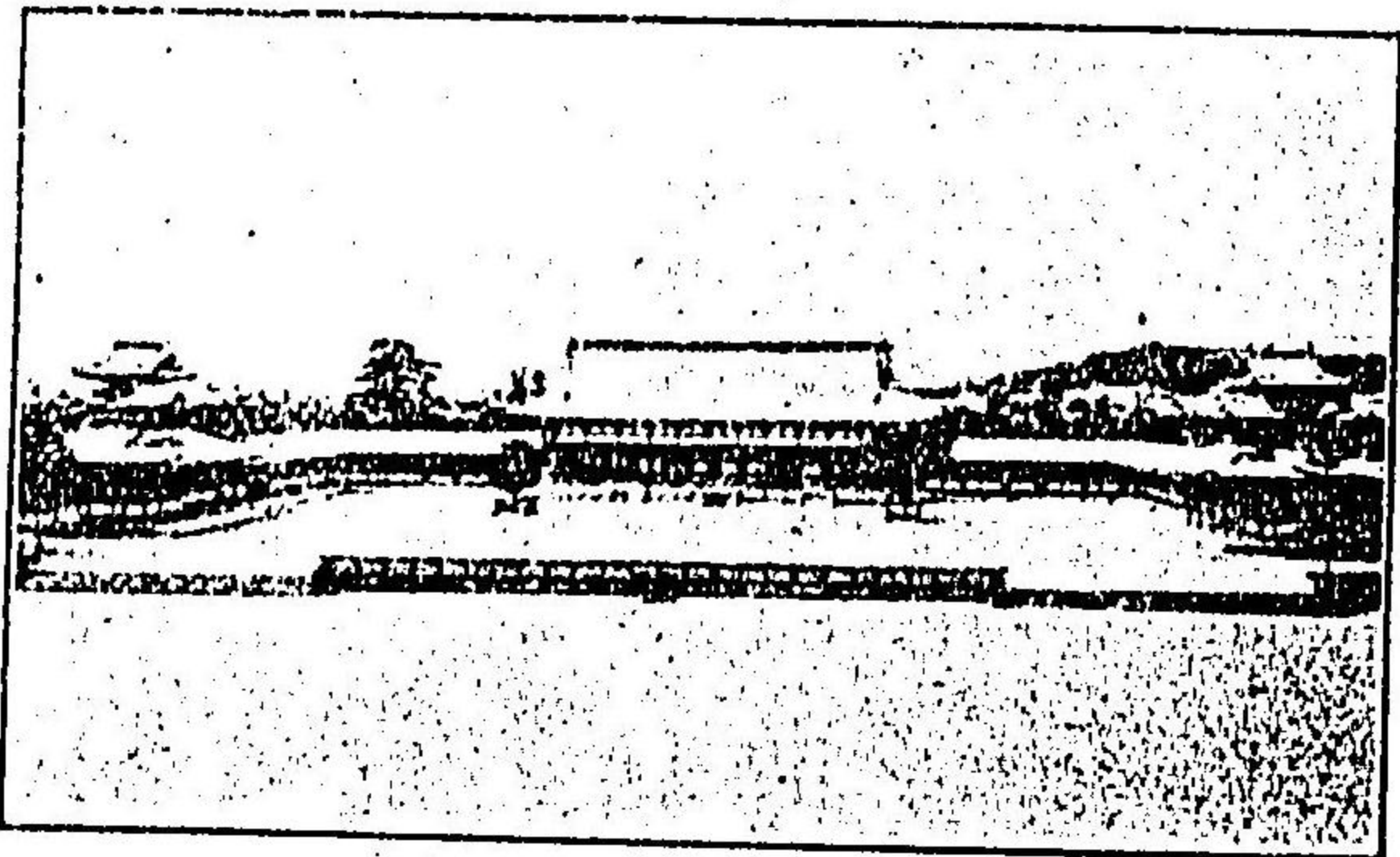
同二年には、諸臣の功を論じ賞を行ひ、四年鳥見山に皇祖の神靈を祀り、四十二年皇子神淳名川耳尊を皇太子にお立てになりましたが、之を綏靖天皇と申します。

神武天皇様は、御在位七十六年、御壽百三十七歳で、榊原の宮にお崩れになりました。そして其翌年畝傍山の東北の御陵に葬り奉つたのです。一體此の榊原の地は、神武天皇様が、天祖建國の神勅に従つて、萬世一系の皇基をお開きになつた所ですから、明治になつてから、西内成郷と云ふ人が、多年探究の末に、當局大臣に建言し、詳しく調査の結果、全く此の地と確定しましたので、明治二十二年神宮を此の地に建て翌年三月榊原神宮の號を仰せ出され、同時に官幣大社に列せられたのであります。

桓武天皇
平安京

平安神宮

(京都市上京區
岡崎町鎮座)



天皇陛下の御名代として、

平安神宮(官幣大社)

常神宮の御祭神は、桓武天皇様御一座であります。初め明治廿八年のことでありました、京都市平民等は、桓武天皇様が、一千年の前にあつて、此の平安に都を奠めさせられた御聖徳を追慕し、且つ其鴻業を欽仰して、一千百年祭を營み、此の地に天皇を奉祭しやうと思ひ、同志を募り、官許を得て、新たに社殿を築き、又天皇が最も大御心を留めさせられた、大極殿を模造して建てました。

かくて社號を平安神宮と定め、社格をば官幣大社に列せられ、特に内帑金貳萬五千圓を下賜せられましたので、同年十月二十二日其式を行はれ、山階宮晃親王殿下が、之に御臨み遊ばされたので

大極殿

す。當宮の神殿は、全く正式に據り、唯大極殿、歩廊、蒼龍白虎の二樓、龍尾
擬應天門などの形が少しく小さいだけで、其構造は全く延暦年間の舊形によ
つたものであります。

武徳祭

當宮の例祭は、四月十五日に行はれるので、又五月四日には、武徳祭と云
つて、全國の武術家を集め、盛んなる祭事を行ひ、以て神靈を慰め奉り、終
つて武徳殿に於て、古來の武技を演ずることゝなつて居ます。

時代祭

猶十月二十二日に行はれる私祭は、一に時代祭と呼ばれ、市民の中の有志
者が延暦時代以降の、時代行列をして練りあるき、神幸の供奉を致しますが、
之が又名物となつて、わざ／＼見に来る者も少くありません。

氣比神宮

(福井縣敦賀郡越前町大字曙鎮座)

抑も當宮の御祭神は、御倉津大神、仲哀天皇、神功皇后、日本武尊、譽田
別天皇(應神)、玉媛命(神功皇后の御妹)、武内宿禰命の七柱であります。

御倉津大
神

中にも御倉津大神は、大むかしから此の敦賀に鎮まりまし／＼て、國民を
恵ませられたので、國人何れも畏み敬ひ、決して等閑にしませんでした。さ
ても茲に仲哀天皇様の二年二月、三韓征伐の大御心から、遙々と此の地に御
幸なされて、御親ら大神に幣帛を奉り、かつ行宮を此の地に建て、御滞留
になりました。時に天皇は皇后に仰せらるゝには「朕此の國を見るに、海陸
相通じて、異賊を防ぐには最もよき地である。朕入州を巡見して後、こゝに
宮殿を造らうと思ふ、其方は暫く止つて、三韓退治の事を祈れ」と、かう仰
せられて、三月敦賀をお出ましになり、紀伊より長門國に行幸遊ばされたの
です。

三韓退治
の祈

洞珠滿珠

かくて天皇は、長門國から急使を以て、皇后をお召しになりましたので、
皇后も又御自身に、幣帛を大神に奉り給ふと、夢に大神の御神靈が現れて、
海神を祭れとお諭しになりましたから、皇后は其教へに従つて、六月船出を
なされ、洞珠滿珠を海中に得、七月長門にお着きになつて、之を天皇に獻せ
られたのです。

氣比神宮(官幣大社)

筒飯大神

天皇は筑紫の宮に於て、皇后をはじめ武内宿禰、安曇連等の重臣を召して「汝等教賀に行て筒飯の大神を祭れ」と仰せられました。そこで皇后は、玉媛命と大臣連等を従へて、教賀にお出ましになり、大神をお祭りなさいませと、大神は玉媛命に神託して「天皇決して賊の叛くのを御心配なさいませ、及に血ぬらずに自然に歸順しやう」と仰せられました。

そこで皇后は、六月を以て教賀津を船出せられ、海路筑紫にお歸りになりました。大神の教へのまゝを奏聞なさいましたが、夫れより幾程もなく、天皇はお崩れになりましたので、皇后は喪を秘し、神勅のまゝに三韓を征伐なされたのです。

譽田別命

されば皇太子譽田別命も、日頃大神の御稜威を畏み、御兩親の蒙らせられた御恩を謝する爲めに、武内宿禰を連れて、親しく御参拜遊ばされ、假の宮を營んで、暫く御滞在になりましたが、命の御夢に大神が現れて、「汝の名を以て御名に易へたく思ふ」と仰しやいますので、命は「仰せのまゝに従ひます」とお答へになりますと、大神は重ねて、「然らば明日の朝、濱まで來よ、

易名の幣

易名の幣を奉らう」と申させられました。譽田別命は、夜の明けるのを待ち兼ねて、濱邊に出て御覽になりますと、鼻を缺いた入鹿魚が浦一面に居ますので、譽田別命は、「吾に御食の魚を賜つたから、御食津大神と申し上げませう」と仰せられました、即ち今に氣比の大神と申し奉るのは、全く此の爲めでありませす。

倉稻魂命

一體御食津大神は、別の御名を倉稻魂命とも申して、播種養蠶の道を開き、人民の幸福を進められ、飢饉の憂ひをお除き下されたので、代々の天皇の御崇敬も深かつたのです。

蒙古來襲

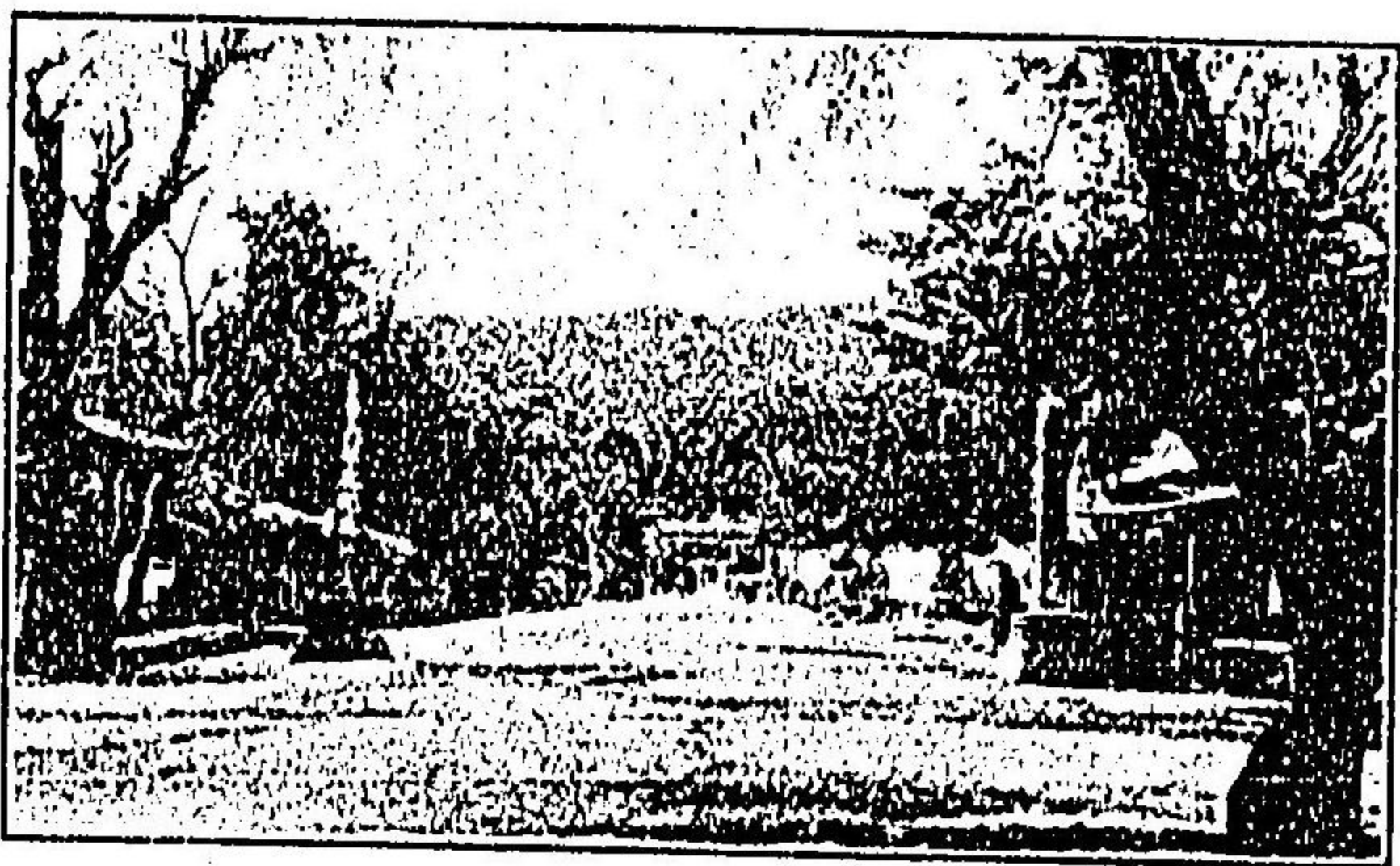
當宮の神験多き申すも、後宇多天皇の弘安四年、蒙古來襲の際には、教賀の山々鳴動して、數千羽の白鷺が氣比の神林に集り、其まゝ西に向つて飛び去りましたが、此の夜肥前の浦に、數千の白鷺が現はれ、賊船の間を飛び廻りながら鳴き立てますと、果して暴風吹き起つて、賊船の悉くは沈没しました。

さて明治維新の後國幣中社に列し、十一年十月 今上陛下親しく御参拜あ

本殿と大華表

天津彦火高見尊

八幡大菩薩



らせられ、二十八年官幣大社に昇格、次で氣比神宮と呼ぶこととなりました。又當宮の本殿と大華表とは、特別保護建築物に指定せられたものです。

鹿兒島神社

(鹿兒島縣始良郡四國分村大字内鎮座)

古の義を仰せ出されました。

鹿兒島神社は神武天皇様の御創立にかゝり、祭神は天津彦火高見尊でありましたが、欽明天皇様の御代に、應神天皇様と其皇后様と、及び仲哀天皇様同皇后様と、此の四柱を相殿に齋き祭り、夫れより後神佛混合して、八幡大菩薩と稱へ、島津家が當國へ来てからは、殊に源家の氏神として、代々非常の尊崇をされました。然し御正祀鹿兒島神社の御社號は、七百年來土地の者も知らなかつたのですが、明治維新と共に、現今の御社號に、復

正宮濱下の神事

豐玉姬命

滿珠干珠

當社の社務記によれば、毎歲八月十五日の正宮濱下の神事には、二百六十人の騎馬武者が神輿の供奉をするので、其花々しさは一通りでありませぬ。今も毎年三月十日の祭日に、一の鳥居より二の鳥居迄の間、大路の左右は云ふ迄もなく、中央にまでも店を出して、種々の品物を賣る中に、木製の鯛と化粧宮とが、最も名高い土産で、即ち當社祭典の舊例となつて居ます。

此の化粧宮は、彦火々出見命が、龍宮に於て、豐玉姬命と婚姻の式に擬へ、木の魚は命の釣鉤を取つた、赤女魚の故事に倣つたものです。又當社の神庫に納めてある隼人狗二面は、俗に御獅子と呼ばれ、干珠満珠も同じく神庫に藏められ、干珠は白色で、満珠は蒼色を帯びて居て、共に鶏卵程の大さで、命が海神より得させられたものであります。

當社はこれまで屢々炎上したので、古代の神寶記録等は、惜い事に大半焼け失せ、今残つて居るのは、遙か後の物が多いと云ふことです。

鵜戸神社

(宮崎縣南那珂郡鵜戸村大字宮浦鎮座)

鵜戸神社(官幣大社)

鶴戸六社
大権現

速日峰

崇神天皇

日本お宮物語

本宮の祭神は、日子波瀲武鸕鷀草薙不合命で、相殿には天照大御神、天忍穗耳命、日子火瓊杵命、日子火々出見命、神日本磐余彦命の五柱を合せ祀り、別に鶴戸六社大権現とも云ひます。



様の御代のこと、神殿を御造營なされたのは、第三十四代推古天皇様の朝

本宮の所在地は、南海に突き出た、南北十六間、東西二十一間、高さ一丈八尺の窟内であり、即ち主神の御降誕遊ばされた靈地で、前は一面の蒼海で目を遮るものなく、奇怪な形の岩や石が、方々に峙つて居て、夫れに波が打ちよせて、時ならぬ雪の花が、玉垣のあたりに亂散る景色は、他に求めることが出来ません。又宮の後方には、御陵地なる速日峰が高く聳へて、一入の尊嚴と景致とを添へて居ます。

仁王護國寺

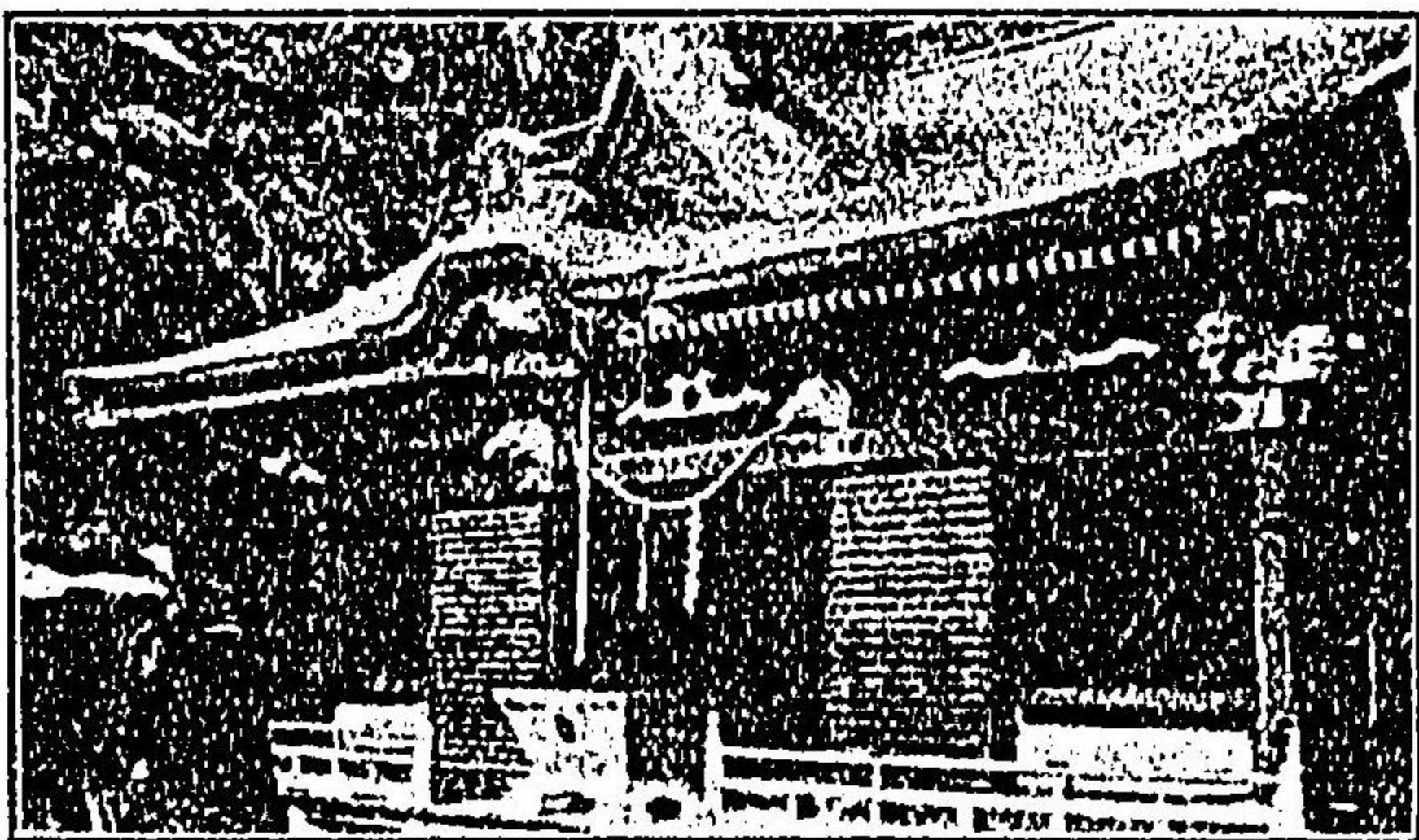
領主伊東



久と云ふ者に勅を下されて、神殿を再建させ、寺門を建立し、仁王護國寺と云ふ勅號をさへ賜つたのです。又第五十代桓武天皇様の時には、光喜坊快

再築せられました。明治維新と共に、権現號と寺院號を廢して、鶴戸神社と呼び、七年鶴戸神社と改め、二十八年官幣大社に昇格せられたのであ

鶴戸神社(官幣大社)



浅間神社

(静岡縣富士郡大宮町大宮鎮座)

ります。

當富士山本宮は、即ち富士山の南面に鎮座して、登山の表口になつて居ます、甲斐にある浅間神社、駿河静岡の浅間神社をはじめ、全國に浅間神社と名のつくものは、甚だ多くありますが、此の大宮町に御鎮座の浅間神社こそ、全國第一の本宮であります。

されば朝廷の御尊信も厚く、官幣大社に列せられてあります。尤も當社は、元社殿とはなく、富士山を御神體として祭つたのですが、人皇第七代孝靈天皇の御代に、此の山の頂上から噴火して、永く鳴り動き、人民は恐れて、思ひくへに四方へ逃げ延びましたから、國中が大層荒れはてました。

されば第十一代垂仁天皇様の御代に、深く人民の不幸を哀れみ、麓の地に大神を祀つて、之を鎮めさせられ、更に景行天皇様の御代には、日本武尊の東夷征伐が、此の山の大神の御威光によつて、首尾よく功を奏したと云ふの

大宮町

孝靈天皇

日本武尊
の東征

で、再びお祀りになりました。此の方は山宮と申して、唯今では攝社になつて居ます。

かくて後桓武天皇様の延暦十九年に、山が又焼けて、宮殿も危険になりましたから、平城天皇様の大同元年には、坂上田村麿に勅を下して、山宮から今の地に移させられました。

抑も當社の御祭神は、木花咲耶姫命であります。此の神は大山祇神の御息女で、天孫瓊々杵尊の神妃に渡らせられます。さて此の神がどうして富士山に御鎮座になつて居るかと申しますと、御父大山祇神は、専ら山の事を掌り給ふ所から、世界第一の富士山を以て、其幽宮と定められ、後々まで日本國の鎮護とならせられたのです。

父君の許にいらつしやいましたが、後天孫の神妃



されば木花咲耶姫命も、

浅間神社(官幣大社)

日本國の
鎮護

木花咲耶
姫命

坂上田村

とならせ給ひ、萬民から國母と仰がれる様におなりせられたから、父神も大に御満足なされて、其幽宮を譲らせられたので、姫神は専ら此の山を御主宰なさいました。

淺間造

さう云ふ譯ですから、昔は神殿もなく、御内院を神靈の住ませられる所として、山の全體を御神體と仰ぎ奉つたのであります。當社の神殿は、一重の樓閣造で、世に淺間造と云ひ、丹青を以て彩色を施した日本に類なき構造です。即ち之は清和天皇様の貞觀七年に、大神が御自身に造り現はされたのを、其まゝに構造したのでありますから、昔より少しも變りはありません。

建部神社

(滋賀縣栗太郡瀬田村大字神領鎮座)

當社の祭神は日本武尊で、相殿は天明玉命、權殿は大己貴命であります。景行天皇様の四十六年の創立にかゝり、はじめは神崎郡の建部郷にありましたのを、天武天皇様の白鳳年間に、今の地に移されたのであります。

日本武尊
神崎郡建部郷

本國の一宮のことですから、社殿は壯麗に、老松四圍に茂つて、一入神威の靈驗を思はせます。

當社境地の坪数は、實に八千九百五十四坪に餘り、攝社末社は左に並記する如く、願る多いのであります。



- | 社 | 神 | 部 |
|----|--------|----------|
| 攝社 | 聖宮神社 | 大足彦忍代別尊 |
| 同 | 大政所宮神社 | 播磨稻日大郎姫尊 |
| 同 | 藤宮神社 | 布多遲比賣命 |
| 同 | 若宮神社 | 建部稻依別王命 |
| 末社 | 行事神社 | 吉備臣武彦 |
| 同 | 弓取神社 | 大伴連武日 |
| | | 弟彦公 |

同 箭取神社

建部神社(管帶大社)

不占立
尾張田子之稻置
乳近之稻置

同 藏人頭神社

七掬屋

別宮 毛知比神社

日本武尊、保食神

若宮 新茂智神社

稻依別王命、少彦名命、

札幌神社

(北海道札幌市)

今上天皇陛下の勅願

抑も當社は、長らくも、今上天皇陛下の勅願にかゝる、實に北海全道の宗社でありませす。即ち全道開拓の守護神、皇國北門の鎮護として、北海全道の住民の尊崇するも、元より其とてありませす。

三柱の祭神

即ち當社の祭神は、本道を領し給ふ大國魂大神、豊秋津洲の經營に御力を盡させられた大名貴大神、藥祖醫王と尊稱する少彦名大神此の三柱の神を勅裁まし、明治二年神祇官に於て、鎮座式を行ひ、同年九月御靈代、御幣物宣命を札幌に遷座し、當時の開拓使假廳構内に、假の御殿を設けて奉祀したので、四年國幣小社に列し、夫れより累進して遂に官幣大社となりました。御祭神の御功績は、一々記す迄もない事ですから、重複を厭ひて之を省略

します。

宗像神社

(福岡縣宗像郡田島村大字田字島)

天の安河原

當社の祭神は、田心姫命、湍津姫命、市杵島姫命の三柱の女神で、此の神には天照大御神と、素戔嗚命とが、天の安河原で、御誓ひをなされた時、大神のお生み遊ばした子で、素戔嗚命の御子と定めさせられた方々です。

大國主神のお妃

天照大神は、かくて後三柱の神達に仰せられるやう、『汝等三女神は、筑紫の國に天降つて、天孫を助け奉れ』と。其所で女神達は、早速筑紫國にお出ましになつて、其國をお治めになりました。さて沖津宮にいらせられる、多紀理毘賣命は、大國主神のお妃となつて、味鋤高日子根神と下照比賣命を生み、邊津宮に居らせられる高津比賣命も、大國主神のお妃になつて、積羽八重事代主神と高照比賣命とお生みなさいました。

此の様に立派なお子様達を生んで、御教育なされたばかりでなく、大國主

神の内政を掌つて、専ら此の國の御經營に力をお盡しになつたのです。天孫御降臨の際には、大國主神に勸めて、屑く此の國土をお譲りある様に御忠告

遊ばされ、之も首尾よく濟みました。又天孫瓊々杵尊の御降臨以來、天祖の勅命に従つて、忠實に其御事業をお助けになりましたが、猶永く此の國土を守護したいとの思召しで、瀛津宮、中津宮、邊津宮の三ヶ所に、其御身形を殘し置いて、御姿をお隠し遊ばされたのです。

抑も當社鎮座の由來は、天照大御神の御勅命によつて、三柱の女神は、先づ筑紫の道中にお降りなされ、瀛津宮には青羅玉を表とし、八坂瓊の紫玉をば中津宮の表として置き、又邊津宮の表には、八咫鏡を置かせられ、かくて御身をお隠しになりました。後の人が宗像社と改めた



筑紫の道

瀛津宮
中津宮
邊津宮

身形社

ました。されば社名をも元は身形社と呼んだのを、後の人が宗像社と改めた

とも云ひます。

此の様に三柱の女神は、永く天津日嗣の御隆盛を祈り、外寇を防ぎ、國家を守つて、國の威光を海外にお揚げなされたことが、少くありませんが、殊に神功皇后様が、かの三韓を御征伐なされた時には、特別の神祐を下されたので、歴代天皇の御崇敬は、いよ／＼厚く、明治の御代となつて、官幣大社に昇格せられたのであります。

吉野宮

(奈良縣吉野郡吉野村大字吉野山鎮座)

日本第一の櫻の名所として知られた大和の吉野山は、又後醍醐天皇の行在所があつた所として、誰も知らぬ者はありません。此の山に鎮座せらるゝ吉野宮は、實に後醍醐天皇様をお祀り申すお宮です。

あゝ吉野宮の御神靈は、人皇九十五代の帝、後醍醐天皇様であります。天皇は諱を尊治と呼び、後宇多天皇の第二の皇子で、文保二年即位御年三十歳の時でありました。至つて御英邁に渡らせられ、王権の衰微を慨き、北條氏

吉野宮(官幣大社)

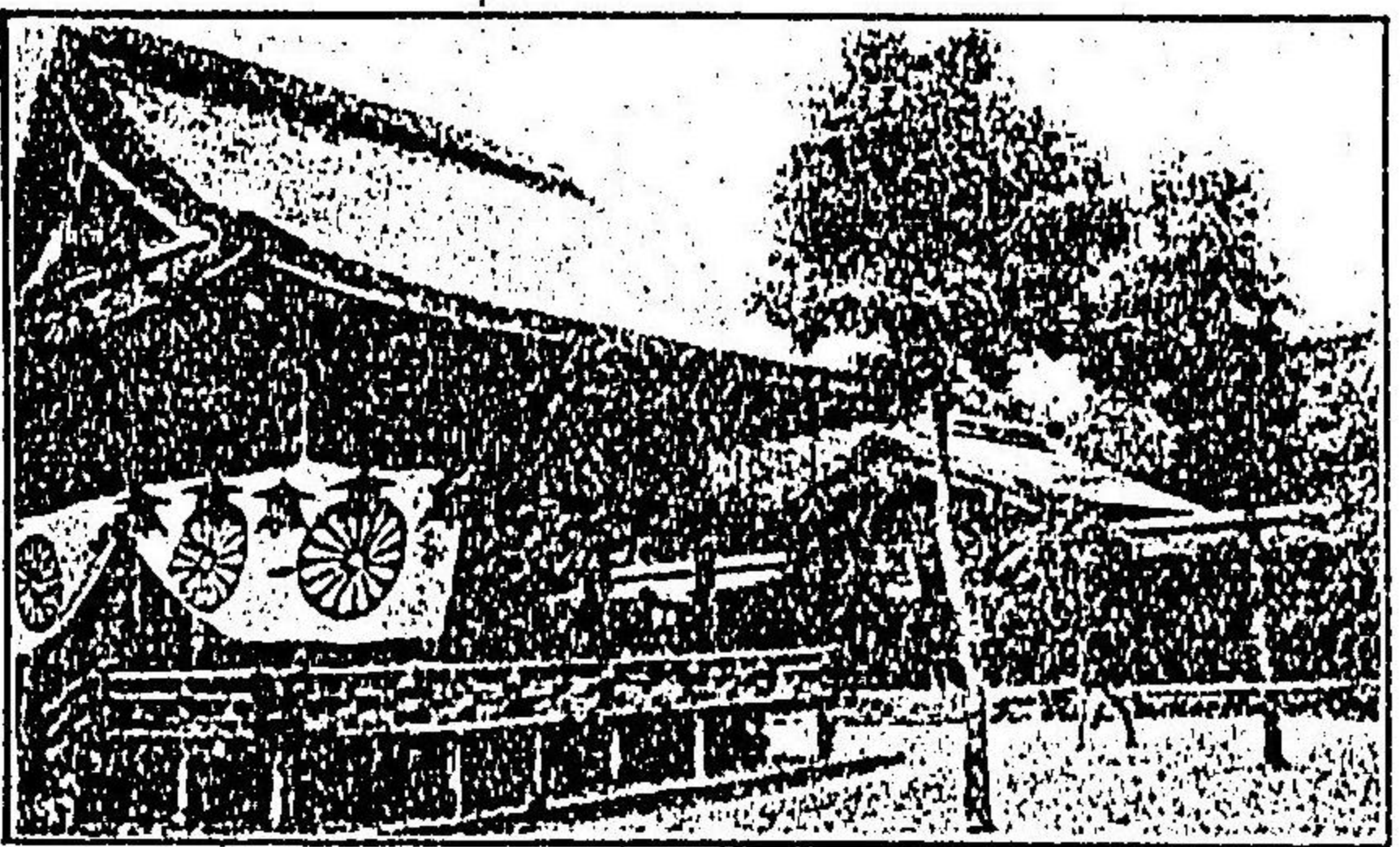
三韓征伐

後醍醐天皇
の行在所

北條高時

の無禮を憤り給ふの餘り、密かに忠義の武士を集めて、高時を誅する謀を廻らされました。此の事早くも敵方に覺られ、高時は大軍を以て逆襲して來ま

笠置山



隠岐

りました。

したから、天皇は元弘元年八月二十四日の夜、潜かに皇居をお出ましになつて、一ト先南都へ行幸し給ひ、更に笠置にお移りになりましたが、こゝも忽ち賊軍の陥るゝ所となり、いよゝ正成の赤阪城へお移りにならうとしました。其夜天皇は松野の下蔭に御身を潜め『さして行く、笠置の山をいでしより、天が下には隠れ家もなし』と、お詠み遊ばされたのですが、程なく賊軍の手に捕はれ身となり、宇治の平等院や京都の六波羅に、不自由な日を送らせられ、又翌年の春には、都に遠い隠岐の小島に、憂き月日を送らせられることゝな

船上山

恰も此の頃、諸國に勤王の武士が起つて、世の中も大分騒がしくなり、たから、天皇は翌る年の春、隠岐を出で、そつと伯耆の船上山にお入りになり、こゝで旗あげをなさいます。やがて北條氏も悉く滅びて、六月のはじめには、目出度く都にお歸りなされ、年號をも建武と改め、一トまづ王政維新の世となつたのです。

建武中興

足利尊氏

けれども天皇の御武運薄く、間もなく又足利尊氏が反きました。延元元年正月十日、天皇は叡山へお移り遊ばして、専ら逆賊追討のことを計らせられ、一度は首尾よく尊氏を西國に追ひ落して、一旦都へお還りになりましたが、賊の勢は再び激しく、又もや叡山に御動座なされて、官軍の御指揮をなさいました。

賀名生

併し今度は賊軍のために、花山院に幽閉の身とならせ給ひ、其年の暮には、三種の神器を携へて、密かに大和國の賀名生の里へ落ち行かれ、こゝを假の宮居と定め、更に吉野の宮へお移り遊ばされたのです。

南北兩朝

恰も此の時尊氏は、別に京都に天皇を立て、南北兩朝に分れましたが、

吉野宮(管帶大社)

天に二日なく、地に二王なく、一天萬乗の君こそは、實に南朝の君であります。さても後醍醐天皇様は、諸國勤王の士を語り、日夜回復の御事業に御心を勞せさせられ、其結果遂に御不豫とならせ給ひ、最早や御回瘞も覺束なく見えたので、位を皇太子義良親王に譲つて、三種の神器をもお傳へなさいました。

義良親王

天皇御臨終の御遺言に、朕が骨は南山に埋まるとも、魂は必ず宮城の天を望み、誓つて朝敵を滅さねば止まぬ、と仰せられ、遂に空しくならせ給ひました。時に御齡五十二歳でありました。

かくて明治維新の後、吉野の勝地を選んで、神殿を造營せられ、以て天皇の神靈を慰めさせられたのが、取りも直さず此の吉野宮であります。

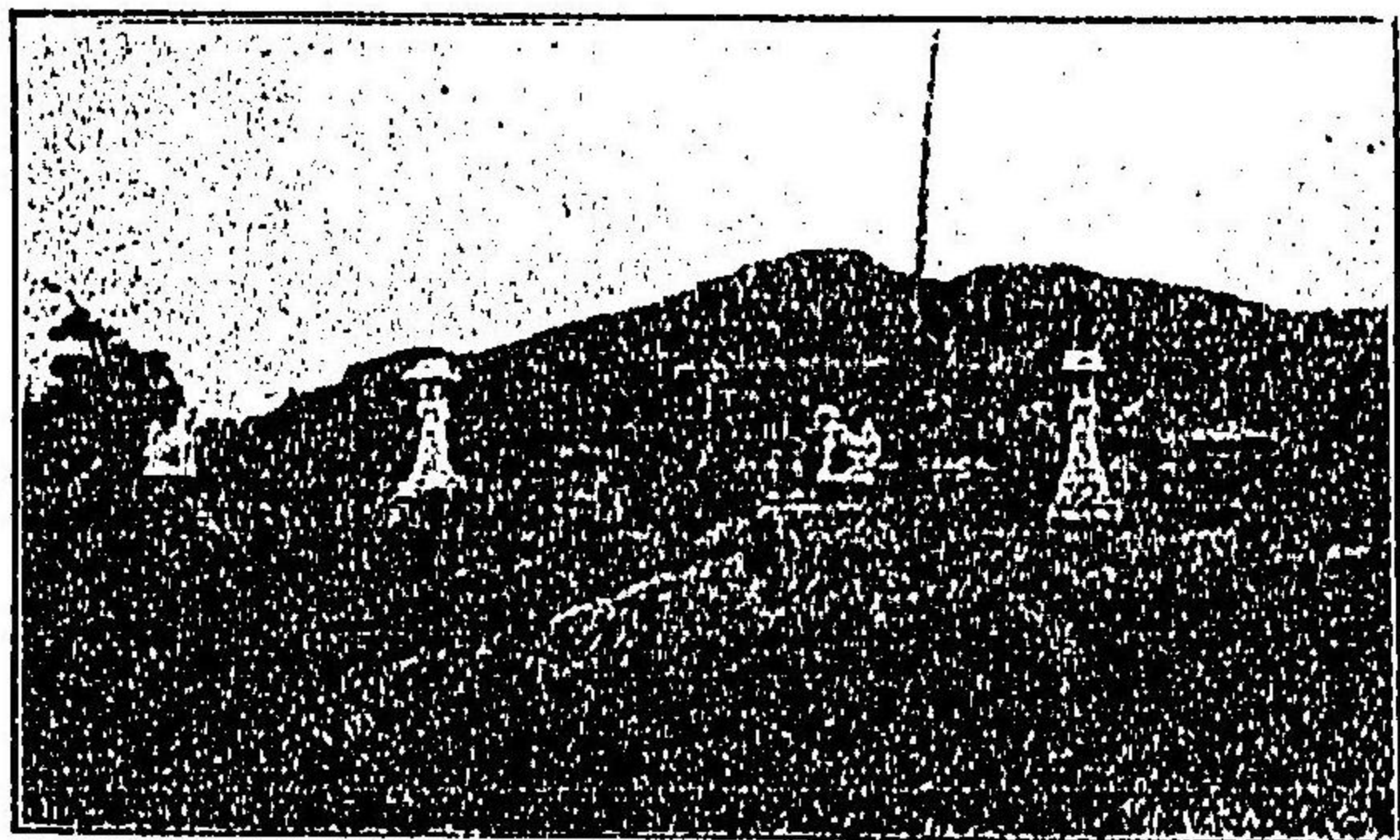
臺灣神社

(臺北縣芝蘭庄)

當社は明治二十七八年戰役に、下ノ關係約によつて、從來清國の領地であつた本島が、帝國の版圖となつた後、即ち明治三十三年の創立であります。

劉永福
北白川宮
能久親王

本島は日本の版圖になりましたが、併し清將劉永福は、猶此の地に防戦して、容易に歸順しませんでしたので、近衛師團長陸軍中將北白川宮能久親王は、軍



を率ゐて之が征伐に向はせられ、明治二十八年六月から、同十月までの間に、首尾よく全島を御平定になりましたが、悼しきかな親王は、やがて御病に罹らせられて、空しく彼地にお薨れ遊ばされ

つたのです。

そこで三十三年に、まづ國土經營の神、大國魂大己貴、少彥名命の三柱の神を一座とし、能久親王をも本島の鎮守神として、壯嚴なるお社を建て、鎮祭せられることになりました。

さて能久親王は、はじめ満宮と呼び、又俗に上野宮、輪王寺宮なども申し上げました。伏見宮邦家親王の第九王子で、小松宮彰仁親王の御弟に當らせられ、明治五年北白

國土經營
の神

川宮の稱號を継ぎ、二十八年陸軍中將近衛師團長として、本島に渡航せしめし、王化に服せぬ土民を平定せさせ給ひ、臺北の近傍に御上陸、次第々々に南に進ませられたが、此の間には専ら兵士と糧食を共にして、一方ならぬ御艱苦を嘗めさせられ、爲に士氣も大いに振つたのであります。

所が何しろ蕃地のことでありますから、氣候も悪く、種々の疫病が流行して、遂に親王の御身をさへ冒したのですが、夫れにも屈し給はず、日々の軍務を繼し、近侍の者も、漸く重らせ給ふまでは、親王の御身に御恙あることを知らなかつたと申します。

かくて臺南城を攻め、賊將を虜にしやうと兵を進むる途中で、空しくならせられました。時に御年四十九、二十八年十月二十二日のことであります。

二十八日御遺骸を軍艦に搭じ、東京へお送り申したのですが、御途中すべて御生存の禮を用ひ、越えて十一月一日、勅して菊花章首飾と、功三級金鷲勳章とを賜ひ、陸軍大將に御陞進、五日喪を發せられ、豊島岡に葬り参らせたのであります。

臺南城

豊島岡

官幣中社之部

八坂神社

(京都市下京區
西町北側鎮座)

當社の祭神は主神素盞鳴尊、相殿には稻田姫命と、八柱御子神とをお祀り申してあります。人皇三十七代齊明天皇様の二年八月に、韓國の調進副使伊利之使主なる者が、新羅の午頭上におはします素盞鳴尊の御神靈を、はじめ八坂に齋き奉つたのが、即ち當社の起源であります。

御祭神の御傳記に就いては、事新らしく記す迄もありません。當社は天智天皇様の六年に、社號を感神院となされ、祭神素盞鳴尊をば、午頭天皇と呼ぶこととなりました。かくて朱雀天皇様の承平四年に、某と云ふ修行者が、はじめ社壇を建立し、夫れより屢々焼け亡せまして、現今の社殿は、後光明天皇様の、承應三年に、造營せられたものであります。

歴代天皇の御崇敬深く、種々の宣命を下された事は、數ふことも出来ぬ

感神院
午頭天皇

素盞鳴尊
齊明天皇
の二年

奉幣使の参向

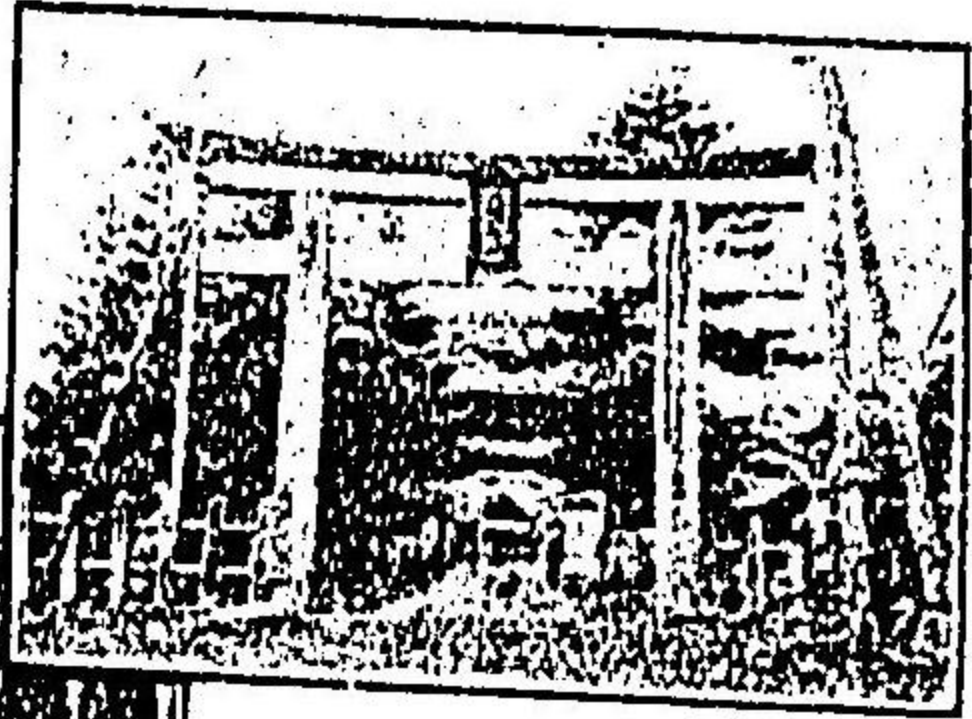
程でありますが、明治四年五月、國幣中社に列せられてからは、新年、新嘗、

例祭の三大官祭の折々は、奉幣使参向して、嚴かなる祭典を施行する例となつたのです。

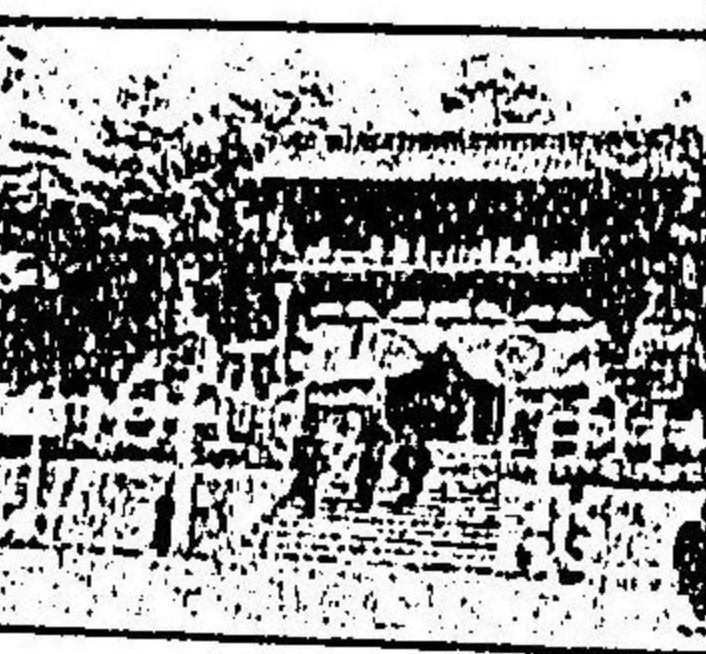
白峰宮

(京都市上京區今出川通飛鳥井町鎮座)

八坂神社南樓門



嵯峨の白



八坂神社西樓門

崇徳天皇

新院

母をば待賢門院と申し上げました。天皇の御位にわらせられること十八年、近衛天皇様に御讓位なされてからは、新院と申し上げたのです。

當宮は先帝、孝明天皇様の思召しを以て、慶應四年に今上陛下より勅使を下し給ひ、崇徳天皇様の御神靈を、讃岐國の白峰より迎へさせ、此の地に鎮座させ給ふたので、後明治六年には、淳仁天皇様の御神靈をも、淡路國から迎へて、同じ宮殿の中に合祀せられました。

崇徳天皇様は、鳥羽天皇様の第一皇子で、御

左大臣頼長保元の亂

恰も其頃、宇治左大臣頼長は、盛んに権力を振ひまして、世人からは悪左府とさへ呼ばれ、朝廷の内外が爲めに甚だ騒がしかつたので、やがて保元の

大亂が起りました。此の時新院の御味方には、平忠正、源爲義、爲朝等がついて居ましたが、間もなく戦ひ敗れて白川殿陥り、新院は如意山に遁れ、こゝで從兵を走らせ

讃岐院

て、獨り仁和寺へお入りになりました。かくて新院は、五六日の後に、都に遠い讃岐國に移され給ふたので、世に讃岐院とも申し上げます。彼の地では、初め林田邑廳の大夫高遠の家においでになつて、

こゝもまた、あらぬ雲井となりけり、空ゆく月の、影にまかせて。

と詠ませられて、獨り淋しい心を慰められました。やがて同國直島と云ふ一孤島に遷されたまひ、黒木の御所に閉ぢ込められて、一切人の出入を差し止められましたから、音するものは岸打つ波と、嵐の音ばかりで、そのさ

黒木の御所

白峰宮(管幣中社)

蓮如

びしさは何に例へん様もありません。
時に新院の御僧の師匠で、蓮如と云ふ者が、遙々此の地まで慕ひ参らせて
行きました。新院に御面會することが出来ませんので、歌を詠んで差し上
げましたが、末の一句をお指の血で直させられ、再び夫れを蓮如にお返しな
されたと云ふ事です。

鼓ヶ岡

さてこゝで三年の月日を送らせられた後、同國々府の鼓ヶ岡の御所に遷さ
れたまひました。此の鼓ヶ岡は、實に白峰山の麓にありませう。

五部の大
乗經

新院はこゝへお遷りになつてからも、朝夕となく九重の空を望ませられ、
御歸京の念は一日も已まなかつたのですが、御運一向に開かず、せめては自
分の手跡だけでも残して置き度いと思召され、五部の大乘經を寫して、御室
の御所へ送り給ひ、同時に、

濱千鳥、あとは都にかよへとて、

身は松山に、音をのみぞなく。

と、云つておやりになりましたが、之さへ少納言信西が計ひで、此のお經

樋門の海

文さへ、都には止め置かず、讃岐國に返してしまつたので、新院の御腹立は
一方ならず、かくなる上は、最早や都に歸る途もたえ、吾も亦生きて何の甲
斐があらう、死で大魔王となり、必ず此の怨みを酬ふなど、御指を噛みさ
つて、誓詞を書き、之を樋門の海にお流しになりました。

平左衛門
康頼

さて之よりは、朝夕の御食事も取らせられず、柿色の衣を着て、湯浴も梳
櫛も一切お止めになり、大魔王になる事を、お祈りになりましたが、此の事
早くも都に聞え、平左衛門康頼に監視させることゝなつたのです。

そこで康頼は、讃岐に下つて新院の御所に参り、つらく其御顔を拜する
に、御姿も常に異らせられ、煤けた御衣に、御血色は黒く黄ばみ、御髪は後
に長く垂れ、御鬚は前に逆立ち、御爪は延びて鷹の如く、御眼は電の如く光
つて、鋭く人を射ると云ふ有様です。

康頼は一目見たばかりで、再び見上げる勇氣もなく、其まゝ都に歸つて、
かくと復命しましたが、新院は御年四十六歳で、遂に鼓ヶ岡で空しくならせ
られ、御遺詔によつて、御尊體を焼き奉り、白峰山に葬り参らせられたのであり

粟田宮

治承元年追諡して、崇徳天皇と奉り、猶其御怒りを慰める爲に、保元の戦場の跡に、立派な社殿を造營して、粟田宮と呼び奉つたのです。又讃岐では御配所の地のことゝて、愈御神靈をかしこみ、金刀比羅宮大物主神に、崇徳天皇様の荒御魂を配祀しました。故に當白峰宮は、其御本體であらせられます。

淳仁天皇

次に淳仁天皇様は、舍人親王の皇子で、御母は當麻山脊と申し奉り、世に淡路の廢帝と申上げたお方です。崇徳天皇様より二十八代の上に溯つて、天平寶字のむかし、弓削道鏡の専横を憎んで、却つて其害にかゝり、淡路に遷されて、其地でお崩れになつたので、明治維新の後に、淳仁天皇と追諡せられたお方であります。

弓削道鏡

赤間宮

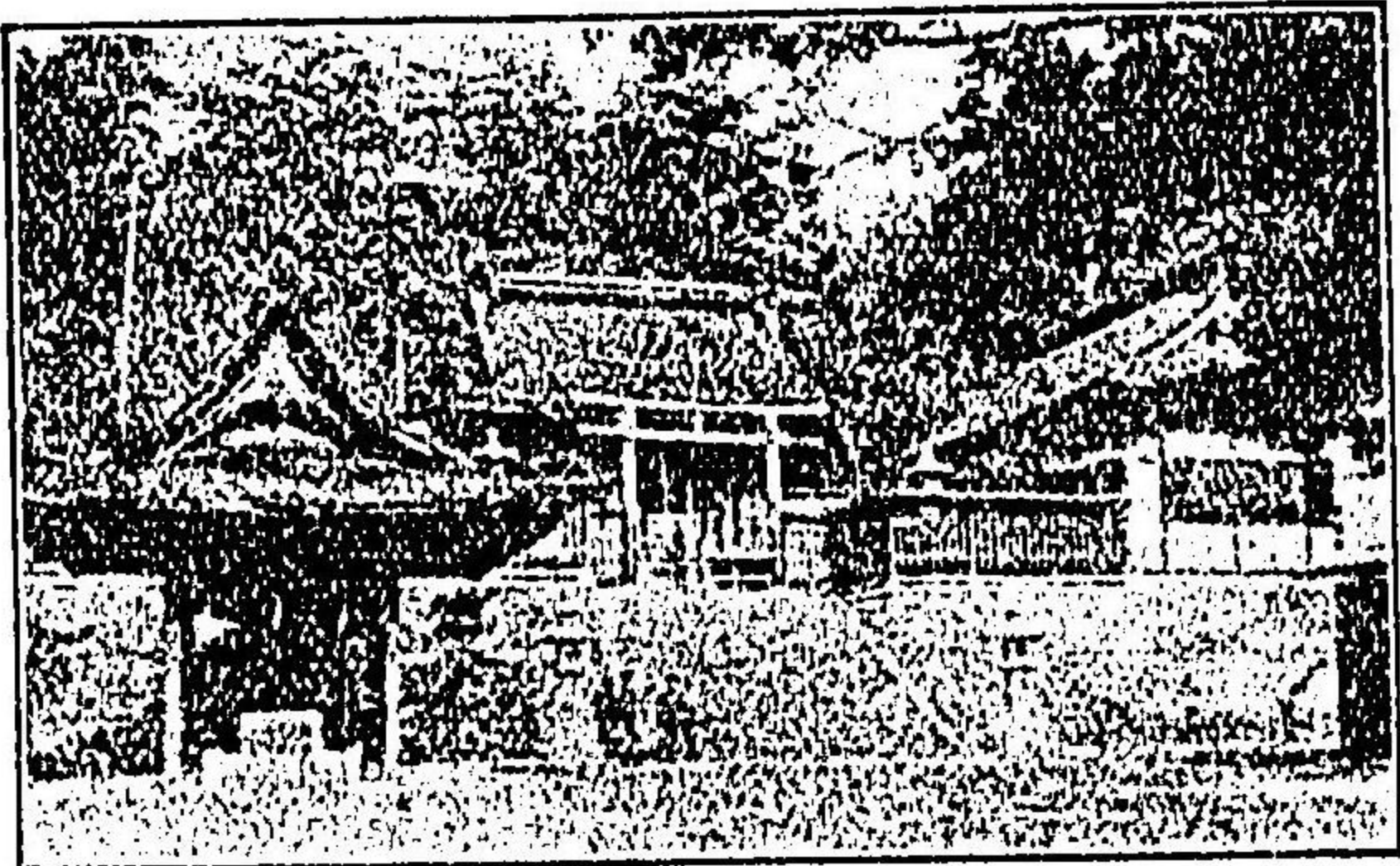
(下關市大字阿彌陀寺町鎮座)

當宮は阿彌陀寺紅石山の半腹にありまして、下關驛からは、東に距る十餘

安徳天皇

丁の地にあり、祭神は第八十一代の帝、安徳天皇様であります。天皇は御諱

壇の浦の



を言仁と申し、高倉天皇様の皇長子にましく、御母は建禮門院平徳子、治承二年皇太子となり、赤同四年位に即き給ひ、一旦都を福原に遷させられました。間もなく又京都へお歸りなされました。壽永二年七月、平氏と共に都を出させられ、源平合戦のために、屢々皇居をお變へなさいました。が、同四年三月二十四日、長門國の壇の浦に投じて、遂にお崩れになつてしまひました。寶算僅かに八歳、御在位五年。

天皇社
木戸孝允

る御影堂を改修して、天皇社と號したのが其始まりで、極めて粗末に、かつ狭い社殿でありましたが、木戸孝允公はこゝに参拜して、大に改築の必要を

赤間宮(管帶中社)

認め、夫れより間もなく、明治八年の十月七日、官幣中社に列せられ、地名によりて赤間宮と云ふことになりました。

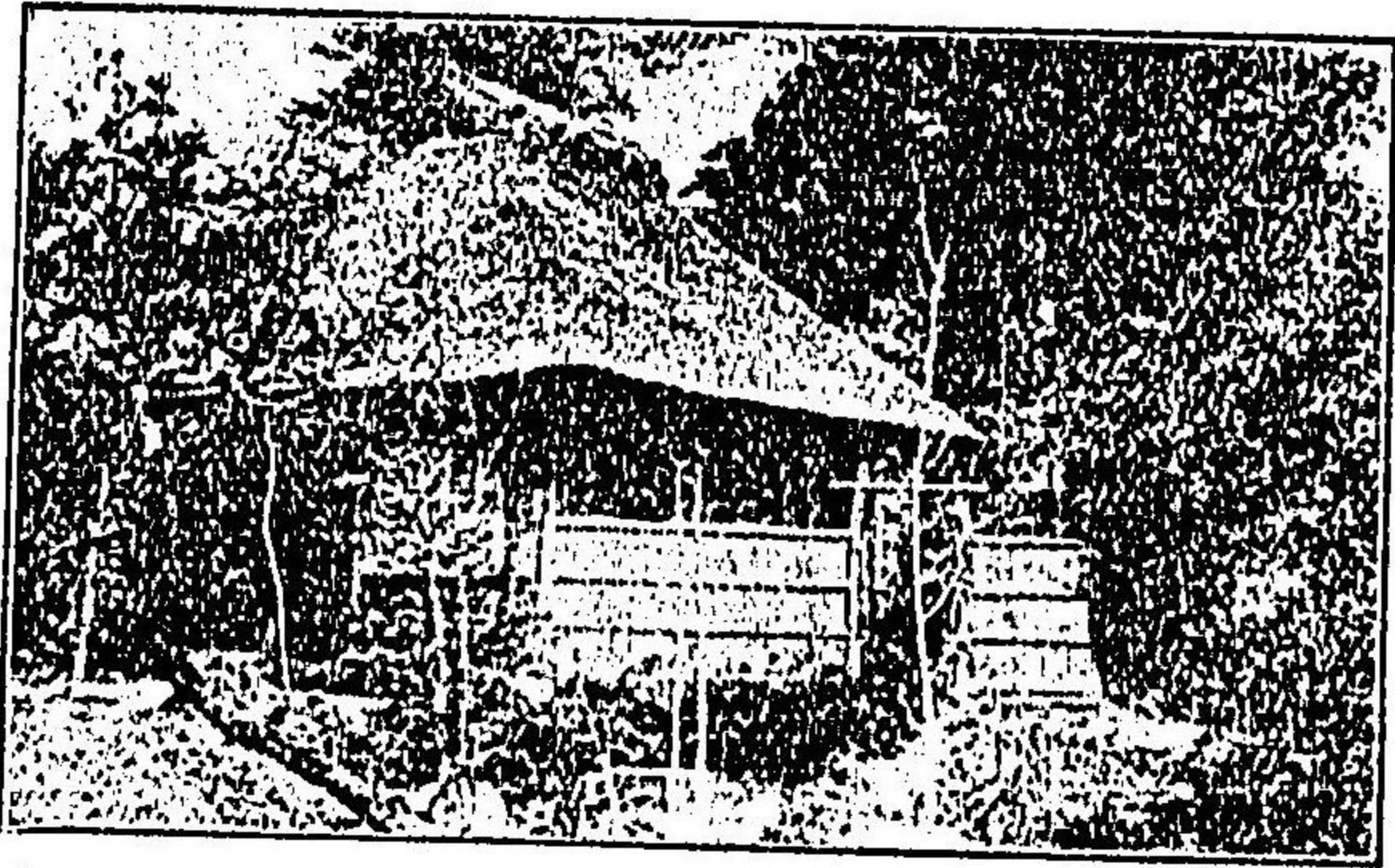
水無瀬宮

(大阪府三島郡島本村大字廣瀬鎮座)

當宮の御祭神は、土御門天皇、後鳥羽天皇、順德天皇の御三方で、今の社地は、貞觀年中に、惟喬親王が深く此の地を愛して、永住の地と定めさせられた舊蹟であります。山水の勝に富んで居りますので、後鳥羽上皇様も、同様に此の地をお好み遊ばされ、離宮として屢々行幸遊ばされたのです。

後鳥羽上皇様が、水無瀬宮でお詠みになつた和歌は

見渡せば、山本のすむ水無瀬川、
歌は澤山あります、其中でも、



水無瀬宮後鳥羽院下賜の御茶室

ゆふべは秋と、何思ひけん。

と迄に、深くも此の地をお好みになつたのです。されば上皇が、後に隱岐國へ御遷行の折りも、常にこゝに思ひをよせて、淋しい心を忍ばせられました。たが、曆仁二年二月には、御眞筆の御影と、御手印の詔勅とを、宰相中將水無瀬信成卿に賜ひ、かつ册御の後、當地に奉齋する様に詔を下されたのであります。

仍て仁治元年二月、御影を鎮座し、歴代天皇の御崇敬深く、御年忌毎に勅使を立て、嚴かなる祭祀を営み給ひ、かくて明治六年八月十四日、官幣中社に列せられ、更に隱岐國から神靈を迎へ奉り、同時に土御門、順徳の二帝の御神靈をも合祀せられました。

鎌倉宮

(神奈川県鎌倉郡鎌倉町大字二階堂鎮座)

當社の祭神は、後醍醐天皇の皇子護良親王で、明治二年七月の創建にかり、勅額鎌倉宮を賜ひ、同六年六月官幣中社に列せられました。即ち左に祭

鎌倉宮(官幣中社)

土御門天皇
後鳥羽天皇
順徳天皇

水無瀬宮
成郷

隱岐國

護良親王

神の御略傳を掲げます。

護良親王は、はじめ尊雲法親王と申し、延暦寺の大塔にわらせられましたから、大塔宮と呼び、後還俗して尊邦、尊形なども仰せられました。後に今の名に改められたのです。

さても後醍醐天皇様が、北條氏を滅さうとなされた時、親王も亦其謀に與かり給ひ、先づ近畿諸寺の僧徒を、味方につける必要がありましたので、嘉暦元年九月、梨本門跡となつて大僧都に任じ、二年三月三品に敍し、天台座主となられました。

親王は之より大いに山徒の信用を得給ひ、専ら北條氏滅亡の謀をなさいました。元弘元年謀が漏れ、天皇は數名の近臣と共に、笠置山へ行幸し給ひ、一方藤原師賢卿に、天皇の御衣を着用させ、延暦寺の西塔へ向はせますと、僧徒は之を天皇と思ひ、競うて西塔に集りました。

そこで親王は、弟の尊澄法親王と共に、別に僧兵を率ゐて、八王子に陣を構え、翌日六波羅の兵を撃退しました。僧徒は眞の天皇でないことを知る

大塔宮

後醍醐天皇

六波羅の兵

楠正成

愛染資塔

北條高時

赤松則村

新田義貞

と共に、皆散りくゞに逃げ失せましたので、親王は餘儀なくくゞを逃れて、楠正成の赤坂城へお入りになりました。

已にして赤坂を出て、大和の十津川から、吉野、熊野、高野等の間に出沒して時機を待ち、二年吉野の大衆を引連れて、愛染資塔に城を築き、又密使を諸國に派遣して命令を傳へ、勤王の兵を擧げさせると、之に應ずる者が頗る多かつたのです。

すると翌三年に、北條高時は二階堂貞藤を遣して、吉野を攻めさせました。親王は極力防戦して利なく、遁れて高野山にお入りになりました。一方隠岐にいらせられた後醍醐天皇様は、船上山に行幸遊ばされて官軍の勢ひも爲めに大いに振ひました。

此の時親王は、河内信貴山の毘沙門堂に居て、赤松則村の兵が京師を攻めて敗れたと聞き召し、更に延暦寺の僧徒に命を下して、則村を援けしめることとなりました。

すると一方には亦、新田義貞が、高時を鎌倉に攻めて之を滅し、足利尊氏

等は、京師を恢復しましたので、天皇は再び都へお歸り遊ばされたのです。仍て親王は、六月十三日入洛して、久々で天顔を拜し、征夷大將軍となり、兵部卿に任ぜられ、やゝ得意の位置にお就きなされたが、既に其八月には、成良親王が征夷大將軍となられ、親王の御在職は實に短い期間であつたのです。

足利尊氏

恰も此の時に當り、かの足利尊氏は、賞典も諸將の上に居て、最も勢力を振ひましたので、親王は密かに尊氏を除かうと思召し、尊氏も亦親王の威名を忌みて、之を斃さうと思ひ、こゝに此の二人は相反目することゝなりました。

東光寺

所が不幸にして親王の謀計は漏れ、天皇の御勘氣を蒙られ、建武元年十月常磐井殿に幽閉せられ、其翌月には、鎌倉に護送せられて、足利直義に預りの御身となり給ひ、直義は亦之を二階堂ヶ谷なる東光寺に幽したのであります。

北條時行

已にして二年七月、高時の遺子時行が、鎌倉を襲ひ、直義は夫れを拒ぐこ

洲邊義博

とが出来ないので、西の方へと近れ出る時、其臣洲邊義博を遣して、遂に親王を弑し奉りました。時に御年僅に二十八歳であります。

非伊谷宮

(静岡縣引佐郡非伊谷村)

濱名湖畔

當宮は濱松市を距ること北に四里、遠く三方原の古戰場を控へ、近くは濱名湖の北岸に臨み、奥山街道に沿ふて山水の勝に富んで居ます。殊に八千五百餘坪の境内には、老樹森々として茂り、頗る幽邃の趣が深いのであります。社殿は明治二年の御造營で、同六年に官幣中社に列し、祭神は後醍醐天皇第二の皇子なる宗良親王で、親王は御年十餘歳の時、妙法院に任して尊澄と呼び、ついで三品に敍して天台の座主に任じ、後醍醐天皇様が、北條氏を滅さうとなされた時、親王は御兄君の尊雲法親王大塔宮と、力を併せて中興の大議に與り、大いにお盡しにならうとしたのです。

宗良親王

幸崎濱

所が其謀は早くも漏れて、天皇は笠置に行幸おらせられ、親王も亦兄君と一所に僧兵を集めて、賊將佐々木時信と、幸崎濱に戦つて、之を敗走させら

非伊谷宮(官幣中社)

讃岐能間

尊氏の反

延暦寺



ます。

然るに尊氏は、一時伴つて天皇に降り、天皇は其言を容れて、直に都へ御

れましたが、程なく僧兵が離散しましたので、更に再舉を謀るために、笠置

山へ幸せられ、其城の陥ると共に、囚れて讃岐國

能間へ流され、元弘三年楠新田等の義軍が、賊將

北條高時を亡ぼすや否や、天皇は隠岐より御還幸、

宗良親王も亦兵を率ゐて京に上り、再び座主とな

ひらせ給ひ、建武二年には二品に彼せられたのです。

所が間もなく尊氏が叛いて、延元元年の五月に

谷は、楠正成が淡川で討死をし、尊氏は勝に乗じて

京都を陥れましたから、天皇は餘儀なく神器を奉

じて、延暦寺に幸し給ひ、宗良親王を一品に進め

て、僧兵を勵ますの手段とせられました。此所の

座主を一品になされたのは、實に之が始めであり

遠江の井
伊城

白羽港

還幸なされ、諸親王及び諸將に命じて、恢復のことをお謀りになりました。

此の時親王は、井伊道政を従へて、遠江國井伊城に入り、後北畠顯家等と

合して奈良に入り、連戦連勝して、將に都に攻め入らうとなされましたが、

顯家が戦死すると共に、勅を奉じて再び東國の經略に力を盡すこととなり、

先づ伊勢より乗船なされました。するとその途中に於て、非常なる大暴風が

起り、親王の御船は命辛々遠江國白羽港に着きました。時に延元三年九月十

日の事でありませす。

いかでほす、ものともしらずとなやかた、

かたしく袖の、夜の浦浪。

とは、此の折り、親王の詠ませられた御歌であります。かくて親王は井伊城

に入り、翌年八月後醍醐天皇様が吉野の宮でお崩れ遊ばされたので、親王の

御歎き一方ならず。

思ふには、猶色浅き紅葉かな、

そなたの山は、いかに時雨る。

井伊谷宮(管幣中社)

と、詠ませられて、散り來た紅葉の一片に添へて、別當資次に贈らせられました。

後村上天皇

やがて後村上天皇様の御即位と共に、親王や諸將に命じて義旗を挙げしめられたのです。此の時親王は、井伊城にあつて、名を宗良と改め、上野親王だの信濃宮だのと呼ばせられました。次で征東將軍に任じ、駿河安部城の陸良親王と共に、義兵を集めることに力をお盡しになつたのです。

陸良親王

高師泰

かくて興國元年二月、賊將高師泰、仁木義長等が、大舉して來り攻めましたから、親王は極力防戦なされましたが、衆寡敵せず、空しく井伊城は陥つてしまひました。そこで親王は、更に殘兵を集めて、又もや井伊城に立籠らせ給ふたのですが、再び師泰に破られてからは、駿遠地方も頼み少くなりましたので、遂に越後に赴き、各地に轉戦して、到る所に勇名を轟かし、多年の辛苦を積せられ、遂に元中二年八月、井伊城に於てお薨れ遊ばされたのです。時に御年七十四歳。

當社の境内には、今も宗良親王の御陵があり、又井伊城址は、社地を距る

こと東北四丁ばかりの所に存して居ます。

八代宮

(熊本縣枝城鎮座)

懷良親王

良成親王

南北朝

八代町舊城址内にある當宮は、明治十三年の創建で、征西將軍懷良親王を祀り、良成親王を合祀したお宮であります。さて此の兩親王の御事蹟を見るに、恰も元弘建武の際、天下大いに亂れて、恐れ多くも後醍醐天皇様には、賊臣北條高時の爲めに、隱岐の小島にお遷りなさいましたので、新田、楠、名和などの勤王の將士が、各地に兵を起して、首尾よく高時を滅しましたから、天皇は一旦都に御還幸になりましたが、又もや足利尊氏の反逆のために遂に世は南北兩朝に別れました。此の時鎮西に於ける阿蘇菊池等は、賊軍の爲めに城も陥るばかりの有様となりましたが、かくてはいよいよ尊氏の勢を増すばかりですから、皇軍の監督として、第九皇子懷良親王を、征西將軍に任じて、延元元年の九月、九州へと御遣しになりました。

島津道鑑

菊池城

親王は先づ都から讃岐へ向はせられ、更に伊豫に渡り、興國三年五月一日には、薩摩の津に御着船、谷山の御所を本營として、當國の賊徒島津道鑑をお攻めになり、夫れより所在の賊軍を討つて、正平三年正月には、肥後國宇土の津まで進み、更に菊池郡の菊池城へ入御になつたのです。

すると曾氏は、一色道猷と云ふ者を遣して、親王の御在所を襲はせやうとしました。併し親王は、却つて菊池武光を遣して、博多城を陥れ、後高田の御所で、管内の事務を御覽遊ばされ、大友少貳等を除く外は、鎮西の諸豪傑も大抵親王の旗下に属したのです。

少貳頼尙

そこで十四年八月には、少貳頼尙を筑後川に攻めさせられましたが、此の戦争は前後に例なき大激戦で、兩軍共に死傷多く、親王も又三創を蒙らせられ、勇戦力圓の末、全く賊軍を撃退することが出来ました。

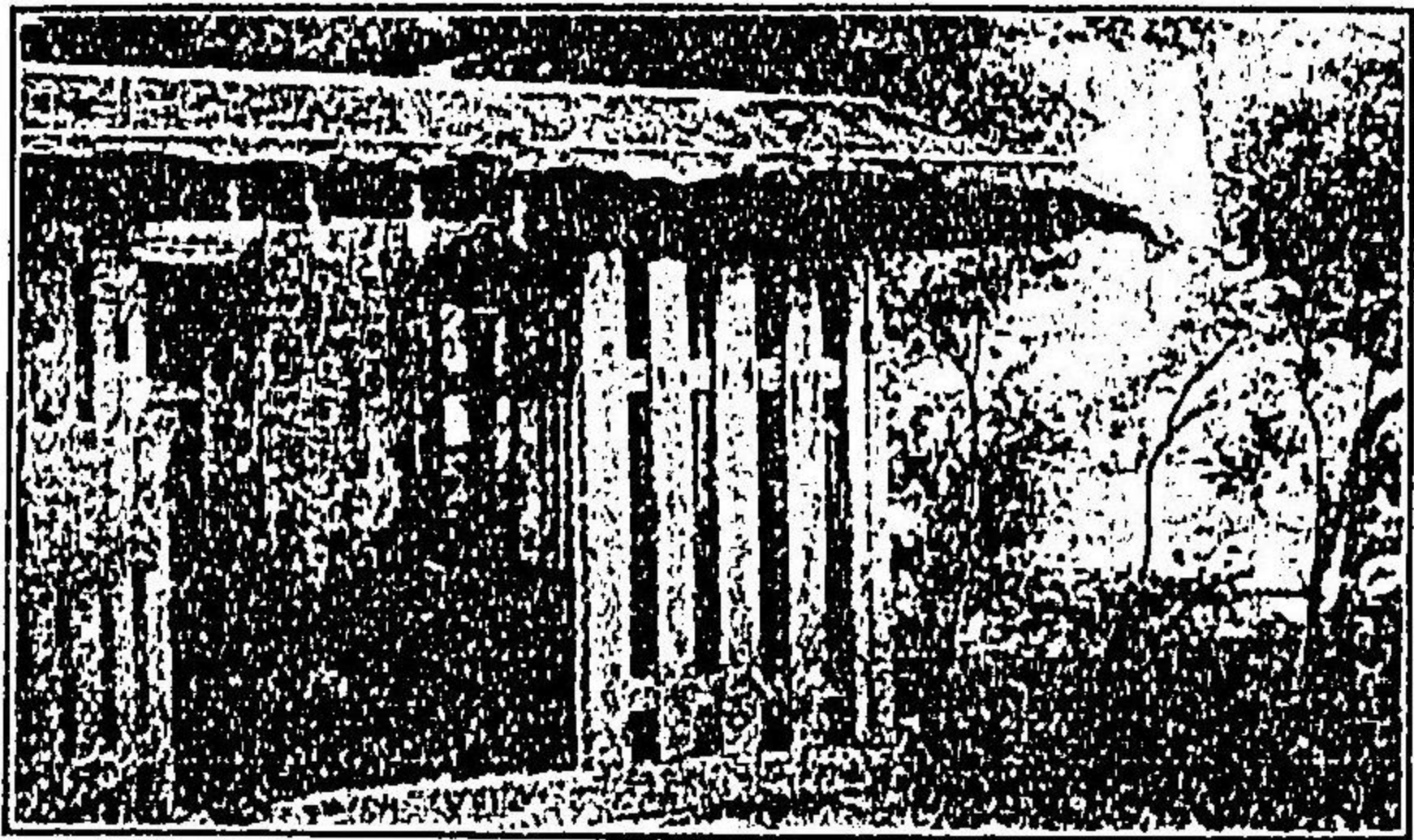
又後征西將軍宮も、前將軍宮同様、金枝玉葉の御身を以て、常に西海の賊に當らせ給ひ、非常のお働きをなされたので、明治十三年八月、其御薨去の地に齋き祀り、官幣中社に列せしめられたのであります。

梅宮神社

(京都府葛野郡梅津村大字西梅津鎮座)

四柱の祭神

無戸室



當社の祭神は、酒解神、大若子神、小若子神、酒解子神の四柱であります。さてもむかし天孫瓊瓊杵尊が、大山祇神の御娘、木花咲耶姬と、唯一夜の御契りで、御妊娠遊ばされたのを、それは我子ではあるまい。他國神の子に相違なからうと、御疑ひなされましたので、姫神は恥かしくも怨めしくも思召されて、無戸室を造り、其中に入つてお誓ひなされました。

(石げたま) 内社 梅宮神社

「わが孕める子が、他國神の子ならば、必ず不幸を見るであらう。又天孫の御子ならば、屹度恙なく生れますに相違ない。」

と、かう仰せられて、其無戸室に火をおかけになりますと、忽ち焼けまし

梅宮神社(官幣中社)

造酒安産
の守護神

たが、しかも御子は何の恙もなく、やすくと御生れになりましたので、姫神の御喜び一方ならず、先づ狹名田の稻をとつて、天甜酒を造つてお召しになりました。かう云ふ譯で、大山祇神の別の御名を、酒解神と申し、木花咲耶姫命を酒解子神と申し上げるのです。されば當社は造酒の祖神、安産の守護神として、上下の崇敬が深いのであります。

檀林皇后

嵯峨天皇様の皇妃、檀林皇后には、不幸にしてお子様がありませませんでしたから、深くお歎きの後、當社へ御祈念なされますと、神驗忽ち現れて、間もなく御懐妊になりました。で御臨月になつて、當社の神殿の下の砂を、御産家に布かせられると、少しの御備みもなく、やすくと皇子がお生れになりましたが、之ぞ即ち仁明天皇様であります。

されば上下共に子なき人は、先づ當社に祈り、臨月に至つて、神殿の下の砂を乞ひ受け、之を産屋に布けば、安産間違ひなしと云ふので、其砂を産砂と呼び、人々争つて乞ひ受けます。

貴船神社

(京都府愛宕郡鞍馬村大字貴船鎮座馬)

奥宮

本社は京都市の北、三里ばかりの地にあります。創立の年代は詳でありませんが、元は今の地より六町北の奥宮に鎮座せられたのを、天喜三年の水害によつて、社殿すべて押流され、遂に今の所に遷されたのださうです。

開羅神

當社の祭神は、開羅神で、かの軻遇突智の體から生れた方で、雨を主宰されます。即ち文徳天皇様の仁壽二年に、勅使が此の宮に雨を祈り、即日功験がありました。此の他白馬或は黒馬を獻納して、雨を祈り、霖雨を晴し、風災を防ぎ、五穀の豊饒を祈られたことは、數へ盡すことも出来ませんが、其時々功験があつたと申します。

貴船山

當社々殿のある所は、貴船山の半腹で、東の方には鞍馬山高く聳え、杉椈などの大木が、森々と茂つて、晝も眠るが如く、貴船川は此の二つの山の間を流れ、岩に激する水の姿も美しく、實に京北の一仙境であります。

猶境内には、龍王、鬮、不動、鼓の四つの瀧、鏡、裝束、足洗の名石、和

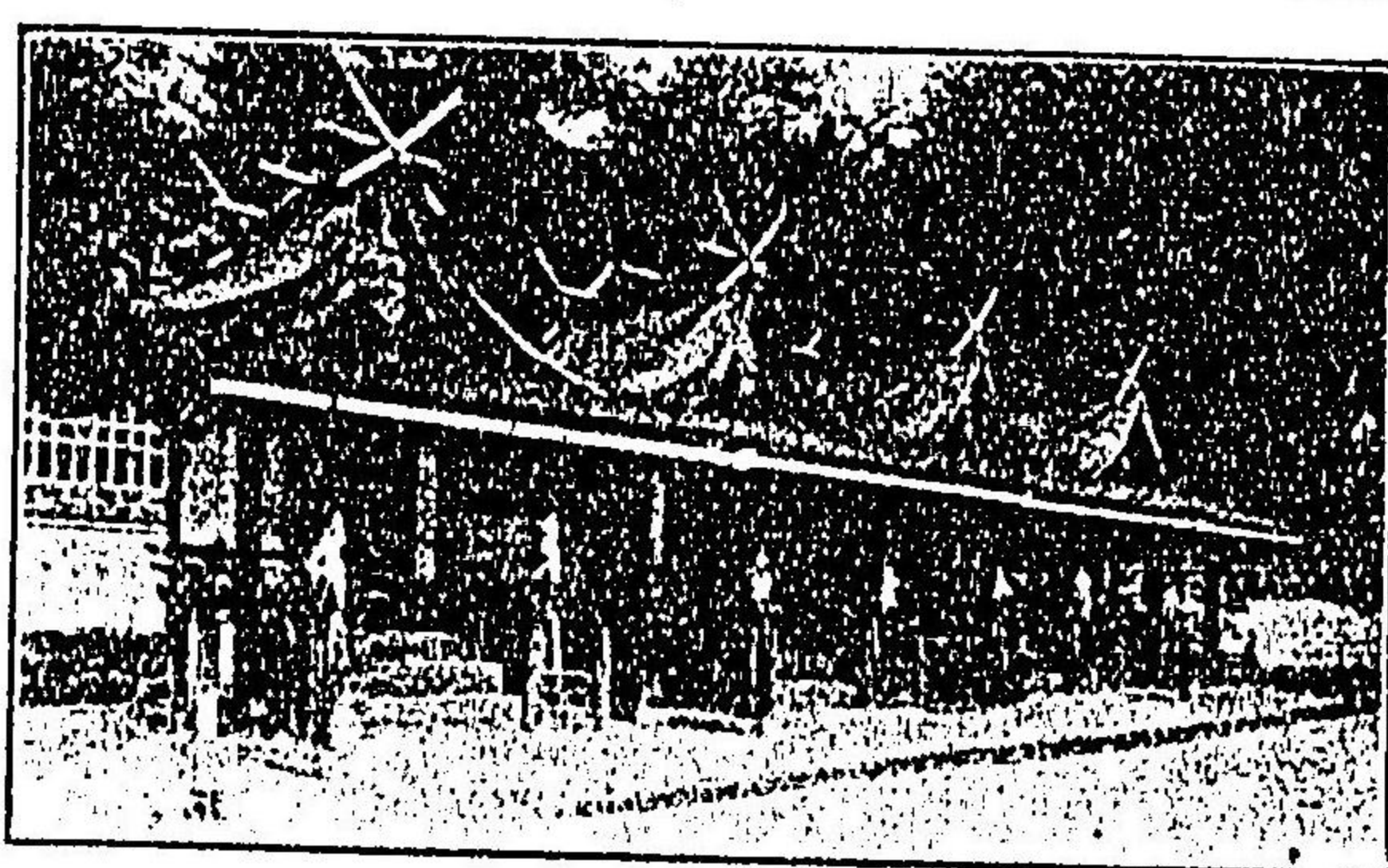
貴船神社(管幣中社)

境内の名

文徳天皇

日本お宮物語

泉式部の物思へばの歌から名付けた螢石などもあります。殊に東の鞍馬山には鞍馬寺、山岐神社があり、南の市原野、小町寺などの古跡は、何れも旅人の杖を留める名所です。



の地に勧請したのだとも云ひます、當社の正殿は社域の北邊にあつて、四つ

大原野神社

(京都府乙訓郡大原野村大字大原野鎮座)

當社の祭神は、奈良の春日神社と同體にあらせられ、即ち武甕槌神、經津主神、天兒屋根命、姫神の四座であります。

文徳天皇様の御宇、仁壽元年のこと、奈良の春日神社が、宮城と遠く距つて居るので、御參拜にも不便が多い所から、特に皇太后の勅願によつて、こゝに鎮座されましたと云ひます。

尤も一説には、桓武天皇様が御遷都の砌に、此

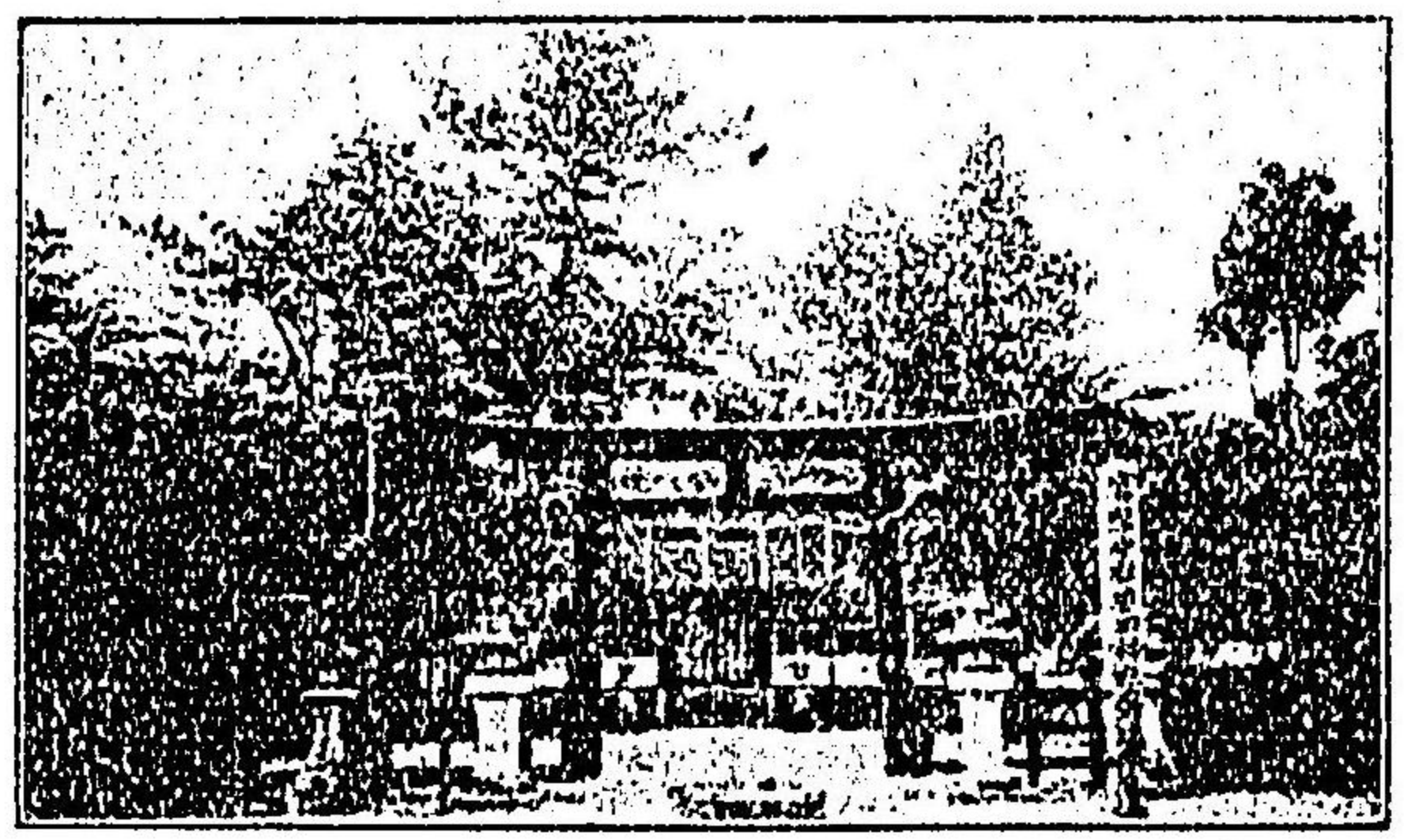
の棟が東西に並び立ち、其二月八日の例祭には、社頭の雑沓一通りではありません。

吉田神社

(京都市上京區吉田町鎮座)

當社の祭神は、建御賀豆智命、伊波比主命、天之子八根命、比賣神の四柱にましく、奈良の春日日と同神であります。蓋し此の社は、中納言山陰卿が、貞觀年間に建立せられたもので、奈良の京の時は春日社、長岡京の時は大原野、平安城の時は吉田社と云ふ様に、帝都に近く齋まつて、宮城の鎮護とせられたものでありませう。

當社の祭神は、皇室の外戚たる藤原氏の祖神でありますから、平安朝以來は、奉幣の勅使を立てありますから、近くは英照皇太后陛下の御寄附で、舞殿



られ、従つて御歴代の尊崇も深く、

吉田神社(管幣中社)

藤原氏の祖神

中納言山陰卿

直會殿其他の殿舎を建て、明治四十三年本殿の修理に際しては、聖上皇后兩陛下より、金三百圓を御下賜になりました。

末社なる太元宮は、文明十八年に卜部兼俱卿の勸請で、伊勢の兩宮、延喜式三千百三十二座、其他天神地祇八百萬の神々を祀つて、齋場所とせられてあります。此の神殿は、全國に比類なき神祕の構造で、今は特別保護建造物となつて居ります。

特別保護
建造物

日枝神社

(東京市麹町區水戸町公園地鎮座)

皇城に近く、星ヶ岡公園のたゞ中に、宏壯森嚴の社殿があります。之即ち日枝神社で、大山咋神を祀る所、大山咋神は、又の御名を山末之大主神とも申し、大年神の御子で、天祖天照大御神の御弟なる、建速素盞鳴尊の御孫に當り、御母は天知迦流美豆比賣命と呼ばせられる御方です。

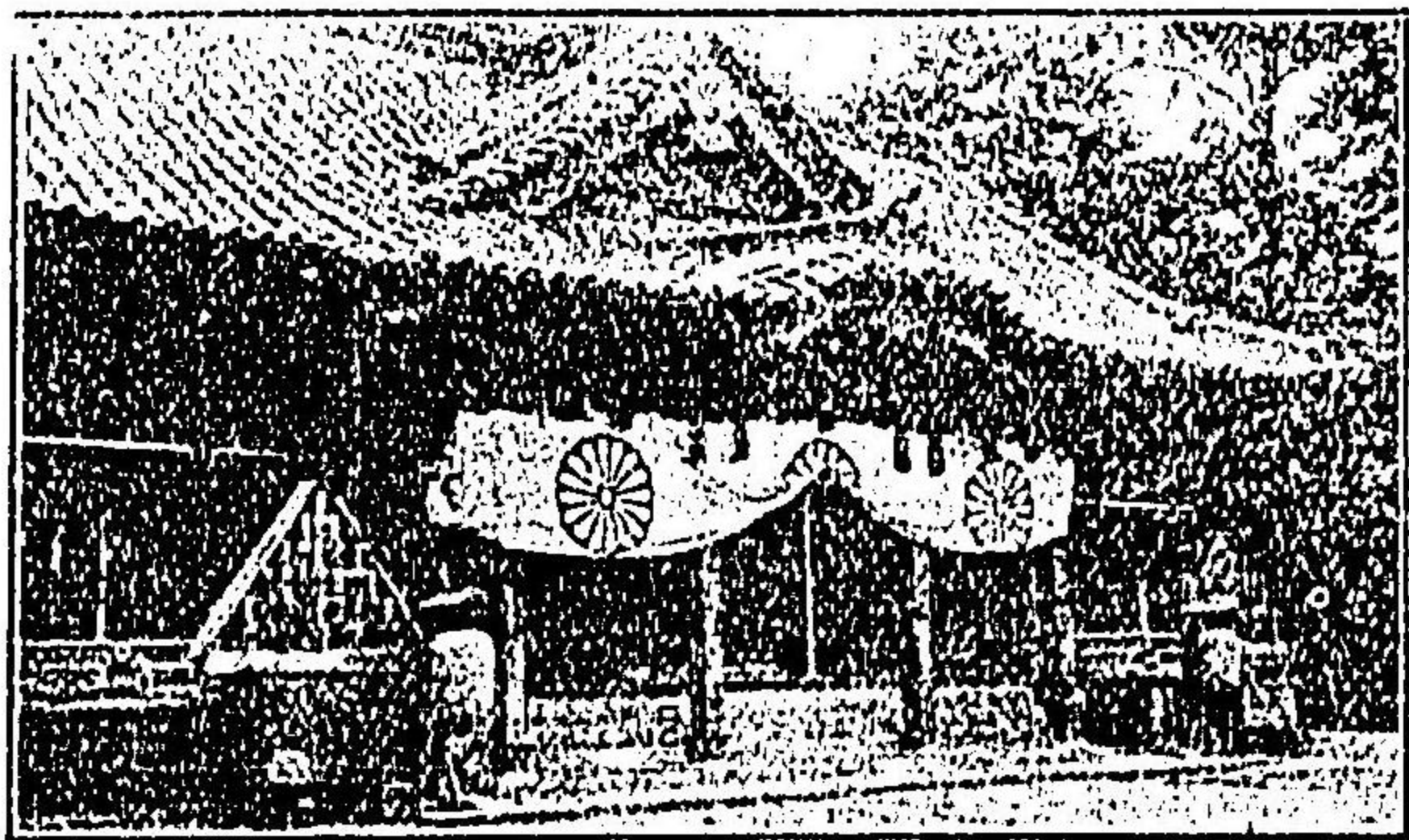
さて此の神様は、御父大年神や御異母兄御年神の年殺を掌り、或は御兄弟なる奥津日子奥津日女神の窠所を掌り、或は又阿須波々比伎神の大宮地を守

大山咋神

經世治國
の神

國之常立
大神

足仲彦尊



麹町日枝神社

り給ふなどの御縁故と、御神名とによつて考へると、正しく御祖素盞鳴尊の大御心を繼がせられ、専ら山野を拓き、田園を營み、人民に耕作の道を教へ、經世治國の爲めに、大いなる御神徳を垂れさせられたものであります。

當社の相殿には、國之常立神、足仲彦尊、伊弉册神の三柱が居らつしやいます。此の内國之常立大神は、天地開闢のはじめに、此の土地にお出ましになつて、所謂天神七代の第一で、天地造化の御神徳の大なることは、何人も知る所であり、次に足仲彦尊と申すのは、人皇十四代仲哀天皇様のごこと、日本武尊の御子に當り、御母は兩道入姫命と申させられます。筑紫の國に熊襲を征伐して、遂にお崩れになりましたが、皇后様はよく

天皇の後を受けて、三韓を征服し、以て國威を御發揚になりました。

日枝神社(管帶申社)

伊弉册大
神

日本お宮物語

一一三

第三に伊弉册大神は、伊弉諾大神の神妃に渡らせられ、天祖天照大御神の母君です。後に黄泉國へいらつしやいましたから、黄泉津大神とも申し上げます。

太田道灌

さて當社鎮座の御由來はと申しますと、長祿年中に太田道灌が、江戸城を築いて後、文明十三年四月十三日に、其城内なる紅葉山に江州日吉神社今官幣大社を遷し奉り、神領五石を獻じて、當社の鎮守としたのが始めであります。

徳川家康

所が其後天正十九年十一月に、大將軍徳川家康公が、城内を巡檢せられた時に、當社に参拜して更に五石の地を獻じ、夫れより永く當地の産土神と定まりました。又同時に毎年六月十五日に、祭禮を行ひ、神輿は龍口から船で八丁堀北島に渡り、同所旅所今の日本橋區南茅場町日枝神社で神事を終り、再び本社へ還御するが例となつて居ました。

元山王

慶長年中將軍徳川秀忠公は、城山の西、元山王の地に奉遷し、元和三年十一月神領百石を獻ぜられ、寛永十一年徳川家光公は、江戸市中に令を下して、

祭禮を盛んにし、東は傳馬町濱町、西は麴町、飯田町、南は芝口、北は神田に至る城下の町々を以て氏子と定められ、江戸大祭はこゝに起りました。明治維新の後は、朝廷の御崇敬も深く、十五年一月官幣中社に列し、各皇族殿下の御参拜御祈念も淺からぬのであります。

北野神社 (京都市上京區馬喰町鎮座)

菅原道真

多治比文

右近の馬場

北野神社の祭神は、贈太政大臣正一位菅原朝臣道真公であります。當社の創立は、道真公がお薨れになりましたから、凡そ四十年程後、即ち朱雀天皇の天慶五年七月に、右京七條坊に住む多治比文子と云ふ者に神託がありました。『我は菅原朝臣の靈である、我がむかし世にあつた頃には、折々右近の馬場に遊んだことがあるが、凡そ都の勝地の内で、此の右近の馬場程我意に叶つた所はない。けれども我は讒言によつて、罪なき罪を得、遂に筑紫の涯で世を終つたが、内心の怨み解けぬため、常に胸を焦すばかりで、其苦しみは一通りでない、都に歸る時は再びないが、たゞ彼の馬場に向ふと、不思議に

北野神社 (官幣中社)

一一三

も胸が安らかになる。今では我も天神の號を貰つて、國家の守護をしなけれ

ばならぬ、どうか生前好んだ地に、宮を建て、祀り呉れよ」とあつたのです。

北　そこで文子は、此の神託に従つて、早速宮を建てやうとしましたが、元より貧しい身分ですから、野思ふ様にはなりませんので、自分の家の邊に瑞籬を建て、五年の間そこに祀つて置きましました。

神　すると天暦元年の三月に、今度は又近江國比良の神官良種の子の太郎丸と云ふ、七歳ばかりの少年に神託がありまして、『我がむかし右大臣に任せられた時に、我身に松が生え、間もなく其松が折れたと夢みた。即ち我は三公の官に上り、次で左故に我が今居たく思ふ地には、必ず松を生やして見せる』と仰せられました。案の如く一夜の中に、數千本の松の太木が、遷せられることを知つた。



太郎丸

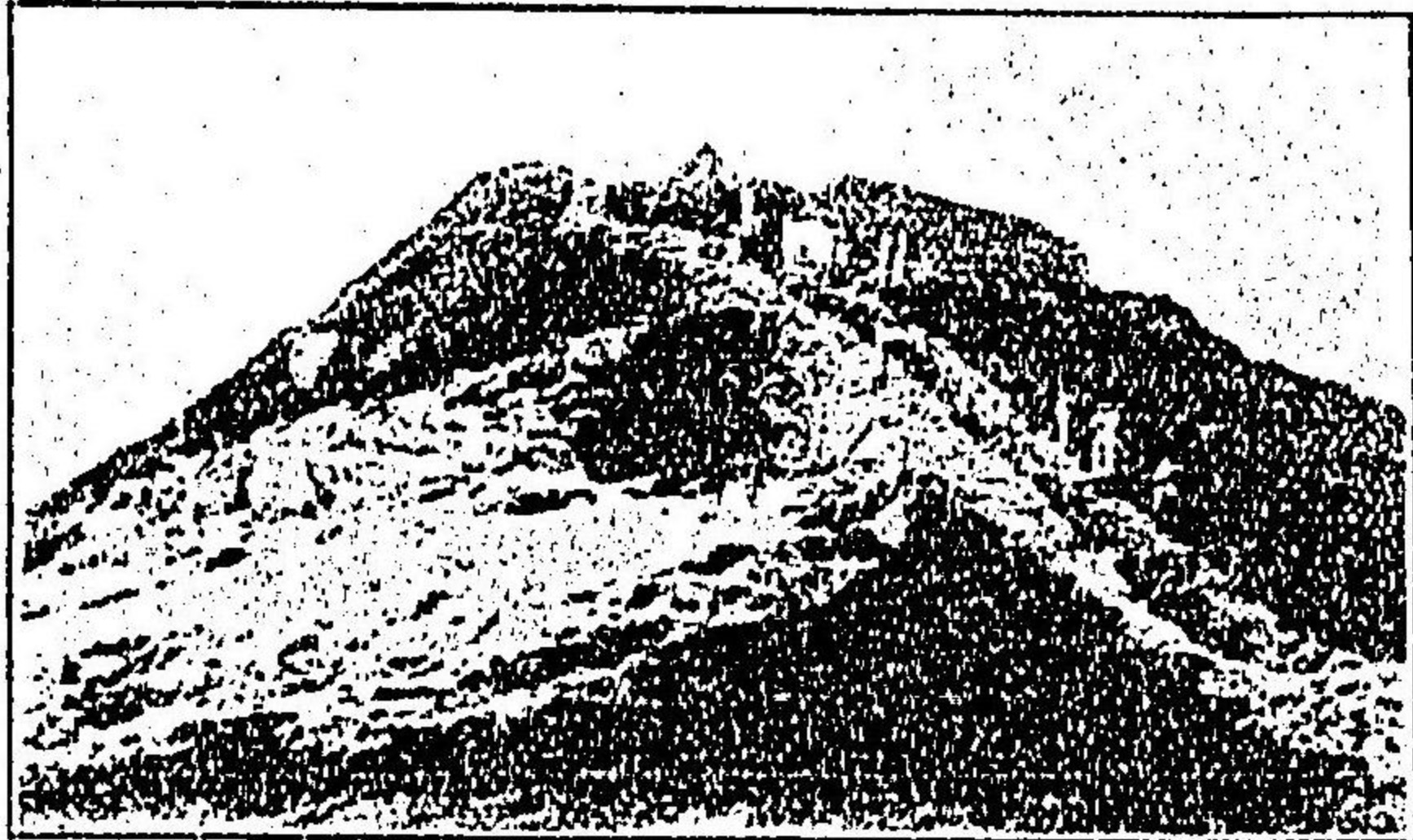
僧最珍

北野の右近の馬場に生えましましたから、良種は北野の朝日寺の僧最珍と力を協せて、立派な社殿を建てました。之が即ち本社由來であります。

月山神社

(山形縣東田川郡立谷澤村及泉村地内月山上鎮座)

月　雲に笠ゆる月山の山上に、遠き神代のむかしより鎮ります當社の大神は、月夜見尊と申し、天照山皇大神と御兄弟の大神ですから、世人の尊崇するも其爲めで、殊に朝廷の御敬ひは、一通ではなく、明治の御代になつて、七年八月に國幣中社に列せられ、更に十八年四月、官幣中社に御昇格になりました。



月夜見尊

諸册二神

下の主たる者を生まねばならぬと仰せられて、日神大日靈神を生ませられま

月山神社(官幣中社)

東北の鎮

したが、大日靈は光彩六合に遍く照り渡りますので、天上の事を支配させやうと、天柱を以て天へお送りなさいました。さて其次にお生れになつたのが、月神月夜見尊で、光彩の美しきことは、日神に亞がせられたと云ひます。即ち当社に座すは此の神で、大ひかしより神徳を施し給ひ、今に至つても、東北の鎮護として、國家萬民の崇敬の中心とならせられて居ます。

金鑽神社

(埼玉縣見玉郡青柳村大字二ノ宮鎮座)

日本武尊

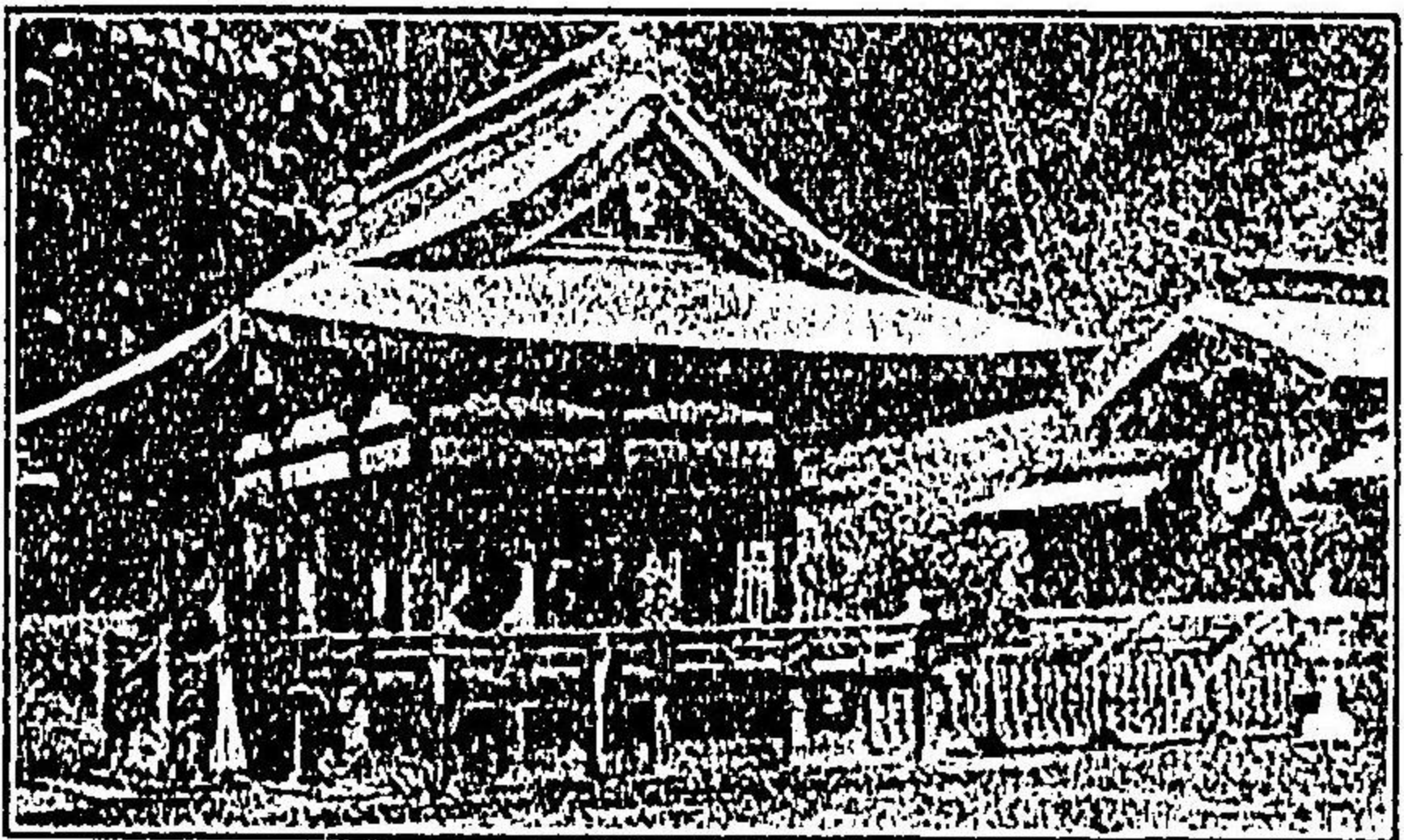
當社は景行天皇様の四十一年に、御創立になつたので、皇子日本武尊が、御東征の時、東國鎮護のために伊勢神宮の倭姫命から賜つて、夜も晝も御身を離さず、草薙劍と共に御佩せになつた、金鑽金を以て御靈代とし、之を御室嶽に藏め、天照大御神と素盞鳴尊とを齋き祀り、金鑽神社と申し上げるのです。又日本武尊を合せ祀つたのは、欽明天皇様の二年のことでありませう。一體日本武尊が、東夷征伐に、大功をお樹てなされたのは、全く草薙劍と

金鑽金

御神鏡

金鑽金との御守護の致す處で、此の金鑽金こそは、伊勢神宮に齋き祀る、御神鏡の御御片なのですから、其御稜威の尊いことも解りませう。

當社の社號を、金鑽と呼ぶ譯は、金鑽金を神寶として齋き祀るので、かなざなと申すのです。此の様に尊いお社ですから、ひかしより朝廷の御尊敬も厚く、かの坂上田村麻呂や源義家など東國鎮撫の事に與つた人は、何れも日本武尊の吉例に倣つて、当社に祈願をこらし、以て賊軍を平定しました。殊に義家の如きは、奥州鎮定の後に、琵琶弓、劍の類を獻納しましたが、之は今も當社の寶物となつて居ります。



御室山

りますから、實に神さびた境地であります。

金鑽神社(分幣中社)

金嶺神社古塔



天文三年土地ノ豪族阿保彈正金隆ノ寄進セシ所
構造桶皮二重塔ナリ

多賀神社

(滋賀縣犬上郡多賀村大字多賀鎮座)

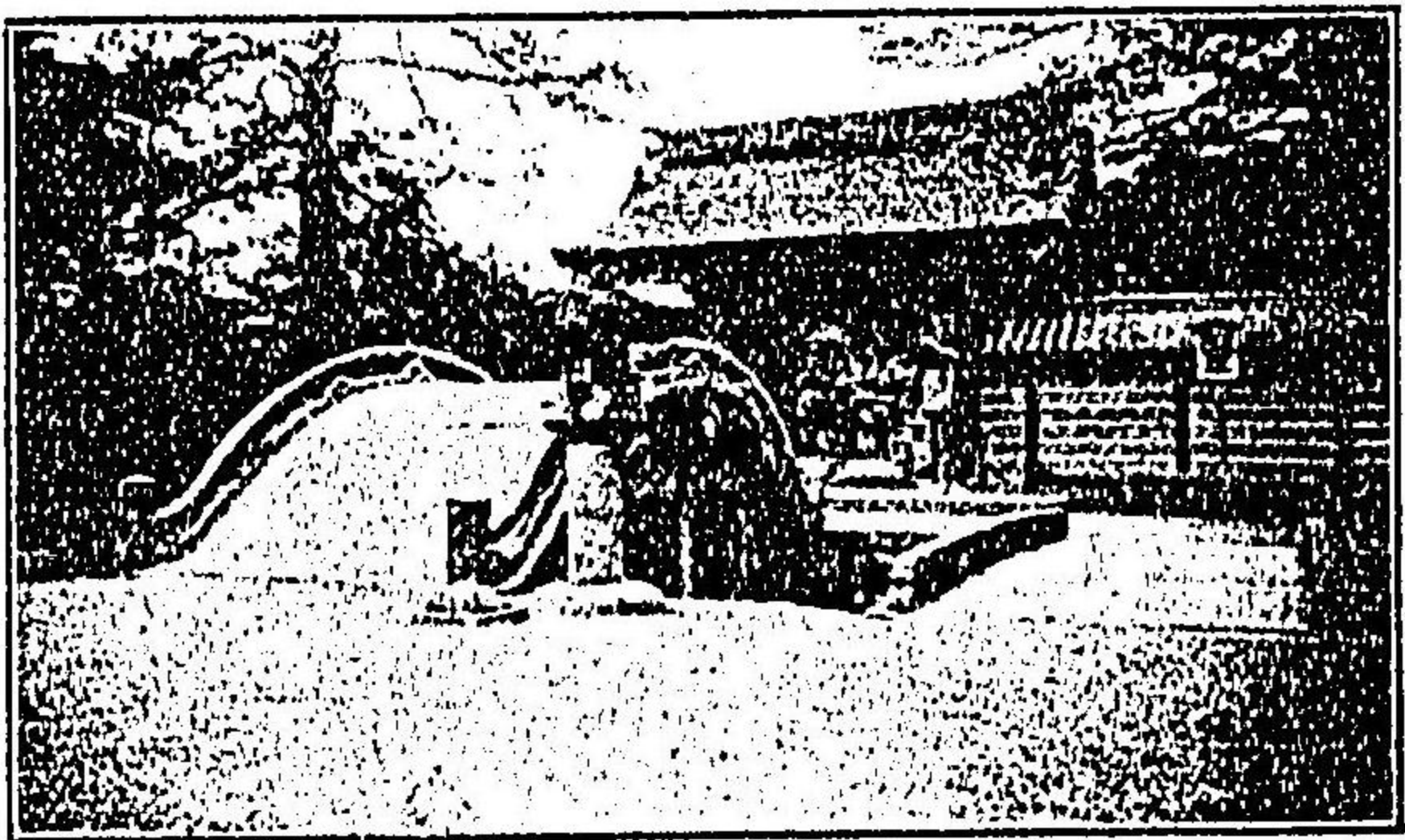
古い但諸にも「伊勢へ七度熊野へ三度、御多賀様へは月参り」「伊勢へ参らば御多賀へ参れ、御伊勢御多賀の子ぢや孫ぢや」とある位で、此の神

伊非諾神

社は、遠近の老若が、むかしから多く参拜する、神威靈験の宮でありまして、祭神は皇祖伊非諾神伊非册神であります。一體此の地は、既に神代のむかしより、日之少宮と云つて、萬代變らぬ宮地であつたのです。さて二柱の祭神は、こゝに事新らしく記す迄もなく、國土萬物を化育し、人倫の基を開き給ひ、古來壽命の神として、人民の崇信淺からぬ次第であります。

御代参街

御多賀杓子



御平癒遊ばされたので、

多賀神社(管幣中社)

古事記と云ふ古い書物には、伊非諾大神者坐淡海之多賀也と記してありますが、思ふに國土の經營も一段落つきましたので、天上へ歸つて御復命の後更に此の地に降臨して、幽宮をお建てになつたものと思はれます。多 恐れ多くも大神は、天照皇大神の御親神にましますので、歴代の天皇は、伊勢神宮と此の社へと賀は、年々御代拜を参向せしめられ、其通路を、御代参街道とも呼びます。神 此の宮に参拜した人は、必ず御多賀杓子と云ふを請ひ受けます。さて此の杓子の起りは、元正天皇様が御不例の時に、當社へ勅願あつて、齋火を以て強飯を炊ぎ、四手の木で飯匙を作り、之を神符と共に獻納すると、急に御食氣が進み、御惱も吉瑞として當社から、弘く四方へ分つことゝなりま

壽命石

又社内に壽命石の舊跡があります。之は後白河法皇様が、東大寺の大佛殿を御再興の思召しで、醍醐寺の僧俊乗坊重源に院宣をお下しになりました。此の時重源は、六十餘歳の老齡でありましたが、是非共神佛の加護によつて、壽命を保たなければ、法皇様の仰せを果すことが出来ぬと思ひ、先づ長谷の觀音に參籠しますと、やがて靈夢を感じ、遂に此の宮に祈願をこめて、諸國勸進に従ひ、神の助けで、首尾よく目的を達しました。で其謝恩のために、再び當社に參拜して、記念の印章を納め、八十餘歳まで長命しました。即ち重源の腰かけた石は、今も壽命石と云つて社内の名物に成つて居ます。

竈山神社

(和歌山縣海草郡三田村大字和田鎮座)

五瀬命

當社の祭神は、神武天皇様の皇兄、五瀬命であります。命はかの孔舍衛坂の戦に、流矢に當つて、此の竈山でお薨れになりましたから、御遺骸を此の

宣長の歌

地に葬り參らせたので、神殿は御陵の前方に建てられてあります。當社創建の年代は、詳かではありませんが、何分尊いお社ですから、明治十八年四月、官幣中社に列せられ、又九月十三日には例祭が行はれます、有名なる本居宣長の歌に、

をたけびの、神代の御辭おもほへて、
嵐はげしき、竈山の松。

と云ふがあります。

宮崎宮

(福岡縣粕屋郡箱崎町大字箱崎鎮座)

應神天皇

本宮の祭神は有名なる文武の聖天子、應神天皇様であります。別に配祀してあるのは、神功皇后様と玉依姫尊とであります。應神天皇の名を聞けば、誰しも胎中天皇を連想し、胎中天皇のお名を聞けば、武勇の神を思ひます。併し此の天皇が、文教の祖として、或は殖産興業の上に、著しい御功績のあつた事は、あまり世人も注意をしない様ですが、實は後者の御功績の方が、

宮崎宮(官幣中社)

熊襲

大きいのであります。

さて日本武尊の御武勇によつて、一旦鎮定せられた熊襲は、仲哀天皇様の御代になつて、又もや叛きましたので、天皇は早速之が征伐にお出かけ遊ばされまされたが、不幸にも中途香椎宮でお崩れになりました。そこで神功皇后様は、恰も御妊娠中にも拘らず、熊襲叛亂の根元たる、三韓を御征伐あらせられ、目出度く御凱旋の後、筑紫の蚊田の里(粕屋郡宇美村)で、首尾よく皇子を御分娩になりました、之が即ち應神天皇です。

筑紫の蚊田の里

胎中天皇

何しろ天皇は、胎内にあつて、三韓を御征服なされたので、武神として崇め奉り、又胎中天皇とも申すのであります。御在位四十年の間の御事績を見ますと、或は土工を起して農桑の業を奨め、又は織工を召して、紡績裁縫機織の業を擴め、軍艦を造つて國防の用意とし、又博士王仁を召して、皇子稚郎子の師匠とせられたなど、文教の發達にも、殖産興業の進歩にも、深く御心を寄せられました。

標の松

當宮の社前に向つて右に、玉垣で圍まれた老松がおりますが、從來之を標

津津ヶ浦

の松と唱へ、非常に有名です。今其由来を尋ねると、應神天皇様が、蚊田の里に御降誕あらせられた時、其御胞衣を篋に收めて、此の地に埋め、標として松を植ゑさせられたのです。むかしは此の地を津津ヶ浦と唱へたのを、此の後宮崎と稱する様になりました。即ちこゝに宮崎宮の創立されたのは、かう云ふ關係があるからで、其創立は天平寶字三年に、神託によつて宮殿を造ると云ふことが、古の記録に載つて居ります。

阿蘇神社

(熊本縣阿蘇郡宮園鎮座)

關崇神宮

肥後國の一の宮なる阿蘇神社は、其創建最も古く、大むかしは關崇神宮と呼びました。孝靈天皇様の御代に、勅命を以て社殿を造營し給ひ、又景行天皇様の御巡幸の際には、惟人命に仰せて、其祭祀を厚うさせ、又神殿をも御造營になりました。

十二宮

當社の祭神は、すべて十二宮ありまして、一宮が本社の主神であります。今左に之を列記すれば、

阿蘇神社(合幣中社)

一宮、健甕龍命、即ち阿蘇大明神と申し、神武天皇の皇子なる、神八井耳命の御子であります。天皇の七十六年に、勅を受けて筑紫に下り、國土を經

營せられました。之を肥後開闢の神で御座います。

二宮、阿蘇都媛命、即ち阿蘇大明神の神妃で、

草部吉見神の御娘です。

三宮、國龍神、又吉見神とも申し、彦八井耳命

とも云ふ、大明神の御創業を輔け、草部吉見宮に

お住むになりました。

四宮、比咩御子神、即ち三宮の神妃です。

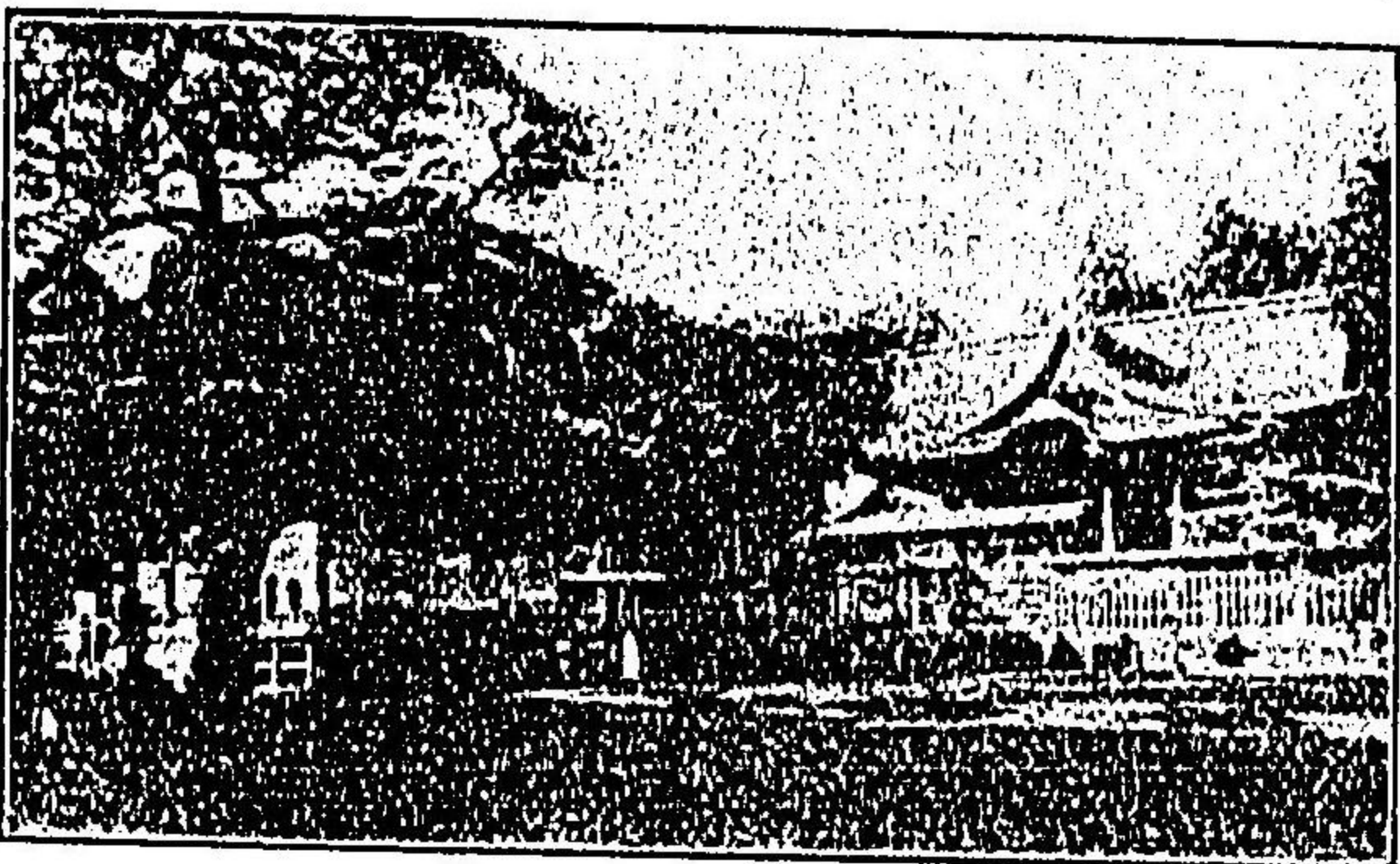
五宮、彦御子神、大明神の御嫡孫に當り、國造

速瓶玉命の御子です、別名惟人命、神功皇后の新

羅征伐に御從軍なされ、後甲佐宮にお住むになり

ましたが、そこは阿蘇四個社の一に數へられて居

ます。



阿蘇神社

六宮、若比咩神、五宮の神妃であらせられます。
七宮、新比咩神、三宮第一の御子で、大神の御創業には、大いなる御功績
がありました。

八宮、新比咩神、七宮の女神です。



阿蘇神社

九宮、若彦神、七宮の御子で、
八宮の弟神に當らせられます。

十宮、彌比咩神、七宮の神妃で

す。

十一宮、國造速瓶玉命、大神第

一の御子、崇神天皇様の御代に、
阿蘇國造に任じ、今北宮に祀る神

が之です。

十二宮、金凝神、綏靖天皇様です。

又阿蘇山上神社は、當社の攝社で、阿蘇噴火山の中腹にあります。口碑の

傳ふる所によると、阿蘇の烟こそは、當社の大明神が一切衆生の罪に代つて、
焼けさせられる炎だとさへ云ひます。大明神の御歌に、
民草の、罪にかはりて燃え出る、
烟ぞ神の、すがたなりける。

金崎宮

(福井縣敦賀郡敦賀町大字泉鎮座)

金崎の城跡

當宮の域内は、歴史上に名高い金崎の古城址で、緑滴るばかりの木立の中に、巍然として聳ゆる神明式、檜木造の宮殿は、金色燦爛、波濤かなる海水に映じて、一入崇高の趣も深いのであります。

尊良親王
恒良親王

金崎宮の御祭神は、後醍醐天皇第一の皇子、尊良親王と、同第六皇子にして皇太子たる、恒良親王のお二方であります。尊良親王は御幼少の折から、至つて御聰明に渡らせられ、嘉暦元年正月十六歳で御元服、即日中務卿に任じ、元徳二年一品に進み、兵仗を賜はりました。

後醍醐天皇

御父後醍醐天皇様は、かねて北條氏の無禮なる振舞を憎み、何とかして之

を滅さうと思召されましたが、遂に其謀が漏れて、元弘元年八月には、北條氏の使者が上洛して、天皇をば遠島に流し、皇族や諸公卿の内、此度の事に關係した者をば、夫れく處分しやうとしたのです。

藤原藤房

そこで天皇は夜の間に都を出で、笠置山へ幸せられ、親王は藤原藤房等の公卿と共に、正成の赤阪の城へ入らせられました。間もなく笠置は陥り、天皇は賊の手に執はれ給ふたとき、親王は急いで六波羅に赴かれました。所が忽ち賊軍に捕へられて、佐々木時信の家に幽閉の身とおなりになつたのです。此の頃親王の御歌に、

佐々木時信

世のうさを、空にも知るや神無月、

ことわりすぎて、ふる時雨かな。

土佐の畑

翌二年三月、鎌倉よりの計ひとして、親王をば都に遠い土佐の畑に流し奉つたので、親王は如何ばかり心細く思召されたか、
聞きなる、契もつらし衣うつ、
民のふせやに、軒をならべて。

金崎宮(貨幣中社)

春かすみ、かすむ浪路はへだつとも、

便しらせよ、八重のしほ風。

など、お詠みになつて、心の内の苦しさを述べさせられました。所が天運めぐり来て、翌三年の五月には、京鎌倉も一時に滅び、天皇は隠岐より御還幸なされ、親王も次で都に還らせられたのです。

足利尊氏
竹の下の
殿

所が中興の政は、僅に三年ばかりで、太平を歌ふ暇もなく、足利尊氏は謀反を企て、都は又もや騒がしくなりました。そこで親王は上將軍となり、副將軍新田義貞と共に、平定の大任を負ふて東國に下り、途中賊兵を破つて、箱根足柄までも進まれましたが、竹の下の戦に挫けて、餘儀なく兵を引き、一旦都に退却せられました。

次で尊氏は京師を犯し、一度は敗れて九州まで走りましたが、延元元年五月、再び大兵を以て上京しますと、其爲に義貞は退却し、正成は戦死して、京師は忽ち賊の占領する所となりました。

比叡山

其時天皇は、比叡山に行幸あらせられて、毎日の如くに戦争がかりました

北國經略

が、其年十月尊氏は、詐つて天皇に降り、京師へ御還幸を願ひ出ましたから、親王は皇太子恒良親王と共に、北國經略の任に當り給ひ、新田義貞、同義助等を従へさせられ、雪や突を冒して、敦賀までお着きになりますと、氣比神宮の大宮司氣比彌三郎が、三百餘騎を従へて途に迎へ、金崎城へと御案内申し上げました。

足利高經

かくと聞いた賊將足利高經は、若狭越前の兵を率ゐて來り圍み、更に尊氏は、高師泰に六萬餘騎を附けて、急に城を攻めさせました。當時金崎城には、僅かばかりの守兵しかありませんでしたが、何れも一騎當千の勇士ばかりで流石の賊も手のつけ様がなく、只遠巻に城を圍むこと五ヶ月、此の間一兵の來り助ける者もありませんので、金崎城内は日毎に糧食が乏しくなつて來ました。

金崎籠城

そこで相談をして、義貞義助等七人の者が、或夜そつと城を抜け出して、柚山城に赴き、援兵を求めて金崎城の危急を救はうとしたのです。所が柚山にも、僅かに五百人ばかりの兵しか居らず、夫れも甲冑が揃はぬなどで、思

柚山

ふ様に働かせんから、折角出て来た義貞等も、二十日程空しく過しました。すると又金崎城の方では、軍馬までも食ひ盡して、今は何も残りませんので、疲勞した士卒等は、只死ぬのを待つと云ふ、哀れな場合となつたのを、賊の方では夫れと知つたか、大軍一時に攻めよせて、はやその城戸をも破つたのです。

此の時山良、長濱の二人が、城將新田義顯の前に進み出で、『城兵は数日の疲勞によつて、今は矢一本も放つことは出来ません。此の上は先づ東宮をば小舟で落し参らせ、其他の人々は一所に集つて、自害せられたがよろしいでせう。其間は吾々が攻口に向つて、必ず敵を防ぎます』と、云ひも終らず引き返しました。

之を聞いた義顯は、如何にも左様だと打領き、恐る／＼親王の前に出て、『今は之迄で御座ります。臣等は武將の家に生れ、弓矢の名を惜む者故、このまゝ自害して果てます。併し貴き御身の上様には、假令敵中に出でさせられるとも、御命を失ひ参らす様なものは有るまいと思ひますから、此の

まゝこゝに居らせ給へ』と、赤心こめて申しましたら、親王は御氣色麗しく、『主上都へ還幸なされた時、吾を以て元首の將とし、汝を以て股肱の臣とするぞと仰せられた。股肱なくてはいかで元首を保つことを得やう。吾は命を白刃の上にて縮めて、怨みを黄泉の下に報いやうと思ふ。抑も自害は如何にするものぞ。』と、仰せられました。

かくて義顯は、涙を押へながら、『自害は斯様に致すもので……』と、刀を抜いて逆手に取り直し、左の脇に突きたて、右の脇の肋骨二三枚かけてかき破り、靜に其刀を親王の前に置いて、安々と息を引取りました。

さて親王は、其刀を取つて御覽になりますと、柄には血がついてすべりますから、御衣の袖にて柄を巻き、雪の如き御膚を現はし、御胸の邊に突き立て、義顯が枕の上に伏させ給ふた、時に御年二十七、延元二年三月六日の事でありませう。

此の時御前に待つて居た、左近衛中將藤原行房以下の人々は、いざさらば宮の御供参らうと、一度に腹を掻き切つて、花々しき討死を遂げ、八百餘人

親王の御最後

藤原行房

の城兵も、相前後して残らず死んでしまひました。

氣比大宮司太郎齊晴は、皇太子の御供をして、蕪木浦まで落し参らせました。直に又引返して来て、自ら首を斬り落し、親王や諸將の後を追ひました。

氣比齊晴

氣比齊晴に蕪木浦までついて来られて、夫れから先は一人旅の、辛目の數を嘗めさせられた、皇太子恒良親王は、間もなく賊に捕はれの身となりました。

一方足利高經は、諸將の首を質檢するに、義貞義助二人の首がありませんので、之を親王に質問しました。親王は今實際のことを云へば、急に杣山を攻められる恐れがあると思召し、『義貞義助は昨夜自害したのであるが、火葬にするるとで騒いで居た様だから、大方灰になつたのであらう。』と、偽つて仰せられますと、賊の方でも安心して、深くも探らず、其まゝ親王をば都に送り、やがて御弟の成良親王と共に、右大臣家定の、花山院の第に幽閉し奉つたのです。

成良親王

所が義貞や義助は、此の間に兵を貯へて、忽ち敵の數城を破りましたので、尊氏直義は親王の偽言を憎み、之を害し奉らうと思つて、一盞の藥を參らせますと、成良親王は見るなり『藥を進むるは吾を愛するのである。豈人を愛してかく一室に悶えさせる事があらう、之は恐くは毒藥に相違ない。』と、庭の中へ投げ棄てやうとなさいますと、恒良親王は夫れを取つて咽喉に下だし、幽閉の苦しみよりは、死ぬ方がましだと仰せられて、從容としてお薨れになりましたが、時に御年僅に十五歳でありました。

明治維新の後、即ち二十三年九月、金崎宮の宮號を下され、次で二十五年十二月には、恒良親王をもこゝに合祀することゝなりました。

太宰府神社

(福岡縣筑紫郡太宰府町大字太宰府鎮座)

菅原道真

菅原道真公の御傳記は、三歳の兒童と雖、よく知つて居ります。公は儒臣の家に生れて、右大臣にまで進み、一旦は藤原氏のために、太宰府に流されて、罪なくて配所の月を眺むると云ふ悲しむべき身となられました。公が

太宰府神社(管幣中社)

なくなつてから、其罪なき事も解り、正一位を贈られて、天満大自在天神の神號をさへ賜つたのであります。

公の神靈が、太宰府町に鎮座せられたのは、延喜三年二月二十五日のこと、同二十三年四月には、太宰府に勅使を下されて、本官右大臣に復し、正二位を賜はる宣命がありました。

かくて一條天皇様の正暦四年五月二十一日には、從五位下武藏守菅原幹正を勅使として、太宰府へ下され、正一位左大臣を賜はり、同年十一月、再び勅使が下つて、正一位太政大臣を賜つたので、公の光榮は人臣の極であると云つてもよろしい。

諏訪神社

(長野縣諏訪郡中洲村下諏訪町)
(字神宮寺下ノ原湯ノ町鎮座)

當社の祭神は二座、建御名方富命、前八坂刀賣命であります、さて建御名方神の御父は、大己貴命で、又御母は高志沼河比賣命と申すお方で、建御名方神は御兄君の、八重事代主命と共に、父君を輔けて、國土の經營に力を盡

菅原幹正

建御名方
富命
前八坂刀
賣命

し、兇賊を平定して、大功とお樹て遊ばされ、やがて天孫降臨の時には、父君兄君と同じく、天神の勅命を奉じて、深く國土を奉り、此の諏訪の地に退

耕作の神



諏訪神社 下社 春日神社 宮神社

いて、永く國家の鎮護となられました。之を即ち當社創立の由來であります。初め諏訪の土地は、草木生ひ茂り、猛獸毒蛇の棲家となつて居ましたから、命は先づ夫れ等を驅逐し、洪水暴風の災害を防ぎ、神妃八坂刀賣命と力を併せ、猶其妹の八坂入姫命と一族を率ゐて、土地を拓き、養蠶機織の業を興させられたので、後世耕作の神と呼び、五穀の豐熟を祈ることゝなつて居ます。

諏訪神社(官幣中社)

三韓征伐
の役
文永弘安

守護し、文永弘安の役には、蒙古の賊を討ち給ひ、田村將軍の蝦夷征伐にも、

一方ならぬ御力を添へられました。されば代々の帝の御尊崇も深く、維新の初め國幣中社に列し、更に二十九年四月、官幣中社に昇格されたのであります。

生田神社 (神戸市下山手通一)

本社には東海道鐵道三宮停車場より、東北三丁は神かり、即ち神戸市下山手通一丁目なる、生田の森社に鎮まりまして、そのはじめは、神功皇后が、三(瓶) 韓から御凱旋の折に、攝津國務古の水門で、神勅のに従ひ、皇后の攝政元年春二月に、親しくお祀り遊ばされた古宮であります。



稚日女尊

います。殊に本社は、歴代天皇の御崇敬も深く、天變地異の折々には、必ず

生田の森

境内の舊

当社へ祈念あらせられたのも、全く其神威が著しいからであります。本社境内には、種々の舊跡があります。即ち瓶の梅は、源平合戦の時に、梶原景季が、此の境内に咲いて居た梅の枝を手折つて、瓶に挿したもので、其他梶原の井、敦盛の萩、辨慶竹、神功皇后釣竿の竹、八丁梅など、何れも歴史上に名高いものばかりです。

長田神社 (神戸市大字長田村鎮座)

本代主命

當社は和岬の西北に鎮座して、祭神は事代主命、神功皇后の攝政元年に創建せられたもので、攝社二座、末社四座、村上天皇の雨乞の燈籠は、今も社前にあつて名高いものであります。

御神徳の顯著なることは、申すまでもなく、世に運の神とさへ稱へ奉りて、毎月一日には、商人其他の參詣者殊の外に多く、社前は雑沓を極むるの有様です。

長田神社 (官幣中社)

海神社

（兵庫縣明石郡垂水村ノ内東垂水鎮座）

綿津見神



日向大明神

此の社の祭神は、底津綿津見神、中津綿津見神、上津綿津見神の三柱で、此の三柱を併せて綿津見神とも亦豊玉彦神とも申し上げるのです。又当社を海神社と呼ぶのは、綿津見神が海のすべてを御主宰遊ばされるからであります。

さて綿津見神は、かの伊弉諾神が、黄泉の國よりお歸りになり、筑紫の日向の橘の、小戸の檉原で御身の穢れを清めさせられた時、天照大御神や素戔鳴尊や住吉神など一所にお生れ遊ばされたので、世に日向大明神とも申し上げます。又御息女の豊玉姬命は、彦火々出見尊の后妃に

渡らせられ、鷓鴣草葺不合尊を生ませられ、御妹の玉依姬命は、葺不合尊の

皇祖の御外祖父

神功皇后

后妃となつて、神武天皇を生ませられました。故に當社の祭神は、皇祖神武天皇様の御外祖父に當らせられるのであります。

當社の由来を尋ぬるに、神功皇后様が、三韓より御凱旋の折に、此の地の海上で、暴風怒濤のために御船少しも進まず、一方ならぬ御難を嘗めさせられた時に、三柱の海神を御親ら祀らせ給ふと、靈驗忽ち現れて、風も濤も収り、海は鏡の如くに平かになつて、恙もなく都へお歸りになりましたが、之ぞ當社の此の地に起つたはじめであります。

英彦山神社

（福岡縣田川郡彦山村大字彦山川鎮座）

護國安民の勅願所

抑も鎮西の英彦山は、天孫降臨の鎮獄靈社で、護國安民の勅願所ともなつた所、山水の景の美しいことは、九州日光の名を恣にして居ることでも解りませう。英彦山の高さは、海拔三千九百五十九尺、其周圍には大小の山々が重り合つて、ひかしは三千八百坊、十谷四十九窟がありました。斯くの如く盛大を極めたのは、大寶慶雲年中に、役小角と云ふ行者が、は

英彦山神社（管幣中社）

じめて此の山を拓き、後法連上人が、行者の事業を受け継ぎ、一山の衆徒は上人を貫首と仰ぎました。

傳燈大先
親王

かくて元弘三年後伏見天皇様の第六皇子なる、長助法親王が、九州へ御下向遊ばされた時には、當山の衆徒は親王を奉迎して、貫首の職に推し奉り、之を第二十七世の傳燈大先達助有法親王と呼んだのです。
明治維新の後、四年僧官返上の命が下り、當社は神祇官の支配となり、次で官幣中社に列せられたのであります。

住吉神社

(山口縣豐浦郡勝山
村大字楠乃鎮座)

伊弉諾大
神の御子

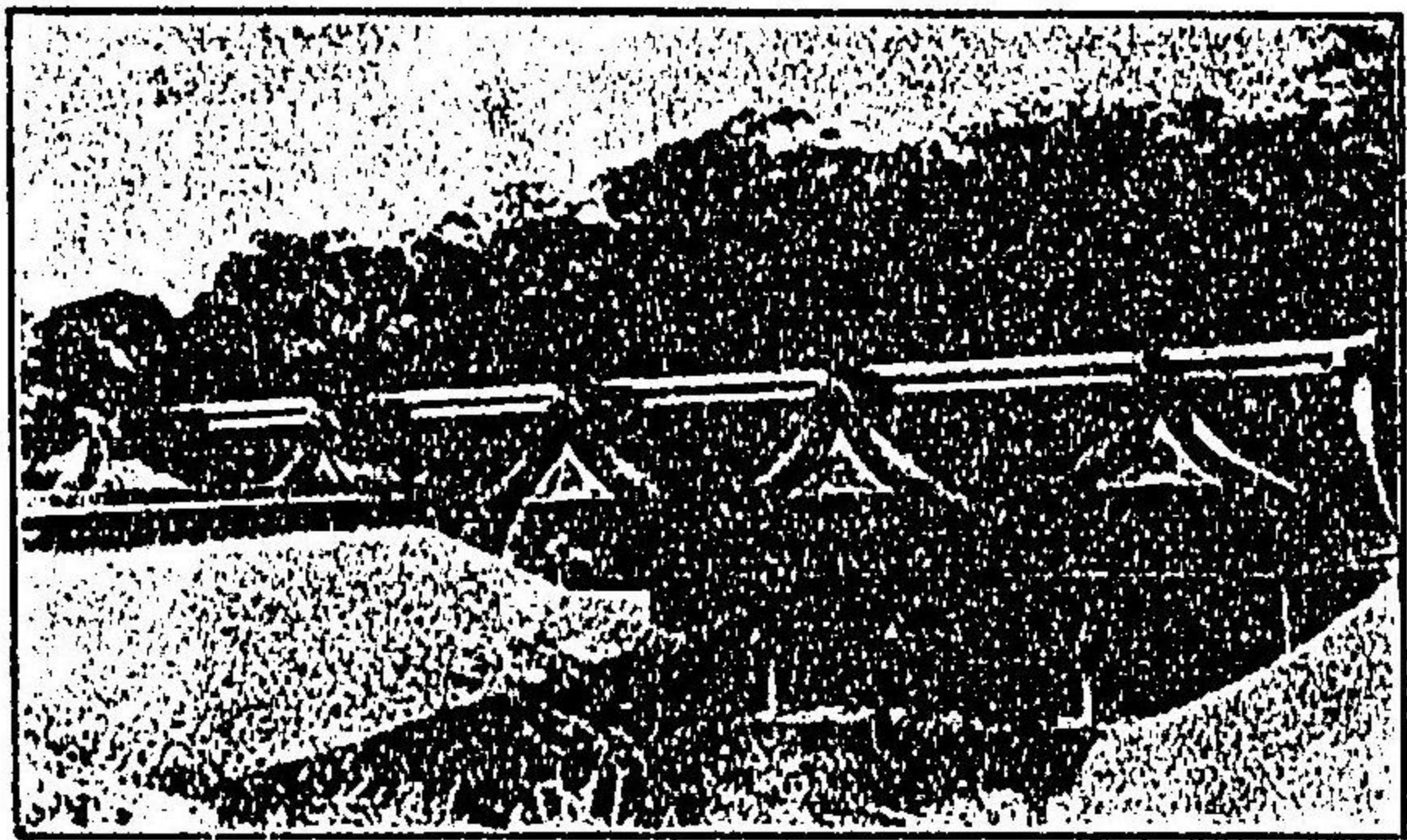
當社の祭神は、表筒之男神、中筒之男神、底筒之男神の三柱で、共に伊弉諾大神の御子であります。そして神功皇后の三韓征伐の時に、非常に御力を添へられた事は、日本の歴史に残つて居て、誰知らぬ者もない位です。
當時神功皇后様が、三韓を平けて、御凱旋の折に、住吉大神の教へ給ふやう、わが荒魂を穴門の山田の里に鎮めて、國の守りとし給へとありました。

神功皇后

直踐立

そこで皇后様は、穴門の直の祖、踐立と云ふ者を神主にして、住吉神の荒魂

和布刈の
神事



嚴島神社

(廣島縣佐伯郡
嚴島町鎮座)

嚴島神社 (官幣中社)

をお祀り遊ばされたのです、之が即ち現時の住吉神社で、年を経ること千七百十餘年になります。即ち當社には名高い和布刈の神事があります。即ち毎年陰曆の十二月晦日の夜半に、當社の職員は身吉をしらへして、壇の浦の海岸にゆき、海神を祀つて和布を刈り取り、翌朝元旦の供御として獻納するのであります、はじめは穴門の直踐立が、壇の浦の和布を刈り取つて、住吉大神と神功皇后とに獻上したのですが、丁度其日が元日に當りましたから、以來絶えせず、遂に當社の神事となつたのであります。

命市杵島姫

日本お宮物部

一四二

當社は嚴島大明神とも云つて、當國の一の宮で、祭神は市杵島姫命を主神とし、田心姫命、湍津姫命の三座を祀り、相殿には天照皇大神、國常立尊、素戔嗚尊を祀るのであります。

推古天皇

其創立の由来は、推古天皇様の三十二年十二月、神託によつて、佐伯鞍職が恩賀島に於て社殿を造營したのが始めで、清和天皇様の貞觀元年に、從四位下を授けられてから、累進して正一位となり、延喜の制には名神大社に列し、後本國の一の宮と呼ばれました。

平清盛

近衛天皇様の久安二年、平清盛が、安藝の守護に任ぜられた時、深く當社を崇敬し、朝廷に奏して修理を加へ、廻廊百二十間を造り、仁平二年に至つて、漸く其工事を終りました。當時平家の一族は申す迄もなく、公卿の参拜する者も、頗る多かつたのであります。

源頼朝

又後白河法皇や、高倉上皇の御幸を仰ぎ、高倉天皇様の時には、藤原在經が國司として、當社の修繕をなし、次で源頼朝も、深く當社を崇敬して、神領、神物、修造等の料を獻じました。

寶物

かくて順徳天皇様の時、源實朝は當國佐伯郡一萬六千貫を寄附して、親實を神主職に補し、佐伯姓を賜ひて修理等の事を掌り、後堀河天皇様の貞應年中火災にかゝり、嘉禎元年になつて再建せられました。

當社の寶物は頗る多く、中にも平家納經、願文紙本着色巻物の類は殊に名高く、又本社及び大鳥居其他の社殿も、特別保護建造物となつて居ます、殊に當社は一に宮島とも云ふて、日本三景の一に數へられ、風光の明媚なることは、殆ど他に比すべき所がありません。

官幣小社之部

大國魂神社

(東京府北多摩郡府中町大字府中鎮座)

武藏大國魂大神
景行天皇

當社の祭神は中殿に武藏大國魂大神を主神とし、御靈大神と國內諸神とを祀り、又東殿は小野大神、小河大神、水川大神、西殿は杉山大神、金佐奈大神、秩父大神と、都合六宮に分たれ、御鎮座地は夫れく異つて居ります。當社の起源は、景行天皇様の四十一年五月五日、武藏大國魂大神が、御體形を現はされて、此の地に祀るべき旨をお告げになりました。そこで土地の人々が、此の神託を畏んで、神殿を造立し、之を大國魂神社と稱へ奉りました。

兄多毛比命

所が此の時に、主となつて齋祀を司つたのは、武藏國造兄多毛比命でありましたから、國造を以て代々神主とすることになつたのです。次で國司赴任の後、國衙に於て神社一切の事務を管理せられたと云ふ、貴いお社ですか。

勅祭神社

ら、徳川幕府創業以來も、武將の崇敬殊に厚く、明治維新の際、勅祭神社に准せられ、後官幣小社に昇格したのであります。

波上宮

(沖繩縣那覇區字若狹町鎮座)

琉球神道

崎山の里

木に似た石



當社は一に波上權現とも云つて、祭神は速玉男尊、伊弉册尊、事解男尊(或は云ふ熊野大神)の三柱の神々で、創建の年代は詳かではありませんが、琉球神道記と云ふ書物に記されてあるのを見ますと、當社は琉球第一の大權現であります。むかし此の崎山に、崎山の里主と云ふ者が居りました、いつも海邊に出て、釣をするのを仕事として居りましたが、或日例の如く、竿を肩にして汀を歩いて居ますと、後方から呼ぶものがありますので、誰かと思つてふり向いて見ました、人らしい者は居ないで、たゞ一つ、木に似た石があるのです。

波上宮(官幣小社)

崎山の里主は之を見て、さては今自分を呼んだのは、此の石であつたかと、まづ其石を取つて、一段高い所に置き、さて祈つて云ふやう、「此の石若し靈があるならば、今日の釣りに多くの獲物を興へよ。」

と所が不思議にも、その日は殊の外の大漁で、里主の喜び大方ならず、其後も時々此の石に祈るに、屹度效驗があつたと云ひます。

そこで或夜のこと、例の石の邊を見渡しますと、異様な光りを放ちますので、さては靈石に相違ないと改めて之を取つて、手厚く祀りますと、此の國の神々が大いに怒つて、其石を奪ひ取らうとしましたので、里主は度々居所を替えて逃げ廻り、やがて此の波ノ上にまで來ますと、忽ち神託があつて、「吾はこれ熊野權現である、汝に縁あるもの故、よろしく吾を此の地に祀れ。國家を守護するであらう。」とあつたから、直に此の旨を朝廷に奏して、こゝに神社を創建したとあります。

竈門神社

(福岡縣筑紫郡太宰府町寶滿山鎮座)

神託

玉依姫尊

龜戸山

沼田の岡



竈門山と云へば、古から名を知られた、筑紫の靈山でありまして、此の山に鎮座します御神は、皇祖神武天皇様の御母神、玉依姫尊で、相殿には神功皇后と八幡大神とを左右にお祀り申してあります。

玉依姫尊は海神の御女で、鸕鷀草薙不合尊の御

后、神武天皇様をお生みなされて後は、御靈永く

此の竈門山にお入り遊ばされたと云ふことです。

さて神武天皇様は、中州平定の大業を思し立ち

神たまひ、日向國高千穂の宮を出て、東征の途に上り給ひ、わざく廻り道をして、筑紫國の沼田の

社岡までおいでになつた時、侍臣駒主命が進み出て「かの雲に登えて立つ山は、即ち竈門山で御座ります」

と、申し上げますと、天皇は大いに喜ばせられ、皇子達と共に、此の丘上

竈門神社(管幣小社)

開基の起

に車を止め、自ら御神鏡を真榊に取り懸け、巖に大玉串を刺し立て、遙かに
 竈門の大神を伏し拜んで、やがて其場を立ち去らうとなされたが、又も
 やわざ／＼其山まで上らせられ、劍璏を母神の靈に捧げて、天下統一の大業
 を成就するやう、熱心こめてお祈り遊ばされました。
 之ぞ實に當山開基の起源であります。

別格官幣社之部

談山神社

(奈良縣磯城郡多武峰村大字多武峰鎮座)

藤原鎌足

蘇我入鹿
中大兄皇
子

大職冠

多武峰は、晝も暗いばかりに、老樹森々として茂り、如何にも神さびた所
 で、談山神社は其所に建てられてあります。祭神は内大臣大職冠藤原鎌足公、
 公は、實に天兒屋根命二十一世の孫中臣御食子卿の長子として生れた人です。
 かの聖徳太子の皇子なる、山脊大兄王を殺して、國政を我物とし、遂には
 天位をも傾け様とした蘇我入鹿の暴逆を見るに見兼ねて、中大兄皇子と心を協
 せ、或日棕梯山今の多武峰に登つて、藤の花の咲き亂れて居る下で、入鹿を
 誅する謀を廻らされ、遂に大極殿で、首尾よく其目的を達せられました。
 さて皇子が、天皇の御位にお即きなされてから、殊功ある鎌足公は、大職
 冠を授けられ、内大臣に任せられた上、更に藤原朝臣の姓をさへ賜はりまし
 た。公の世を去らるゝや、遺骸は一旦攝津の阿威山に葬られました。公の

談山神社(別格官幣社)

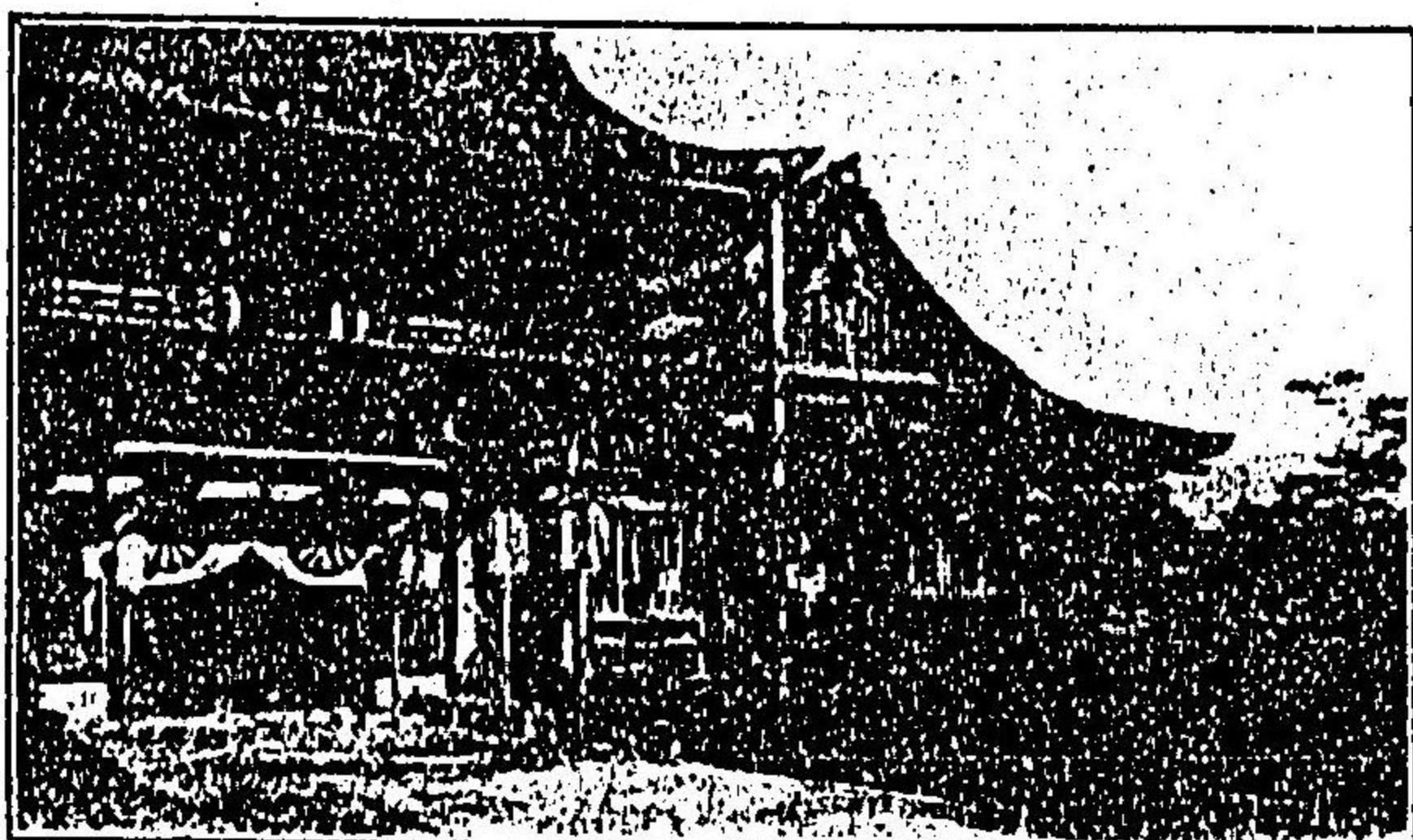
定慧和尚

唐の清涼山

談所ヶ森

破裂松

日本お宮物語



一五〇

長男の定慧和尚が、唐より歸つて来て、今の地に
改葬したのであります。

談山神社の境内には、見るべき名所も少くあり
ませんが、殊に十三重塔と云ふのは、天武天皇の
白鳳七年に、定慧和尚が歸朝の節、唐の清涼山か
ら移したもので、實に今を去ること千二百三十四
年前に建てたものです。又談所ヶ森と云ふのは、
鎌足公が皇子と藤の下で謀を廻らされた所で、今
も猶年經た藤が蔓つて居ます。

御破裂山は、陵山だの神山だのと呼んで、其頂
上に破裂松舊蹟の五字を刻んだ自然石があります。
屹度此の山が鳴動して、國家守護の奇特を現すと
云ひ傳へます、吁鎌足公の神靈も亦尊いではありませんか。

和氣清應

大隅國

神護國祚寺

孝明天皇

護王神社

(京都市上京區烏丸通下立賣上ル櫻畑町鎮座)

當社の祭神は和氣清應公であります。公は備前藤野郡の人、稱徳天皇様の
神護景雲三年に、僧道鏡が天位を窺つた時、太宰府に使用して神教をさし、遂
に道鏡の目算を根底から破壊し、其後一旦は道鏡の怒りに觸れて、大隅國へ
流されましたが、間もなく呼び返されて、皇室の爲めに、終生赤誠を盡した
大忠臣であります。

當社の鎮座の歲月は詳しく解りませんが、傳説によれば、高雄山神護國祚
寺は、公が實祚長久祈願のために、創建せられた所で、初め神願寺と呼びま
した。後僧空海が此の寺に入り、淳和天皇様の朝に、神護國祚寺と改め、僧
文覺が大修繕を加へ、且つ公が創建の功と、其の忠烈とを追慕して、護法神
の祠を建て、以て公の靈を祀つたのであります。又一説には、公の遺骸を、
此の山に祀つたとも云ひ傳へてあります。

護王神社(別格官幣社)

一五一

かくて孝明天皇様の嘉永四年三月に、正一位護王大明神の神號を賜ひ、明

治七年十二月別格官幣社に列し、同十九年十一月三日、今の地に御遷座になつたので、毎年四月四日其例祭が営まれます。

小御門神社

(千葉縣香取郡小御門村大字名古屋鎮座)

成田鐵道の沿河驛から、右に折れて阪路を登ると、前面に一帶の松林が、翁鬱として茂り、西北には筑波日光の山々が打連り、西南には富士の高嶺が屹然として聳え、その間から當社第一の華表は、まづ旅客の目に映ずるでせう。

さて當小御門神社の祭神は、藤原師賢公であります。公は内大臣師信公の御子で、家を花山院と號し、後醍醐天皇様に仕へて、彈正尹大納言となりましたので、世人は尹大納言と申しました。

師賢公は最も慷慨の氣に富み、學問の志も深かつたので、主上の御寵遇も厚く、其北條高時を討ち滅さうとなされた時にも、何くれとなく公に御相談を賜はり、一時笠置山に行幸させ給ふ事となりました。

藤原師賢

北條高時

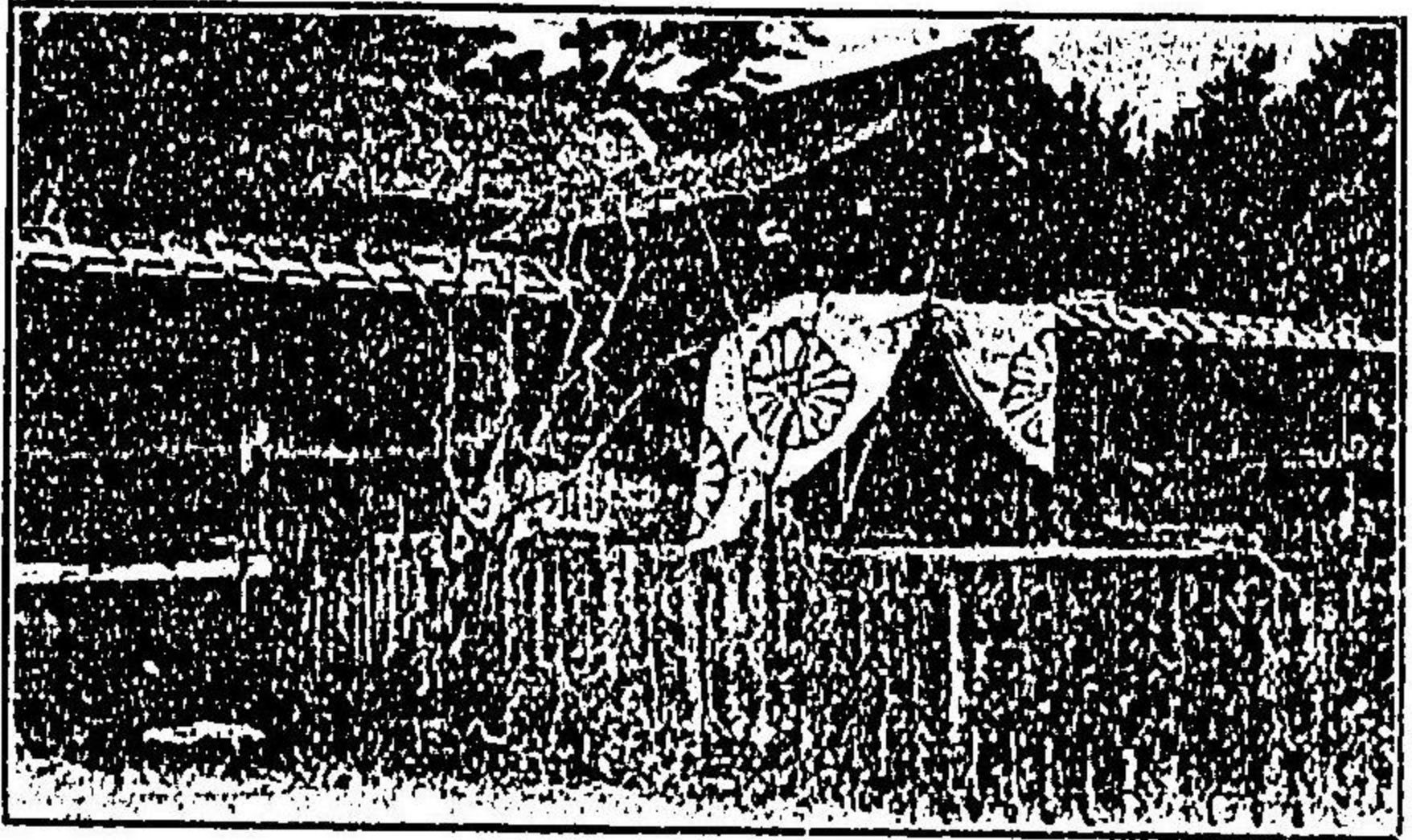
時に天皇は、叡山の衆徒の心を計るため、公に御衣を下し賜はりました。

そこで公は、其衣を着用して、主上行幸の體を装ひ、叡山に登つて、官軍の指揮をなさいましたが、事は思ふやうに抄取らないので、夜半に一旦京都へ歸らうと、志賀の浦の邊を過ぐるのに、有明の月が面白く照して居るので、

思ふこと、なくてぞ見ましほのくと、ありわけの月の、志賀の浦浪。

と、心の苦しみをお詠みになつたこともあります。

さて其後笠置の行宮へ参り、天皇の供奉をせられました。官軍破らるゝに及び、天皇は公と藤原藤房、源具行等をお供にして、風雨の激しきをも厭はせられず、嶮岨の山路をたどらせ給ふたのです。此の時公は、後の方が心配なので、時々ふり返



笠置の行宮

叡山

小御門神社(別格官幣社)

下總國

つて見て居られましたが、何しろ暗夜のことですから、いつしか、天皇を見失ひ、心ならずも京へ歸つて、所々にかくれて居られたのであります。けれども遂に賊兵のために捕へられ、元弘二年五月、下總國へ流され、遂に同地で薨去せられました。年は僅三十二歳でありました。

明治の御代も十年の五月、村民協議して、社殿建設の請願をなし、十二年一月許されて、社號を小御門神社と賜り、十五年六月別格官幣社に列せられました。

菊池神社

(熊本縣菊池郡限府町大字正觀寺鎮座)

藤原武時
後醍醐天皇
繪旨と錦旗

當社の祭神は藤原武時公で、明治十一年別格官幣社に昇格の際武重公以下二十五座を配祀せられました。當社の主神武時公は、元弘二年北條高時が後醍醐天皇様を隠岐に移し奉り、二年の後天皇が伯耆國なる船上山に御臨幸なされた時、公は少武貞經、大友貞宗と相談して、勤王の志を密かに行在所に奏聞しましたので、天皇の御感斜ならず、繪旨と錦旗とを賜りました。

北條英時

茲に於て公は大いに喜び、先づ高時の一族なる、鎮西探題北條英時を博多に討ち、其上で船上山へ參上しやうと思ひました。所が早くも其謀が敵に知

れたばかりか、力に思ふ貞經と貞宗とは、忽ち變心して敵に投じたのです。

菊池 けれども公の志は少しも挫けず、一族郎黨百五十餘騎を従へて出發し、櫛田神社の前まで來ると、少しも馬が進まないのので、公は大いに怒り、「吾今王事の急に赴くに、鬼神義兵を沮み、乘馬を咎むるとは何事である」と、直に鎗矢を取つて、

社 武士の上矢の鎗一筋に、思ひきるとは神や知るらん



櫛田神社

で博多に入り、奮戦して賊兵を殺すこと二百餘人に及びました。さればさし

菊池神社 (別格官幣社)

もの英時も、今は是までぢやと、一族を集めて自害し果てやうとしましたが、悪運の強い英時は、やがて少武貞經、大友貞宗等の六千餘騎の援兵を得て、又元氣を恢復して、公は却つて其軍の爲めに、すつかり取圍まれてしまひました。

長子武重

最早やかうなつては、小勢の味方で、到底勝つことが出来ません。そこで武時は、長男の武重を召して云ふやう、「吾今仁義の爲めに身を棄てる、死は毫も恐れない。併し生きて凶賊を滅すことの出来なかつたのは如何にも残念である。其方直に家に歸り、居城を全して君と國とに盡せ」と、云ひ終つて衣の袖を裂き、

辭世

「故郷に今宵かぎりの命とも、知らでや人の我を待つらん」と、辭世の和歌を血書して與へました。併し武重は同じくこゝを死場所と定めて居ますので、容易に立去らうとはしません、で公は聲を勵して叱つて云ふには、「小信を守り大義を忘るゝ様では、良將勇士の名は得られぬぞ。」と、流石の武重も、之には返す言葉もなく、泣く泣く別れて立ち去りました。

元弘三年

後で公は、最早や之にて思ひ残すことは更にないと、残兵を指揮して奮戦しましたが、遂に矢盡き刀折れて、一族悉く死んでしまひました。實に元弘三年三月十三日のことです。かくて五百五十餘年を経て、明治の聖代となり、從三位を追贈せられ、別格官幣社に列せられたのであります。

湊川神社

(神戸市多聞通三丁目鎮座)

楠正成

當社の祭神は、贈正一位楠朝臣正成公で、配祀には正行公以下の御一族、

後醍醐天皇
皇
湊川の戦

明治五年五月七日の御鎮座であります。公が邦家のために、一族を擧げて盡されたことは、今新しく記すまでもありません、其後醍醐天皇に召されて、金剛山に菊水の旗を翻し、一旦君が御代となつたのも一時の間で、再び足利尊氏を攻め、遂に湊川の決戦に、七生報國を盟つて戦死されましたが、遺子正行も亦父の子として、皇室のために一命を捧げたので、實に公の父子は、我國忠臣の龜鑑として、萬世の末ま

湊川神社(別格官幣社)

でも名を傳へられて居るのです。

さて淡川神社は、明治元年四月二十一日、御造營仰せ出され、五年五月七日社號を淡川神社と賜り、同日社格を別格官幣社に列せられ、十三年七月二十一日、正一位宣下、五年七月八日、十年一月二十八日、十三年七月二十一日の三回まで臨御あらせられました。

当社々殿の構造は、所謂春日造で、建坪十坪五合、毎年五月二十五日の大祭には、神幸式を執行し、其行列風流を盡し、供奉の者約千人、實に天下の壯觀であります。

又當社の寶物としては、大楠公御着具腹巻、外四十點で何れも貴重なる品で、公の御廟所は、元祿八年十一月、源光圀卿の再建する所で、舊名梅塚と呼び、碑石の表面には、嗚呼忠臣楠子之墓の八文字を記し、其裏面は、朱舜水の撰文三百二十八字、東屋造の雨覆があります。

當社の攝社甘南備神社は、公の夫人滋子刀自を祀り、明治三十九年九月の鎮座です。

春日造

源光圀

滋子刀自

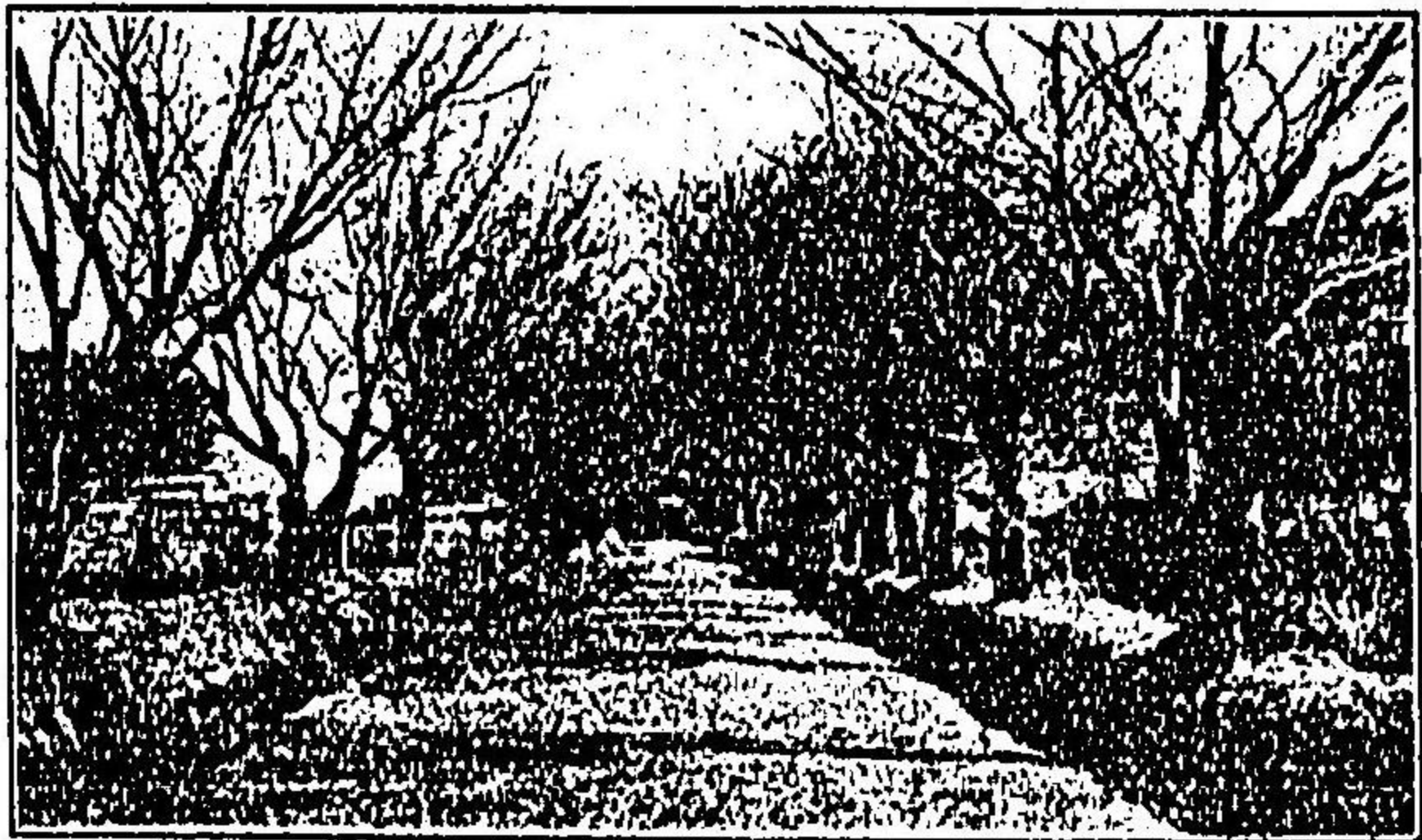
名和神社

(鳥取縣西伯郡名和村大字名和鎮座)

當社の祭神は、名和伯耆守源朝臣長年公、及び一族以下戦死將士四十二名合祀で、公は、建武三年六月晦日、京都大宮の合戦で戦死されましたが、左に其略傳を掲げます。

公は幼名長高、又太郎と呼ばれました。伯耆國名和の人、具平親王の後裔なので、又村上氏とも云ひました。元弘三年後醍醐天皇の隠岐にならせられるや、源忠顯と共に、夜に乗じて隠岐を出でさせられ、侍臣を遣して長年に仰せられるには、『朕は隠岐から来て、卿に依らうと思ふ、卿もし勅を奉じなければ、かくと鎌倉に告げよ』と。

之を聞いた公は、涙にかきくれて、『天下の大事を托せらるゝからには、臣



名和神社(別格官幣社)

名和長年

具平親王

船上山

死を以て報ひます』と、急ぎ子弟を集め、衆を率ゐて天皇を迎へ、船上山に據つて義旗を挙げました。

足利尊氏

元弘の亂平定して、天皇に従ひ都に歸り、更に延元元年からは、楠正成等と、足利尊氏を攻めて、屢々功を樹てましたが、最後の戦敗るゝに及びて二百餘人と力戦して、花々しき討死を遂げました。

池田光政

さて當社鎮座の由来を尋ねるに、承應明暦の頃、當郡名和村の地内の、名和氏の邸址と稱する所に、地方の有志が、はじめて一小祠を建て、祭り、更に延寶五年十月、因幡伯耆の領主たる、池田光政が、日吉坂の丘陵に、立派な社殿を造つて遷し奉り、明治十一年別格官幣社に列せられました。十六年四月現今の所へ遷座せられました。此の地こそは、實に名和氏の倉址で、元弘三年船上山へ立籠る時、公自らが焼き棄てたもので、今も焼栗が出る云ふ、確實なる縁故のある土地であります。

焼栗

阿部野神社

(大阪府東成郡住吉村大字住吉鎮座)

北畠顯家

阿部野神社と云ふは、贈從一位右大臣北畠顯家公を祀る所です。顯家公は、村上天皇第七の皇子中務卿具平親王第十二世の孫、准后北畠親房公の長男であります。元弘元年十四歳で、早くも參議に任ぜられ、左近衛中將となり、同三年には、彈正大弼を兼任しました。

後醍醐天皇

是れより先、天下の兵權は、武家の手に歸し、北條氏になつてからは、朝廷に對して、我儘勝手振舞が、いよゝはげしくなりましたので、後醍醐天皇は、之を征伐しやうと思召しましたが、其御謀は、間もなく北條氏に知れ、高時は天皇を隱岐國に遷し奉つたのです。

高時を誅す

かう云ふ有様ですから、諸國に散在する勤王の武士は、最早や黙つては居りません、夫れ々旗揚げをして、天子様の御味方を致し、首尾よく高時を誅して鎌倉を平げ、天下は平定したのであります。

足利尊氏

すると間もなく、今度は足利尊氏が叛きさうになりましたから、天子様は其用心のために、顯家公を陸奥守とし、東北諸國の鎮守とせられました。所が果して建武二年の秋、尊氏はとうとう叛きました。

阿部野神社(別格官幣社)

そこで天子様は、新田義貞と顯家公とに詔を下して、尊氏を鎌倉に攻めよと仰せ下させられたのであります。顯家公は、此の勅命を受けると共に、直に鎌倉に向ひましたが、之より先尊氏は、既に西に進發した後でしたから、公は東北の勇士を率ゐて、尊氏を追ひ行き、遂に京都に着いて、新田、楠等と力を合せ、大いに賊軍を敗り、とうとう大將の尊氏を、西國まで追拂つてしまひました。

義良親王

さて顯家公は、右衛門督檢非違使別當を兼ねて、又義良親王を奉じ、陸奥に下つて鎮守府大將軍となり、權中納言に任ぜられたのです。すると此の年五月、尊氏は又々大軍を率ゐて九州より進み、遂に京師を陥れましたから、天子様は吉野にお遷りになり、都は再び戰場となりました。

顯家の最

かう云ふ有様ですから、顯家公は義良親王を奉じて急いで都に還り、各所に轉戦の後、京都を取り返して、其上で吉野へ行かうと思ひ、阿部野で賊軍と戦ひましたが、不幸にして味方は散々に敗れ、自分も花々しい戦死を遂げました。其時年僅に二十一、あたら花の若武者を散らしてしまつたのです。

父親房

併し朝廷では、此の功臣の忠節を嘉せられ、明治十五年一月、其靈を崇めて阿部野神社と號し、別格官幣社に列して、父親房公をも合祀せられたのであります。

藤島神社

(福井市足羽山 山ノ内鎮座)

新田義貞

福井市の南、足羽山にある當社は、南朝の忠臣新田義貞公の神靈を祀る所、元は市の西北なる、藤島村にありましたが、去る明治三十一年今の地に遷座されました。

源家の嫡

抑も新田義貞公は、源義家朝臣十一世の御孫で、源家の嫡宗であります。世々上野國新田郡世良田村の領地に居り、之を氏とせられました。公が十七歳の時、家人に向つて云はれるには、「我家は代々朝廷の武臣として、賊を討ち亂を平げられた、義を貞しくしなければならぬ」と、自ら義貞と名乗り、弟の小次郎君には、「吾が義を挙げたら、汝は之を助けよ」と云ふので、義助の名を與へられたのであります。

弟義助

藤島神社 (別格官幣社)

かくて元弘三年の春、

北條高時は、後醍醐天皇様を隠岐に移し奉つたので、

公は直に義兵を挙げやうと思ひ、先づ家臣船田義昌をやつて、大塔宮護良親王の令旨を請はせますと、親王は義貞の志を嘉せられ、高時征討の令をお下しになりました。

之を得た公は、一家の面目此上なしと、大いに喜び、内々で其用意にとりかゝられました。かくとも知らぬ高時は、使者を世良田村に立て、六萬貫の軍資金を募るに、五日の日限を命じて來ましたから、公は早くも其使者を捕へて之を斬り、首を村の中央に吊して置いたのでした。

所が間もなく此の事が、高時の耳に達しましたから、怪しからぬ義貞の振舞かなと、烈火の如くに怒つて、武藏上野の兵を發して、世良田村に攻め寄せたのです。



(藤島神社(義貞公廟地))

護良親王

世良田村

生品明神

公は又五月八日、宗徒百五十騎を率ゐ、家紋を染め出した大旗を、生品明神の祠前に立て、大塔宮の繪旨をば三度迄も拜し奉り、軍を進めて笠懸野まで参りますと、越後甲斐信濃などに散在せる、源氏の兵七千餘人が、何れも其手に付きました。

公の大軍は進み進んで、武藏國へ入りますと、更に又上野上總常陸武藏諸國の兵が、一時に馳せ参じて、公の揮下には忽ち二萬餘人の大軍が集つたのです。で其十一日には、賊將櫻田貞國と、入間川に出合ひ、一日の内に三十餘度の戦を交へました。

所が其翌日には、久米川にまで押しよせて、とうとう貞國を打破り、十五日の曉方からは、賊將北條泰家の十萬の兵と戦ひ、十六日には之をも見事に敗走させ、兵を三手に分ちて、堂々と鎌倉の本營へ進撃したのでした。

即ち大館宗氏、江田行義等は、極樂寺坂より進み、堀口貞満、大島守之等は巨福呂坂より、本隊たる公は義助朝臣と一所に、假粧坂より進み、雲霞の如き敵の大軍と、一日一夜の間に、六十五度迄切り結び、宗氏は極樂寺坂に

藤島神社(別格官幣社)

北條泰家

入間川

極樂寺坂

稲村ヶ崎

於て、花々しき戦死を途ぐるに至つたのです。
かくて二十一日、公は精兵二萬を率ゐ、我軍の急を救ふ爲めに、月夜に乗じて敵の陣地を見渡されると、北は切通しまでも山高く峻く、夫れより南稲村ヶ崎の海岸まで、逆茂木を并べ立て、沖には大船を浮べて、用意堅固に構えて居ますので、我軍如何に勇ありとも、こゝを通過することは、甚だ困難でありました。

そこで公は、先づ馬より下りて、胃を脱ぎ、海に向つて伏し拜みながら、『今天子(てんし)は逆臣(ぎやくしん)のために、西海(さいかい)に漂ひ給ふのであります。されば義貞(よしまさ)臣(しん)たる者の道(みち)を盡(つ)す爲(ため)に、劍(けん)を提(ひ)げて賊(ぞく)を討(う)つのであります。仰(おほ)ぎ願(ねが)はくは海神(かいじん)の赤誠(せきせい)を掬(く)み、潮(うしほ)を萬里(ばんり)の外(ほか)に退(しりぞ)け給へ』と、一心(いっしん)に祈(いの)り、佩(が)びて居た黄金(こがね)の太刀(たち)を解(と)いて、海中(かいちゆう)に投げ棄(す)てました。

すると不思議(ふしぎ)にも、其曉(そのあけ)方頃(がた)になつて、俄(たち)かに汐(しほ)が干(ひ)上(あ)り、白(しろ)い砂地(すなぢ)が現(あら)れて、賊(ぞく)の船(ふね)は沖(おき)の方(かた)へと漂(た)ひ去(い)りましたので、公(こう)は大(おほ)いに喜(よろこ)び、稲村ヶ崎(いなむらぎさき)の遠干潟(とほひがた)から、進(すす)んで鎌倉(かまくら)に進(すす)み入(い)らせられると、折(を)から浪風(なみかぜ)が強(つよ)く吹(ふ)いて、

鎌倉陥る

火(ひ)は二十ヶ所(じゅうに)所に飛(と)び、全市街(しよしげ)が火焰(くわえん)に包(か)まれ、さしも立派(りっぺ)であつた北條(きたじょう)の館(たね)も、瞬(またた)く内に灰(はい)となり、高時(たかとき)は一族(いっさく)と共に自害(じがい)し果(は)てましたので、公(こう)は早馬(はやま)三騎(さんき)を馳(は)せて、勝(かち)を行在(きんざい)所(しよ)へ奏聞(そうもん)させたのであります。

建武元年(けんぶげんねん)公(こう)は入朝(にゅうてう)して、從四位上(じゆうゐじやうじやう)に敍(じよ)せられ、左兵衛督(さへいゑとく)に任(た)じ、上野播磨(かみのへ)二國(にこく)の守護(しゆご)を領(りやう)して、京都(きやうと)に在勤(ざいじん)することゝなりました。所(ところ)が又(また)二年七月(にねんしちがつ)になつて、足利尊氏(あしかがたかうぢ)は護良親王(ごらうしん)を弑(ころ)し奉(たてまつ)り、十月上表(じゆがつじやうへう)して公(こう)の罪狀(ざいじやう)を訴(うた)へ、鎌倉(かまくら)に據(よ)つて反旗(はんき)を上げました。

そこで公(こう)は、尊氏(たかうぢ)の八罪(はつざい)を數(かぞ)へ、之(これ)を討伐(てうはく)する宣旨(せんし)を賜(たま)ひ、一宮尊良親王(いのみやたかうぢしん)を奉(たてまつ)じ、六萬七千人(むせんしちせん)の大軍(たいぐん)を率(ら)ひて、東海道(とうかいだう)を下(くだ)り、十一月二十五日(じゆいちごふにじふご)には、早くも尊氏(たかうぢ)の兵(へい)三萬七千餘人(さんまんしちせんご)と矢矧川(やせがは)に出會(で)つて、十七度(じゆしちど)まで戦(たたか)ひ、遂(つい)に之(これ)を破(やぶ)つて、十二月五日(じふごにがつご)には、直義(たかよし)の大兵(たいへい)と戦(たたか)つて之(これ)にも勝(か)ち、全軍破竹(ぜんぐんやぶたけ)の勢(いきほ)を以(もつ)て進(すす)みました。

かくて竹の下(たけのした)の戦(たたか)ひにも、公(こう)はよく將士(しやうし)を督勵(とくれい)せられましたが、一宮親王(いのみやしん)の兵(へい)が敗(ま)れたばかりか、一方(いっぽう)京都(きやうと)の混亂(えんらん)は其局(そのきよく)に達(た)し、公(こう)は朝命(あそのみこと)によつて、一

竹の下

矢矧川

尊良親王

足利尊氏

大渡

旦都に歸り、次いで尊氏は益々西に進むこととなりました。延元元年正月九日、尊氏は大兵を以て大渡にまで來ましたので、公は一萬の兵を率ゐて之を禦ぎ、賊を誘つて川を渡らせ、續けさまに射かけましたから、賊兵の溺死するもの千五百人に達した位です。

花頂山

正月十六日、公は二萬三千人の兵を以て、三方より尊氏を攻め、公自ら、花頂山に上つて謀を廻らし、比較的少數の兵を出して敵の大軍を惱ましたので、さすがの尊氏も、命からく西國の方へと逃げ延びました。

こゝで都は一旦穩かになり、天皇も御還幸遊ばされました、公は左近衛中將に任せられ、三月四日詔を下して、山陰山陽十六國を管して、尊氏の追討を仰せ付けられました。恰も此の時、公は病の爲めに、進むことが出来ませんでした、行義と氏明とが、先づ發することとなりました。

白旗城

かくて公は、五萬の大軍に將として、先づ赤松則村を白旗城に圍み、其他所在の敵を破りつゝ進まれましたが、四月二十六日尊氏は大軍を以て東上した爲めに、公の軍は一旦兵庫まで引き退いたのです。

そこで朝廷では、正成朝臣に詔して、公を援けさせました。五月二十五日尊氏直義は、水陸の兵數萬を率ゐて攻め込みましたので、義助朝臣は氏明と八千人を率ゐて、敵の水軍を禦ぎ、正成朝臣は麾下の兵七百を以て、陸軍に當りました。

此の時公は、二萬五千餘の大軍に將として、後方に控え、大に尊氏の軍と兵庫に戦ひましたが、官軍利なく、正成朝臣は不幸にも討死せられ、賊は水陸の二軍を合せて殺到しましたから、公は敵の大軍を縦横無盡に斬り倒し辛くも一方の血路を開いて、一時軍を退けられたのです。

藤島の役

之より後、公は益々力を盡して、朝敵退治に力められました。後北陸路に轉戦してから武運拙くなり、藤島の敵を攻むる時、敵の矢に眉間を射られ、今は之までぞと、自ら首を掻き切つて、泥の中に埋め、其上に打伏して、見事なる戦死を遂げられました。時に年三十八歳であります。されど公の靈は、明治九年十一月、別格官幣社に祀られ、藤島神社の號をさへ賜つて、芳名を千載の後に残して居られます。

結城神社 (津市大字)

藤原宗廣

伊勢國阿漕停車場から、二十五町ばかりの地に結城神社があります。祭神は南朝の忠臣結城上野介藤原宗廣朝臣です。宗廣は陸奥國白河の人、大職冠



結城宗廣公之墓

鎌足公の後裔鎮守府將軍藤太秀郷より出た、結城朝光の孫、祐廣の子でありました。

後醍醐天皇
北條高時

共に、先づ鎌倉を攻めて北條高時を滅し、同じ年の冬北島顯家卿皇子義良親王を奉じて、奥羽地方に下らるゝに當り、式評定衆となつて政に興り、首尾よく二國を定められたのです。

足利尊氏

かくて建武二年、足利尊氏が朝廷に叛くに當り、其冬顯家卿と軍勢を整へ、皇子に従つて本國を出で、延元元年都に進み入り、各所の賊兵を破つて屢々功を樹てましたが、やがて尊氏は九州に逃げ去りましたので、又もや顯家卿と、皇子を奉じて東國に歸りました。

北島顯家

すると尊氏は、再び大軍を以て皇居を犯しましたので、宗廣は直にも都へ上らうとしましたが、折悪く陸奥にも賊が起りましたから、之を平けて置いて、翌年の八月に、又々顯家卿と共に、皇子を連れて本國を出で、鎌倉まで進み、三年美濃から伊勢を経て、大和の奈良へ出やうとしたのです。

阿都野の戦

併し此の路には、要所々に、敵軍が構え居りますから、中々容易な事ではなく、幾度かの合戦に勝利を得て、攝津國まで行くと、同國阿都野の戦に、不幸にも力と頼む顯家卿は、花々しき戦死を遂げられましたので、吉野の行宮さして、落ち延びなされた皇子の後を追つて、兎も角も吉野まで赴きまし

南朝の忠臣

所が南朝の忠臣たる、楠、新田、名和、菊池など云ふ人々は、前後して戦

結城神社 (別格官幣社)